財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第486集

下斎田重土薬師遺跡

国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０

群　馬　県　高　崎　土　木　事　務　所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、高崎市下斎田町に所在し、国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴い発掘調査された下斎田重土薬師遺跡の調査報告書です。発掘調査は、群馬県高崎土木事務所からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成20・21年度に実施しました。

今回の調査により、縄文時代から江戸時代の遺構と遺物などが出土し、この地域に古くから先人たちの生活が展開していたことが明らかとなりました。

特に、平安時代の住居跡と水田跡の発見は、古代の景観を雄弁に語る成果となりました。また、本地域は鎌倉時代に守護安達氏が関係した地域として広く知られており、隣接する下滝高井前遺跡も含めて、中世に比定される生活遺構が見つかったことは、今後の地域解明にきっと寄与できるものと考えます。

この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の資料として学校教育、郷土学習にも役立てていただけるものと確信いたしております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県県土整備部および高崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会および地元関係者の皆様からご指導、ご協力を賜りました。心より感謝の意を表し、序といたします。

平成22年１月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長　須　田　栄　一

例　言

１．本書は、国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴い発掘調査された下斎田重土薬師遺跡の調査報告書である。

２．下斎田重土薬師遺跡は、群馬県高崎市下斎田町字重土薬師400番地ほかに所在する。

３．事業主体　群馬県(高崎土木事務所)

４．調査主体　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

５．調査期間　平成21年(2009) １月１日～平成21年(2009) ３月31日
　　平成21年(2009) ８月17日～平成22年(2010) ３月31日(下滝高井前遺跡含む)

６．整理期間　平成21年(2009) ９月１日～平成21年(2009)11月30日

７．発掘調査体制は次のとおりである。

平成20年度

管理指導　理事長　高橋勇夫、常務理事　木村裕紀・津金澤吉茂、調査研究部長　飯島義雄、
調査研究GL 原雅信、総務GL　笠原秀樹、経理GL　佐嶋芳明

事務担当　係長(総括)須田朋子、斉藤恵利子、柳岡良宏、矢島一美、齋藤陽子、今井もと子、若田誠、
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典

調査担当　桜岡正信、真下裕章(１月)

平成21年度

管理指導　理事長　高橋勇夫・須田栄一、常務理事(事業局長)　木村裕紀、事業局長　相京建史、
総務部長　笠原秀樹、調査研究部長　飯島義雄、調査研究GL　唐澤至朗、経理GL　佐嶋芳明

事務担当　係長(総括)須田朋子、柳岡良宏、田口小百合、矢島一美、高橋次代、今井もと子、若田誠、
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典

調査担当　菊池実、山田精一

８．整理事業体制は次のとおりである。

管理指導　理事長　高橋勇夫・須田栄一、常務理事(事業局長)　木村裕紀、事業局長　相京建史、
総務部長　笠原秀樹、資料整理部長　石坂茂、
資料整理第２GL 大木紳一郎、経理GL　佐嶋芳明

事務担当　係長(総括)須田朋子、柳岡良宏、田口小百合、矢島一美、高橋次代、今井もと子、若田誠、
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典

整理担当　編集　飯森康広、実測　関晴彦、橋本淳、岩崎泰一、デジタル編集　齊田智彦

金属器保存処理　関邦一、津久井桂一、多田ひさ子、増田政子

機械実測　田中精子、町田礼子、田所順子、木原幸子、岸弘子、福島瑞希

デジタル写真図版作成　牧野裕美、市田武子、酒井史恵、廣津真希子、安藤美奈子、矢端真観、髙梨由美子、
横塚由香、須藤絵美、下川陽子

９．本書作成の担当は次のとおりである。

編集・本文執筆　飯森康広、デジタル編集　齊田智彦

遺物観察　古墳時代以降土器　関晴彦、縄文土器　橋本淳、縄文時代石器　岩崎泰一
中世・近世陶磁器　大西雅広

遺物年次比定　弥生・古墳時代土器　友廣哲也、埴輪　徳江秀夫、奈良･平安時代土器　桜岡正信、
古代瓦　木津博明

遺構写真撮影　桜岡正信、真下裕章、山田精一

遺物写真撮影　佐藤元彦

石材同定　飯島静男、植物珪酸体分析　パリノ・サーヴェイ株式会社

10. 保管については、出土遺物は群馬県の所有となり、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管される。

11. 発掘調査および本書の作成では、以下の方々にご協力ならびに指導をいただいた。記して感謝の意を表します(敬称略)。

群馬県教育委員会、群馬県高崎土木事務所、高崎市教育委員会

凡　例

１．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

２．遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。

住居跡・掘立柱建物跡	１：６０	住居跡のカマド	１：３０	土坑・ピット	１：４０
井 戸 跡	１：６０	溝	１：８０	水田跡	１：２００

３．遺構図中の網掛けは、下記のとおりである。

焼土範囲　　石　　Ａｓ－Ａ　Ａｓ－Ｂ

４．遺物図の縮尺は原則下記のとおりであり、それ以外の場合のみ、各挿図番号に()書きを付した。

石鏃　１：１　鉄器・火打ち石　１：２　縄文土器破片　１：３　打製石斧・凹石、こも網石　１：３
杯・椀類、壺甕類破片(土師器・須恵器・陶磁器)　１：３　大型杯、器台、壺甕類　１：４

５．火山噴火物の表記は下記のとおりである。なお、純堆積の場合はテフラ名(Ａｓ－Ｂなど)を使用し、埋没土に含まれる場合は軽石名(浅間Ｂ軽石）を使用した。また、包含する土層をＡ混土、Ｂ混土と呼称した。

Ａｓ－Ａ：浅間Ａ軽石　　天明３年(1783)　　Ａｓ－Ｂ：浅間Ｂ軽石　　天仁元年(1108)
Ｈｒ－ＦＡ：榛名二ツ岳火山灰　　６世紀初頭

６．竪穴住居跡の主軸方位については、カマドを有する辺に対して直交方向を主軸として計測した。カマドを有しないものについては、長辺を主軸として計測した。

７．掘立柱建物跡の全体規模については、梁間×桁行の順で示し、主軸方位については棟方向を計測した。

８．Ａｓ－Ｂの降下直下で発見された水田跡を、便宜上「Ｂ下水田跡」と呼称した。

９．遺構名称および付番については、原則調査時点のものをそのまま使用した。このため、以下のとおり欠番が生じた。この場合、遺構番号の振り替えにより欠番とならなかったものは除外する。なお、欠番には位置不明遺構も含まれる。

土坑　７・10・30・32・33・46・47・48号土坑
溝　　８号溝

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
写真図版目次

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要
1　発掘調査に至る経過・・・・・・・・・・・1
2　整理業務の経過・・・・・・・・・・・・・1
3　遺跡の立地と周辺遺跡
(1)遺跡の立地　・・・・・・・・・・・・・・3
(2)周辺の遺跡　・・・・・・・・・・・・・・4
4　発掘調査の方法と経過
(1)グリッドの設定　・・・・・・・・・・・・8
(2)調査区の設定　・・・・・・・・・・・・・8
(3)調査の方法　・・・・・・・・・・・・・・8
(4)調査の経過　・・・・・・・・・・・・・・9
(5)整理作業の経過　・・・・・・・・・・・・9
Ⅱ　発掘調査の記録
1　遺跡の概要
(1)基本土層　・・・・・・・・・・・・・・・10
(2)遺構の概要　・・・・・・・・・・・・・・10
2　遺構と遺物
(1)竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・13
(2)掘立柱建物跡　・・・・・・・・・・・・・22
(3)土坑
ア 古墳時代～平安時代 ・・・・・・・・・24
イ 中世・近世 ・・・・・・・・・・・・・24
(4)井戸　・・・・・・・・・・・・・・・・・32
(5)ピット
ア 古墳時代～平安時代 ・・・・・・・・・33
イ 中世・近世 ・・・・・・・・・・・・・33
(6)溝
ア 古墳時代～平安時代 ・・・・・・・・・35
イ 中世・近世 ・・・・・・・・・・・・・35
(7)水田跡　・・・・・・・・・・・・・・・・51
(8)サク状遺構　・・・・・・・・・・・・・・53
(9)遺物集中遺構　・・・・・・・・・・・・・53
(10)遺構外遺物 ・・・・・・・・・・・・・・55
(11)まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・55
3　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・59

遺物観察表
写真図版
抄録

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２図　国道354号高崎玉村バイパス路線図 ・・ 2
第３図　遺跡周辺の地形・・・・・・・・・・・・ 3
第４図　周辺遺跡(１：25,000)・・・・・・・・・ 4
第５図　下斉田遺跡Ｃ・Ｄ区全体図・・・・・・ 6
第６図　グリッド設定図・・・・・・・・・・・・ 8
第７図　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第８図　全体図(１)(1：500)
　・北４区詳細図(１：200) ・・・・・・ 11
第９図　全体図(２)(1：500)
　・北２区詳細図(１：200) ・・・・・・ 12
第10図　１号住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 13
第11図　１号住居跡ピット
　・カマド・掘り方・床下土坑 ・・・・・ 14
第12図　１号住居跡出土遺物(１) ・・・・・・・ 15
第13図　１号住居跡出土遺物(２) ・・・・・・・ 16
第14図　２・３号住居跡・・・・・・・・・・・・ 17
第15図　２・３号住居跡カマド
　・掘り方・床下土坑 ・・・・・・・・・ 18
第16図　２号住居跡出土遺物(１) ・・・・・・・ 19
第17図　２号住居跡出土遺物(２) ・・・・・・・ 20
第18図　２号住居跡出土遺物(３) ・・・・・・・ 21
第19図　３号住居跡出土遺物(１) ・・・・・・・ 21
第20図　３号住居跡出土遺物(２) ・・・・・・・ 22
第21図　１号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・ 22
第22図　２号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・ 23
第23図　18・21・23・36・45・49 ～ 51号土坑 ・ 25
第24図　１～６・８・９・11号土坑・・・・・・ 27
第25図　12 ～ 17・19・20・22号土坑 ・・・・・ 28
第26図　24 ～ 29・31・34・35・37号土坑 ・・・ 30
第27図　38 ～ 44号土坑平・断面図、
　14・39号土坑出土遺物・・・・・・・・ 31
第28図　１～３号井戸跡、
　１・２号井戸跡出土遺物・・・・・・・ 32
第29図　36号ピット出土遺物・・・・・・・・・ 33
第30図　ピット（古墳時代～平安時代) ・・・・ 34
第31図　ピット（中世・近世）・・・・・・・・ 34
第32図　９・15・28号溝、９・28号溝出土遺物・ 36
第33図　29・48号溝・・・・・・・・・・・・・ 37
第34図　１～６号溝・・・・・・・・・・・・・ 38
第35図　７・10 ～ 14号溝 ・・・・・・・・・・ 39
第36図　16 ～ 18号溝 ・・・・・・・・・・・・ 41
第37図　19・20・46号溝・・・・・・・・・・・ 42
第38図　21 ～ 25号溝 ・・・・・・・・・・・・ 43
第39図　26・27・30号溝・・・・・・・・・・・ 44
第40図　31・32・35・36号溝・・・・・・・・・ 45
第41図　33・34・37・38号溝・・・・・・・・・ 46
第42図　16・18・19・26・34・38号溝出土遺物・ 47
第43図　38号溝出土遺物(２) ・・・・・・・・・ 48
第44図　39 ～ 45・47号溝 ・・・・・・・・・・ 49
第45図　49・50号溝・・・・・・・・・・・・・ 50
第46図　Ａｓ－Ｂ下水田跡(１) ・・・・・・・・ 51
第47図　Ａｓ－Ｂ下水田跡(２) ・・・・・・・・ 52
第48図　Ａｓ－Ｂ下水田跡東大畦・サク状遺構・ 53
第49図　遺物集中遺構、同出土遺物(１) ・・・・ 54
第50図　遺物集中遺構出土遺物(２)・・・・・・ 55
第51図　遺構外出土遺物(１)・・・・・・・・・ 56
第52図　遺構外出土遺物(２)・・・・・・・・・ 57
第53図　遺構外出土遺物(３)・・・・・・・・・ 58
第54図　各地点の模式柱状図・・・・・・・・・ 59
第55図　各地点の植物珪酸体含量の層位的変化・ 63

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・ 7
第２表　掘立柱建物跡計測表・・・・・・・・・ 23
第３表　ピット計測表・・・・・・・・・・・・・ 33

写 真 図 版 目 次

ＰＬ１
１．遺跡遠景(東上空から)
２．遺跡遠景(西上空から)
ＰＬ２
１．北２区全景(上が北)
２．北３区全景(上が北)
ＰＬ３
１．北４区全景(上が北)
２．南４区全景(上が北)
ＰＬ４
１．南２・３区全景(上が北)
２．南１区全景(西から)
ＰＬ５
１．１号住居跡全景(西から)
２．１号住居跡掘り方全景(西から)
ＰＬ６
１．２・３号住居跡全景(西から)
２．２・３号住居跡掘り方全景(西から)
ＰＬ７
１．１号掘立柱建物跡全景(南から)
２．２号掘立柱建物跡全景(南から)
ＰＬ８
１．18号土坑全景(南から)
２．21号土坑全景(南から)
３．23号土坑全景(南から)
４．36号土坑全景(東から)
５．45号土坑全景(南から)
６．49号土坑全景(南から)
７．50号土坑全景(北から)
８．51号土坑全景(北から)
９．１号土坑全景(北から)
10．１号土坑土層断面(南から)
11．２号土坑全景(西から)
12．２号土坑土層断面(南から)
13．３号土坑全景(北から)
14．３号土坑土層断面(南から)
15．６号土坑全景(南から)
ＰＬ９
１．４号土坑全景(西から)
２．４号土坑土層断面(西から)
３．５号土坑全景(北から)
４．５号土坑土層断面(南から)
５．８号土坑全景(東から)
６．９号土坑全景(北から)
７．11号土坑全景(東から)
８．12号土坑全景(北から)
９．13号土坑全景(北から)
10．16号土坑全景(南から)
11．19号土坑全景(西から)
12．20号土坑全景(西から)
13．22号土坑全景(南から)
14．24号土坑全景(西から)
15．25号土坑全景(北から)
ＰＬ10
１．27号土坑全景(西から)
２．28号土坑全景(南から)
３．29号土坑全景(南から)
４．34号土坑全景(北から)
５．35号土坑全景(南から)
６．37号土坑全景(南から)
７．38号土坑全景(南から)
８．39号土坑全景(東から)
９．40・41・42号土坑全景(西から)
10．43号土坑全景(北から)
11．44号土坑全景(東から)
ＰＬ11
１．１号井戸跡全景(西から)
２．１号井戸跡土層断面(南東から)
３．２号井戸跡全景(北から)
４．２号井戸跡土層断面(西から)
５．３号井戸跡全景(南から)
PL12
１．１号ピット全景(西から)
２．１号ピット土層断面(西から)
３．２号ピット全景(西から)
４．２号ピット土層断面(西から)
５．３号ピット全景(北から)
６．３号ピット土層断面(南から)
７．４号ピット全景(北から)
８．４号ピット土層断面(南から)
９．５号ピット全景(北から)
10．５号ピット土層断面(南から)
11．北４区ピット群全景(南東から)
PL13
１．９号溝全景(北から)
２．９号溝土層断面(北から)
３．15号溝全景(南から)
４．28号溝全景(南から)

PL14

１．29号溝全景(南から)
２．１・２号溝全景(北から)
３．２号溝土層断面(北から)
４．５・11号溝全景(北から)
５．３・４号溝全景(北から)
６．13号溝全景(北から)

ＰＬ15

１．６・７号溝全景(北東から)
２．７号溝土層断面(西から)
３．10号溝全景(北から)
４．10号溝土層断面(南から)
５．12号溝全景(北から)
６．14号溝全景(東から)

ＰＬ16

１．16号溝全景(南から)
２．16号溝遺物出土状況(西から)
３．16～18号溝全景(南から)
４．18号溝遺物出土状況(西から)
５．19・46号溝全景(西から)
６．19号溝遺物出土状況(北から)
７．24・25号溝全景(南から)

ＰＬ17

１．20号溝全景(南から)
２．26号溝全景(南から)
３．27号溝全景(西から)
４．31号溝全景(南から)
５．32号溝全景(南西から)

ＰＬ18

１．30号溝全景(西から)
２．34号溝全景(南から)
３．35号溝全景(東から)
４．36号溝全景(東から)
５．37号溝全景(東から)
６．38号溝全景(東から)

ＰＬ19

１．38号溝全景(西から)
２．39号溝全景(南から)
３．43号溝土層断面(南から)
４．44・45号溝土層断面(南から)
５．47号溝全景(南から)
６．48号溝全景(北から)
７．49号溝全景(北から)
８．50号溝全景(東から)

ＰＬ20

１．Ｂ下水田跡西大畦全景(上が北)
２．Ｂ下水田跡畦周辺(上が北)

ＰＬ21

１．Ｂ下水田跡西大畦近景(北から)
２．Ｂ下水田跡東大畦土層断面(南から)
３．Ｂ下水田跡土層断面(南から)
４．サク状遺構全景(東から)
５．遺物集中遺構全景(東から)
６．自然科学分析資料２地点採取断面(南から)
７．調査前風景(西から)

ＰＬ22　１・２号住居跡出土遺物
ＰＬ23　２・３号住居跡出土遺物
ＰＬ24　３号住居跡・土坑・井戸
　　・ピット・溝出土遺物
ＰＬ25　遺物集中遺構・遺構外出土遺物
ＰＬ26　遺構外出土遺物

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1　発掘調査に至る経過

本遺跡の発掘調査・整理業務は、一般国道354号高崎玉村バイパスの整備を目途とした「地域活力基盤創造事業」に係わっている。国道354号高崎玉村バイパスの整備は、平成５年度(1993)から延長5.3㎞が着手され、平成18年(2006)には主要地方道藤岡大胡線から2.0㎞が供用開始されている。

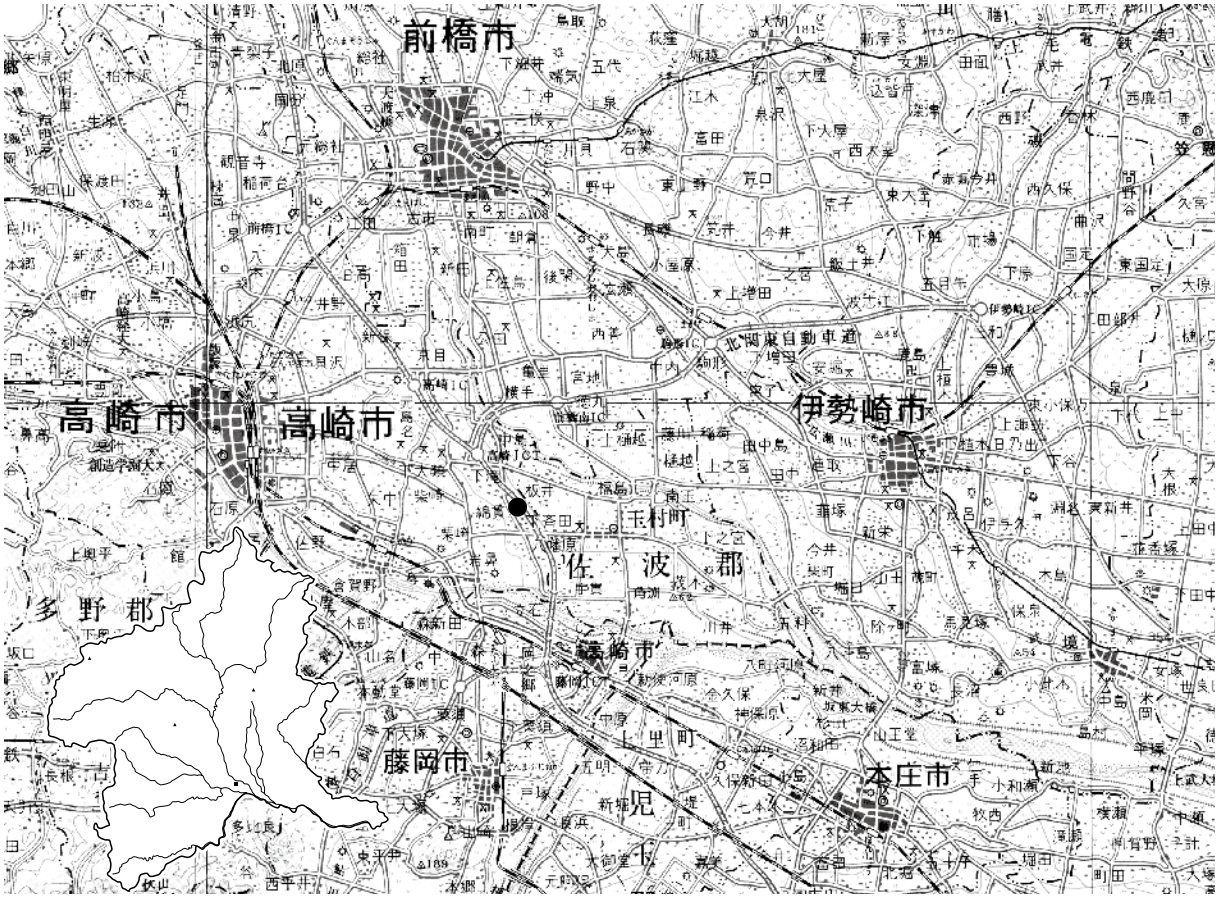
玉村町内の発掘調査は、群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所所管事業として、平成８年度(1996)から実施されている。

本遺跡は高崎市内であり、群馬県西部県民局高崎土木事務所の所管事業となる。平成20年６月18日から７月４日までの4日間、下滝町地区、綿貫町地区をあわせて、群馬県教育委員会文化財保護課による試掘調査が行われ、遺跡地と確認された。その後調整の結果、同９月10日付けで群馬県西部県民局高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が「埋蔵文化財発掘調査・整理委託契約書」を締結し、調査面積5,310m^{2}の発掘調査を行うこととなった。なお、計画の一部変更により、翌21年１月、同３月の２回、変更委託契約が締結され、調査面積が4,973m^{2}に変更された。

平成21年度は、残る337㎡が調査対象となり、平成21年８月14日付けで群馬県西部県民局高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が「埋蔵文化財発掘調査・整理委託契約書」を締結して、発掘調査を行った。

2　整理業務の経過

平成21年８月31日付けで群馬県西部県民局高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が締結した「整理委託契約書」に基づき、契約履行期間同年９月1日～翌22年１月31日で実施することとなり、整理期間を同年９月1日～同11月30日と定めて、整理業務を実施した。



第１図　遺跡位置図(国土地理院1/20万「宇都宮」「長野」使用)

第２図　国道354号高崎玉村バイパス路線図

3　遺跡の立地と周辺遺跡

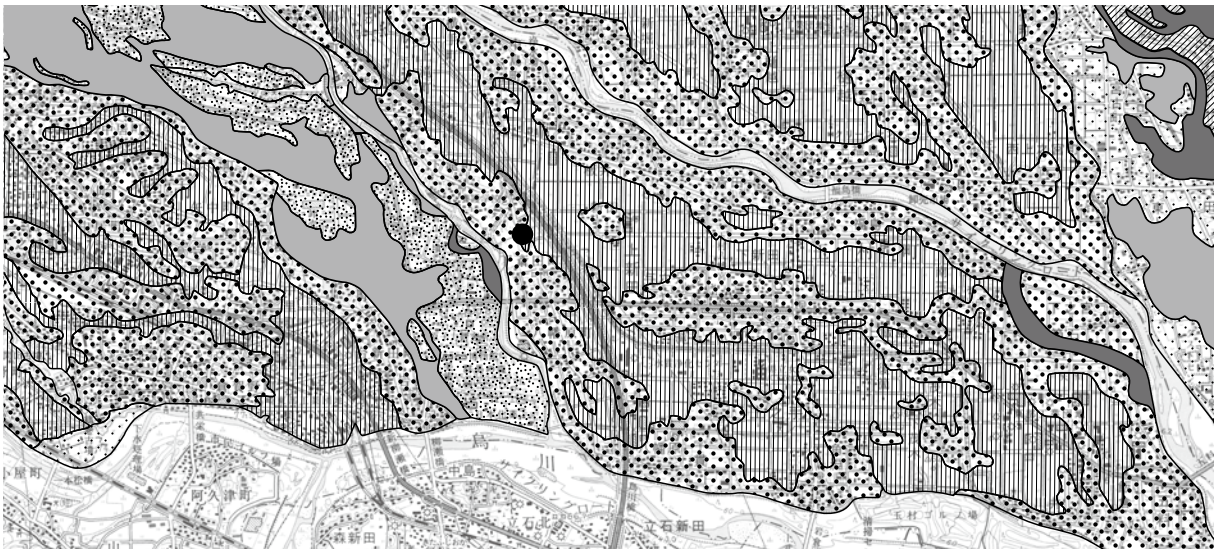
(1)遺跡の立地

本遺跡は、群馬県高崎市の東南に位置する下斎田町に所在し、集落から北方約200mほど離れた田園地帯にある。周辺の地形は、北西方向から南東方向に緩やかに傾斜する比較的平坦な地形で、標高は約76mである。東方は佐波郡玉村町上新田に隣接し、南北に走向する関越自動車道と、平行して流れる一級河川滝川を境界としている。

遺跡の立地は、前橋台地の南端に位置する。この前橋台地は、洪積世後期に利根川によって形成された前橋砂礫層(層厚200m以上)の上面に、約2.0～2.4万年前に発生したと見られる浅間山の山体崩壊を起因とする前橋泥流が被覆して形成したものである。この土層は前橋泥流堆積層と呼ばれ、西は高崎市の旧群馬町域から高崎市北・東部の平野部に広がり、東は前橋市の北東部から伊勢崎市西部にかけて10m以上の厚さで堆積して、烏川と広瀬川に挟まれた県央平野部の基盤層となっている。前橋泥流堆積層の上位には、シルト・粘土・泥炭層などによって構成される水成ローム層が堆積しており、本遺跡の調査最終面となっている。

前橋台地上には、洪積世後期以降、利根川をはじめとする幾つかの河川が、小規模な氾濫原を形成していった。特に台地の東側を流れる利根川は、榛名山東南麓の末端を浸食しながら南流し、約2.4万年前には前橋市総社町辺りから新前橋駅付近を経て、染谷川、滝川付近を流れ、井野川に注いでいたとされる。その後、約1.7万年前には榛名山で発生した泥流によって埋まり、流路を赤城山南麓の広瀬川低地帯に変更しおり、現在の流路に移ったのは中世後期と言われている。

本遺跡の西方約300mを南流する井野川は、榛名山南麓を水源とする河川で、前橋台地を西の倉賀野台地、東の前橋玉村台地に二分している。現在の流路は、前橋玉村台地の西縁を画するように流れている。一方、倉賀野台地東縁を画する河崖地形は、粕川に沿って形成されている。井野川左岸と粕川右岸の河崖線の間隔は1.2～1.5kmであり、その間は一段低位の沖積平野があり、井野川寄りを微高地として西方粕川に向かって低湿な地形となる。



(IM)井野川泥流堆積面
(LP)前橋・伊勢崎台地上の微高地
(BP)前橋・伊勢崎台地上の後背湿地
(MC)広瀬川低地帯の旧中州(浅間Ｂテフラ降灰後)
(BM)河成段丘(後背湿地:完新世)
(CB)河成段丘(旧中州:完新世)

第３図　遺跡周辺の地形

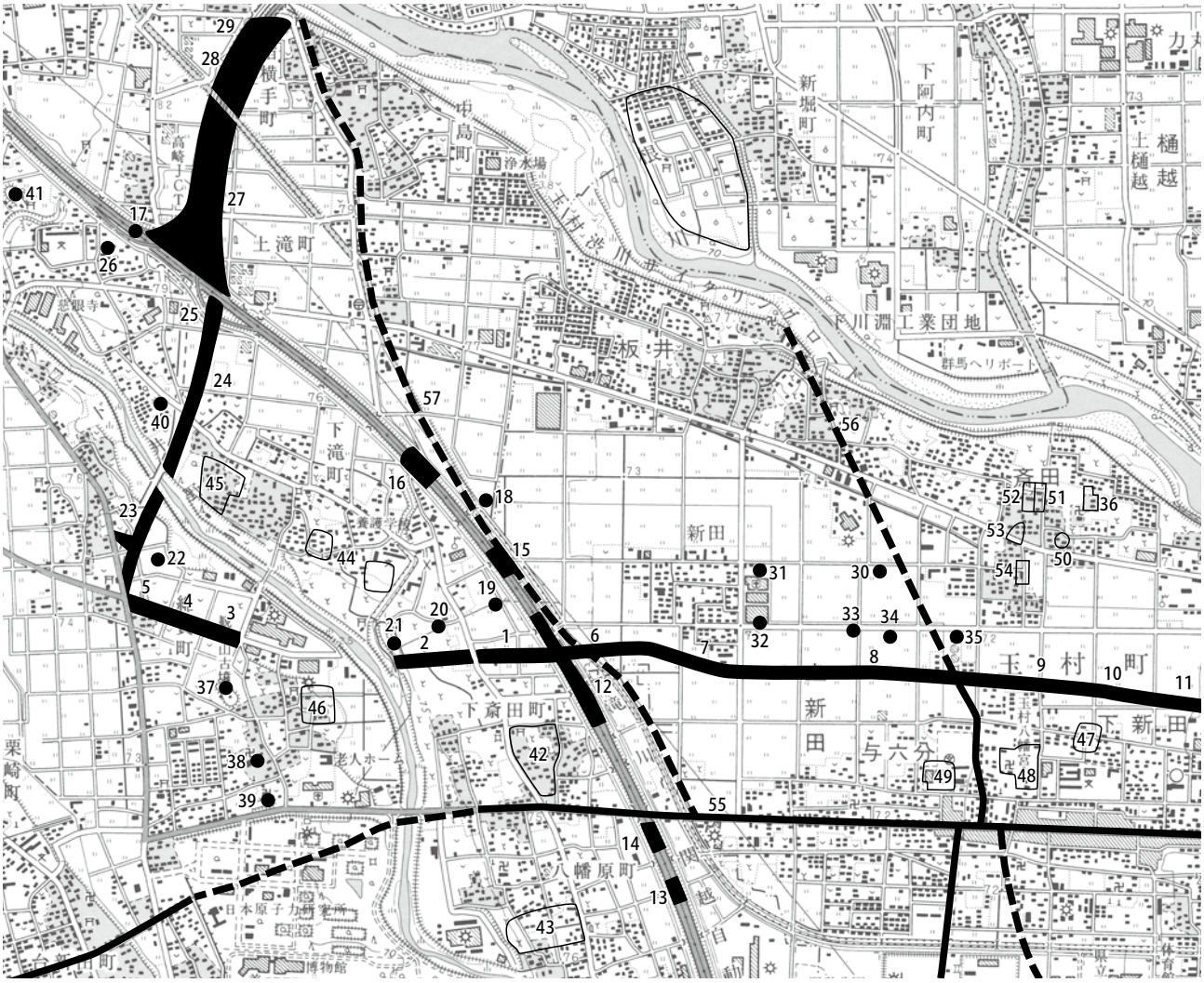
(2)周辺の遺跡

縄文時代　縄文時代の遺跡は少ないが、井野川流域の段丘上で確認されている。同左岸の八幡原Ａ遺跡(13)では前期(諸磯式期)の住居１軒が発見され、元島名遺跡では後期、同右岸の高崎情報団地遺跡でも中期以降の遺構・遺物が確認されている。本遺跡と接する下斉田遺跡(12)Ｄ区でも中期末の土坑１基と、前期・中期の土器が出土している。玉村町域における遺跡の分布は非常に希薄である。

弥生時代　高崎市は弥生時代の集落が数多く検出されており、本遺跡周辺では元島名遺跡で中期～後期の住居跡、高崎情報団地遺跡では後期の方形周溝墓や住居跡が調査されている。玉村町域における遺跡の分布は非常に希薄である。

古墳時代　井野川左岸地域には、元島名将軍塚古墳(41)を中核とする前期古墳群と、滝川村２号古墳等の前方後円墳を中核とする後期古墳群が形成されている。下滝町から本遺跡周辺下斎田町にかけては、古墳分布の過疎地域が存在している。下斎田町では円墳の分布域が存在したが、現在は消滅して明らかではない。隣接する下斉田遺跡(12)Ｄ区では、方形周溝墓１基が調査されている。

井野川左岸河縁域において、最も古墳群が密集するのは、高崎市八幡原町から玉村町下郷にかけて、烏川合流点を中心とした地域である。前期古墳・周溝墓群の分布がある一方で、後期古墳群の濃密な分布も広がっている。



第４図　周辺遺跡(１：25,000)

奈良・平安時代　隣接する下斉田遺跡(12)Ｄ区では、竪穴住居跡３軒と掘立柱建物跡５棟が見つかっている。本遺跡と同じ路線で西方に位置する下滝高井前遺跡(２)では、100軒を超える竪穴住居跡が調査されており、そのうち相当数が古代に属する大集落を形成している。井野川右岸の綿貫町でも、国道354号路線の綿貫伊勢遺跡(３)、綿貫牛道遺跡(４)、綿貫原北遺跡(５)で集落が見つかっている。その北方、綿貫遺跡(22)では９世紀代と推定される綿貫廃寺が見つかっており、近接する綿貫小林前遺跡(23)でも同時期の集落に加え、門跡や大型の掘立柱建物跡も見つかっている。

中世　玉村町内には公領とされる玉村保があったが、12世紀中頃一部が伊勢神宮領となり玉村御厨が成立する。鎌倉幕府下で「上野国奉行人」として守護権力を行使した安達盛長は、指揮権を上野国内の国衙や寺社にまで及ぼしており、大犯三箇条に規定される守護権力に比べると、より広範な権限を持っていた。上野国奉行人は安達盛長に始まり、景盛－義景－泰盛と継承されていく。安達氏の本拠は幕府内の要人として鎌倉にあったが、上野国内にも基盤を持ち、玉村氏や飽間氏を被官化していった。角淵八幡宮は初代奉行人安達盛長の勧請という伝承があり、近くに安達屋敷と伝承される場所がある。また、もう一か所、八幡原館(43)も安達屋敷の伝承を持ち、現在でもよく遺構を残している。こうした状況下、鎌倉街道も本遺跡周辺を通過することが想定され、一説に本遺跡と下滝高井前遺跡の間を南北に走る市道を、鎌倉街道に当てるものがある(『玉村町誌』通史編上巻図６)。

弘安８年(1285)、安達泰盛は霜月騒動により滅亡し、玉村氏も合わせて没落したと言われる。以後、北条得宗家は玉村御厨の多くを編入し、守護権力も獲得していった。

室町期になると、那波氏が勢力を伸ばし、上州白旗一揆の構成員として、上野守護山内上杉氏の被官となる一族も現れる。関東管領上杉氏と古河公方足利成氏が争った享徳の乱(享徳３年[1455] ～文明14年[1483])では、玉村町角淵が戦場となり、岩松持国が在陣している。角淵は上野国と武蔵国の境となる烏川を渡る渡河点であり、江戸時代における佐渡奉行街道(57)にも受け継がれていった。

享徳の乱において、文明９年(1477)古河公方成氏が半年近くも陣所とした滝・島名陣は、下滝館(45)に比定されおり、周辺には8,000人余の軍勢が張陣したという。この陣内には、八幡原館(43)や下斎田城(42)も含まれていたはずで、本遺跡周辺がその渦中にあったことは容易に想像される。

近世　本遺跡の東方約150mを南流する滝川は、もともと天狗岩用水と呼ばれ、北群馬郡吉岡町付近で利根川から取水し、前橋市西部から高崎市東部を経て玉村町に至る広範囲な地域を潤すかんがい用水である。この用水は、総社城主秋元長朝によって慶長９年(1604)に完成し、さらに同15年から幕府代官伊奈備前守忠次が、玉村町下之宮まで延長工事を行い、新田開発を推進している。

正保4年(1647)以降は、日光例幣使街道(55)が整備され、宿場町玉村宿が繁栄期を迎える。

第５図　下斉田遺跡Ｃ・Ｄ区全体図

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	縄文	古墳	奈良・平安	中世	近世	参考文献
1	下斎田重土薬師遺跡		○	○		○	本報告書
2	下滝高井前遺跡		○	○			『年報28』団2009
3	綿貫伊勢遺跡		○	○			『年報27』団2008
4	綿貫牛道遺跡		○	○			『年報28』団2009
5	綿貫原北遺跡		○	○	○	○	『年報27』団2008
6	上新田新田西遺跡			○	○		『年報28』団2009
7	上新田赤塚遺跡				○	○	『年報28』団2009
8	上新田中道東遺跡		○	○			『年報24』団2005
9	斉田中耕地遺跡		○	○	○	○	『年報22』団2003 ／『年報23』団2004 ／『年報24』団2005
10	斉田竹之内遺跡		○	○	○	○	『年報20』団2001 ／『年報21』団2002 ／『年報22』団2003
11	福島飯玉遺跡			○	○	○	『福島飯玉遺跡』団2008
12	下斉田・滝川Ａ遺跡		○	○			『下斉田・滝川Ａ遺跡　滝川Ｂ・Ｃ遺跡』団1987
13	八幡原Ａ遺跡	○			○		『八幡原Ａ・Ｂ上滝元島名Ａ遺跡』団1981
14	八幡原Ｂ遺跡				○		『八幡原Ａ・Ｂ上滝元島名Ａ遺跡』団1981
15	滝川Ｂ遺跡		試掘				『下斉田・滝川Ａ遺跡　滝川Ｂ・Ｃ遺跡』団1987
16	滝川Ｃ遺跡		○				『下斉田・滝川Ａ遺跡　滝川Ｂ・Ｃ遺跡』団1987
17	上滝遺跡		○	○	○		『八幡原Ａ・Ｂ上滝元島名Ａ遺跡』団1981
18	上滝社宮司東遺跡		○	○			『上滝社宮司東・斉田北遺跡　下滝高井前・赤城遺跡』高崎市遺跡調査会1990
19	上滝斉田北遺跡		○	○			
20	下滝高井前遺跡		○				
21	下滝赤城遺跡		○		○		
22	綿貫遺跡		○	○	○		『綿貫遺跡』高崎市教育委員会1985
23	綿貫小林前遺跡		○	○	○	○	『綿貫小林前遺跡』団2006
24	下滝天水遺跡		○	○	○	○	『下滝天水遺跡』団2004
25	上滝五反畑遺跡		○	○	○	○	『上滝五反畑遺跡』団1999
26	上滝Ⅱ遺跡		○	○	○	○	『上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡』団2002
27	上滝榎町北遺跡		○	○	○	○	『上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡』団2002
28	宿横手三波川遺跡		○	○	○	○	『宿横手三波川遺跡』団1999 ／
29	西横手遺跡群		○	○	○	○	『西横手遺跡群』団2001
30	一本木遺跡			○			『一本木遺跡』玉村町教育委員会2004
31	中道西遺跡			○			『中道西遺跡(第1次・第2次調査)』玉村町教育委員会1996
32	中道西Ⅱ遺跡			○		○	『中道東遺跡中道西Ⅱ遺跡蛭堀東遺跡(第2次調査)・中道東Ⅱ遺跡・中道東Ⅱ遺跡(第2次調査)』玉村町教育委員会2008
33	中道東遺跡			○		○	
34	中道東Ⅱ遺跡			○			
35	蛭沼東遺跡			○			
36	田口下屋敷遺跡				○	○	『田口下屋敷遺跡』玉村町教育委員会2000
37	綿貫観音山古墳	全長101m・前方後円墳・横穴式石室					『綿貫観音古墳Ⅰ』団1998、『綿貫観音山古墳Ⅱ』団1999
38	普賢寺裏古墳	全長71m・前方後円墳・竪穴式石室					
39	不動山古墳	全長94m・前方後円墳・竪穴式石室					
40	御伊勢山古墳	全長30m・前方後円墳・横穴式石室					
41	元島名将軍塚古墳	全長95m・前方後方墳・粘土槨					
42	下斎田城	高崎市下斎田町。伝承田口氏関連。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
43	八幡原館	高崎市八幡原町。伝安達屋敷。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
44	下滝屋敷	高崎市下滝町。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
45	下滝館	高崎市下滝町。古河公方滝陣比定地。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
46	堀米屋敷	高崎市綿貫町。堀篭大学在所。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
47	玉村館	玉村町下新田。近世伊奈半十郎陣屋。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
48	玉村八幡宮	玉村町下新田。堀・土居廻る。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
49	与六屋敷	玉村町与六分。伝早川与六在所。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
50	田村屋敷	玉村町齋田。伝田村氏関連。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
51	温井東屋敷	玉村町齋田。伝温井氏関連。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
52	温井西屋敷	玉村町齋田。伝温井氏関連。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
53	町田屋敷	玉村町齋田。伝町田氏関連。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
54	石原屋敷	玉村町齋田。伝石原氏関連。					『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
55	日光例幣使街道	中山道倉賀野宿と日光を結ぶ近世街道。					『日光例幣使街道』群馬県教育委員会1978
56	鎌倉街道	鎌倉幕府へ向かう中世の街道。					『鎌倉街道』群馬県教育委員会1983
57	佐渡奉行街道	江戸と越後を結ぶ近世街道。					『佐渡奉行街道』群馬県教育委員会1981

４　発掘調査の方法と経過

(1)グリッドの設定(第６図)

国道354号高崎玉村バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査においては、国家座標に基づき玉村町全域および高崎市内の該当地域を網羅するように、南東隅の座標Ｘ＝30,000・Ｙ＝－60,000を起点とする10km四方の区画を設定し、これを「地区」と呼称した。

この「地区」を１km四方に細分し、南東隅から北方向に１～100の番号を付け「区」(大区画)とした。さらに、「区」を100m四方に分割し、同様に１～100の番号を付け、「中グリッド」とした。

この「中グリッド」を、さらに５m四方に分割し、「小グリッド」を設定した。「小グリッド」には南東隅を起点として、西方向(X軸方向)にアラビア数字を１～20、北方向(Y軸方向)にアルファベットＡ～Ｔを付した。発掘調査の実施にあたっては、この「小グリッド」を基本とした。

下斎田重土薬師遺跡は、「65区」(大区画)の「75・76・85・86・95・96」(中グリッド)に位置する。

この報告書で記載するグリッドは、基本的に「中グリッド」と「小グリッド」を組み合わせて表記する。例えば「75Ｓ-16グリッド」と呼称する場合、「75」は「中グリッド」、「Ｓ-16」は「小グリッド」を表している。

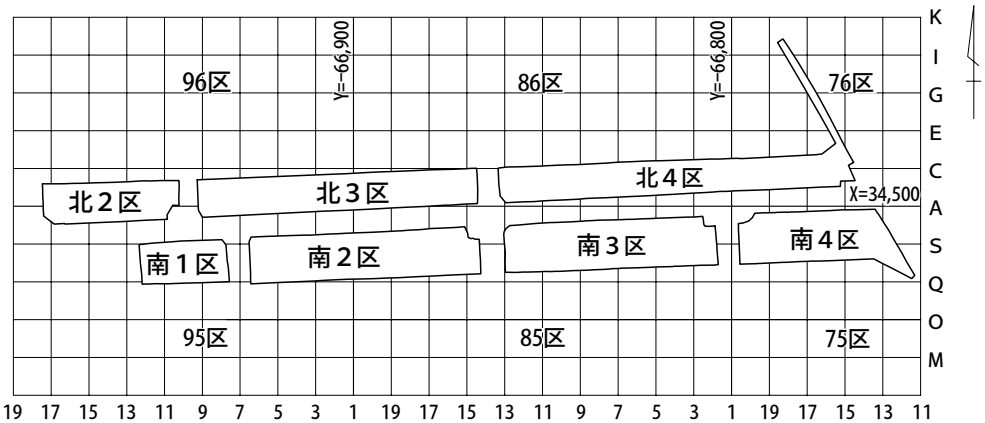
(2)調査区の設定

発掘調査に際しては、基準とする区画やグリッドとは別に、任意の調査区に区分けした。調査区内をほぼ東西方向に走向する道路を境界として２分割し、「北区」・「南区」と呼称した。さらに南北方向に走向する道路および水路を境界として西から順次１～４の番号を付け、これらを組み合わせて調査区を便宜的に呼称した。例えば、「南４区」の場合、「南区」の「４区」を表す。ただし、本報告書では遺構名をすべて通番としており、特に表記する必要がないため、省略してグリッド表記のみとした。

(3)調査の方法

本遺跡は旧時に圃場整備が施工されており、原地形に大幅な改変を受けていた。表土掘削については、指標となる火山噴出堆積物を手がかりに、遺構確認面の検出に当たり、バックホーによる重機掘削ののち、人力による遺構検出作業を行った。その結果、遺跡の中央ではＡｓ－Ｂ及びＢ混土によって被覆されたＡｓ－Ｂ下水田跡を検出した。この調査面は、微高地である調査区東西両端では検出できないが、表土下深度が一致するローム面(Ⅷ層)を検出面として、遺構確認を行った。第1面調査終了後、下層のトレンチ調査を実施し、Ⅷ層土上面を確認面として、古代以前の遺構確認および調査を行った。

遺構調査に際しては、埋没土層の確認用ベルトを任意に設置し、ジョレン・移植ゴテほかにより掘削を行った。



第６図　グリッド設定図(１：2000)

遺構名称は、遺跡全体の通番とし、調査の進行にあわせて適宜付番した。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影により行った。遺構の平面測量は、デジタル平板測量を基本とし、平板測量を適宜実施した。また、広範囲にわたる水田遺構の記録に際しては、航空写真測量により効率化を図った。縮尺は遺構の性格に合わせ、1/10、1/20、1/40、1/100を選択した。断面測量は、個別に水糸により基準標高を設置し、コンベックス、スタッフほかを使用して、手書きによる図化を行った。

遺構写真は、モノクロ写真を６×７版フィルム撮影し、カラー写真はデジタルカメラを使用して、ハードディスク及びＤＶＤによるデータの記録保存を行った。また、調査区の全体写真など、調査状況によりラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

(4)調査の経過

調査日誌抄録

平成21年(2009)

１月５日　調査準備着手。
１月７日　南区表土掘削開始。
１月８日　平安時代の水田調査のため、南２区から浅間Ｂ軽石の除去作業着手。
１月16日　中世以降の土坑・溝の掘削。
１月20日　南３区調査着手。浅間Ｂ軽石除去し、中世以降の土坑・溝の掘削。
１月26日　南４区住居跡の調査開始。
２月３日　南区空中写真撮影。
２月４日　北区表土掘削及び遺構確認。
２月５日　南４区住居跡掘り方調査。
北区Ａｓ－Ｂ下面検出作業着手。
２月６日　南区調査終了。
２月10日　北４区ピット・溝掘削開始。
２月18日　北２区遺構確認。土坑・溝調査開始。
２月25日　北３区遺構確認。Ａｓ－Ｂ下面検出作業着手。
３月２日　北２・４区空中写真撮影。
３月５日　北４区Ｖ層以下トレンチ調査着手。
３月11日　北２区遺物集中遺構着手。
３月13日　北２区縄文時代遺物包含層着手。
３月15日　北３区空中写真撮影。
３月17日　北３区Ｖ層以下トレンチ調査着手。
３月23日　北４区調査終了、埋め戻し。
３月25日　北２・３区調査終了、埋め戻し。
10月20日　南１区表土掘削開始。
10月21日　遺構確認及び土坑・溝調査着手。
10月23日　調査終了
10月24日　埋め戻し。

(5)整理作業の方法

整理作業は、平成21年９月１日から同11月30日まで実施し、引き続き刊行作業を行った。また、南１区については、同10月20日の調査終了を待って、その成果を吸収して整理作業に当たった。

遺構図面は調査時作成の図面を元に、修正作業・計測作業を行い、デジタルによるトレース、版下作成を行った。

出土遺物は、出土遺構・地点ごとに接合作業を行った後、掲載遺物を選定した。次いで、デジタル撮影による遺物写真撮影を行ったのち、遺物実測を行った。実測に際しては、機械実測、デジタル写真実測により素図を作成して精図し、引き続いてトレース図を作成した。未掲載資料数のカウント作業は、中世・近世の遺構把握を目的として、編集担当が行った。

遺物トレース図はスキャニング作業を行ってデジタル化し、版下作成を行った。

掲載資料は、台帳作成後収納作業を行った。

Ⅱ　調査の記録

1　遺跡の概要

(1)基本土層

本遺跡は旧時の圃場整備により原地形が大幅に改変を受けており、比較的良好な堆積状況を残す北４区で基本土層を観察作成した。なお、Ⅷ層以下には前橋泥流に相当する礫混土層が厚く堆積するものと想像されるが、実態調査はできなかった。

Ⅰ　灰褐色土　現耕作土

Ⅱ　灰褐色土　浅間Ａ軽石を少量含む。鉄分沈着見られる。

Ａｓ－Ａ

Ⅲ　灰褐色粘質土

Ⅳ　暗褐色土　浅間Ｂ軽石をやや多く含んで、やや砂質。鉄分沈着見られる。

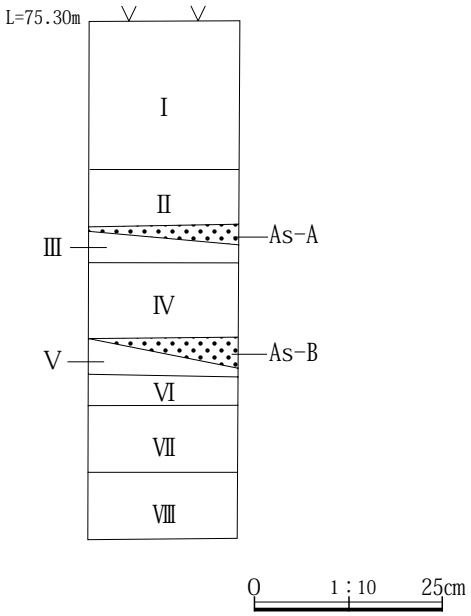
Ａｓ－Ｂ

Ⅴ　灰赤色粘質土　水田耕作土

Ⅵ　暗灰色粘質土　よく締まる。

Ⅶ　黒褐色粘質土　上面層境にＦＡブロックが一部でみられ、低地部を中心に浅間Ｃ軽石をやや多く含む。

Ⅷ　黄白色～明黄褐色粘質土



第７図　基本土層

(2)遺構の概要

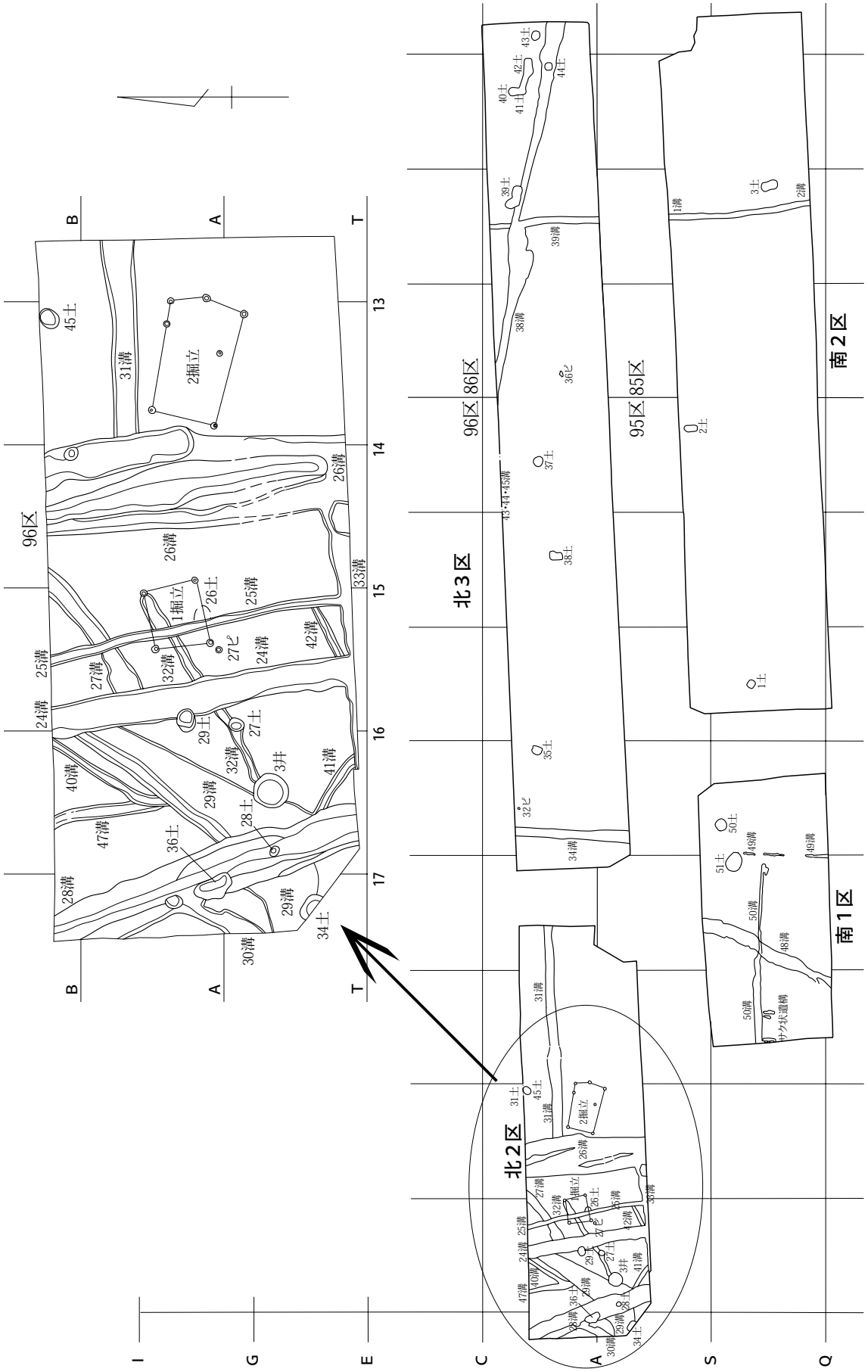
本遺跡は中央部(北３区、北4区西半、南２区、南３区)に軽微な低地地形があり、東西両端が微高地となっている。このため、中央部は早くから水田耕作の適地となっていた見られ、平安時代後期に属するＡｓ－Ｂ下水田跡を検出することができた。この水田跡は残存状況が悪く、畦の形態や水口が判明しなかったため、区画の面積や形態も不明である。２か所で大畦と思われる軽微な高まりを検出できた。

調査区の東端部(北4区、南４区)は微高地であり、古代の住居跡３軒、井戸跡２基(うち１基は古墳時代)が発見された。また、古墳時代初頭に比定される下斉田遺跡1号住居跡周辺では、同時期の溝やピット群が見つかっている。

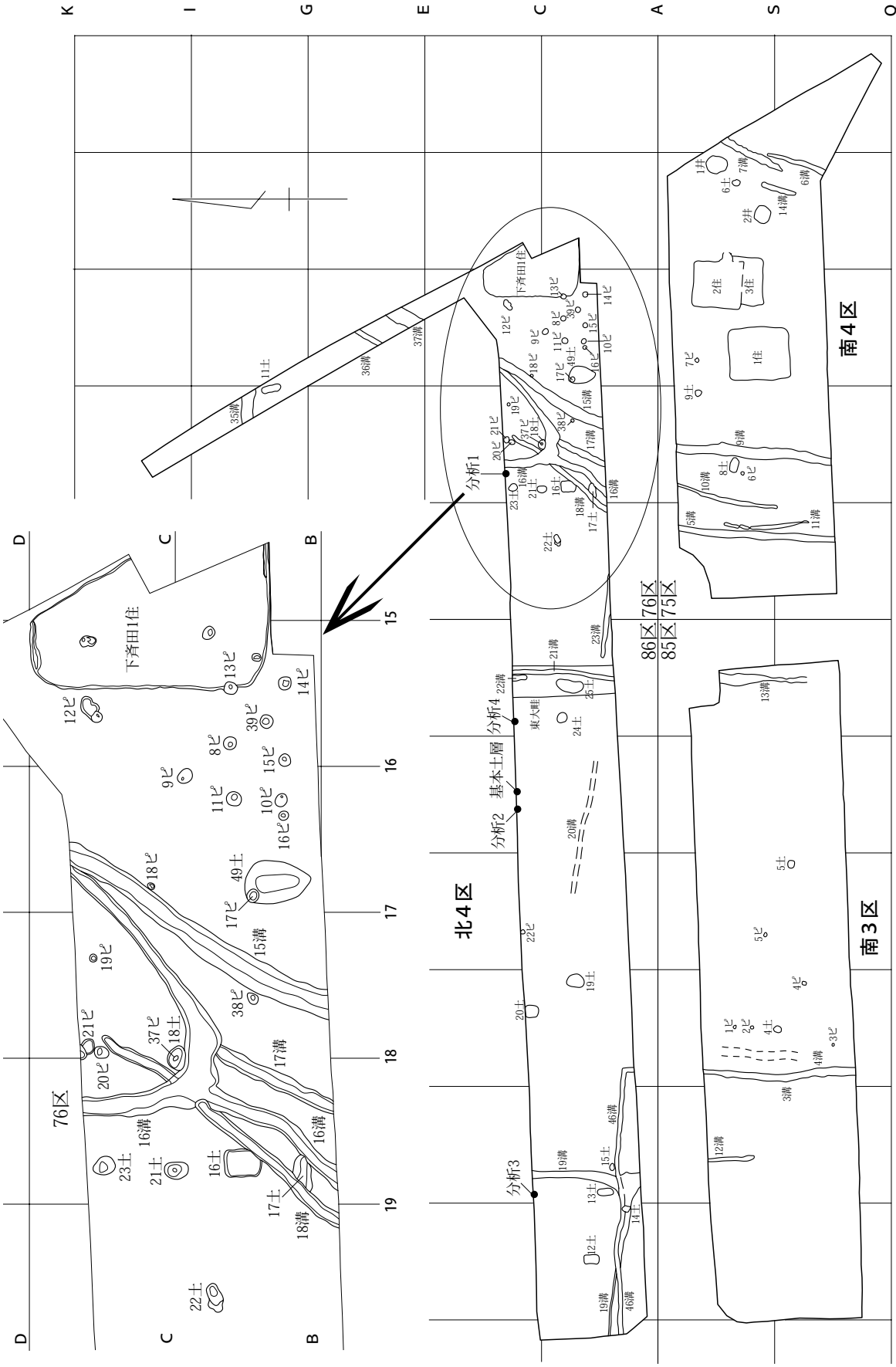
調査区の西端部(北２区、南１区)は微高地であり、古代から近世にわたる多くの溝が重複して発見された。特に北２区の北西端では、縄文時代前期後半に属する土器群がやや多く見つかっている。また、北２区南西端では、古墳時代初頭に属する土器群が多量に出土した遺物集中遺構が見つかっている。北２区西半部では、埋没土に浅間Ｂ軽石を含む掘立柱建物２棟と井戸跡1基、土坑数基、溝数条が見つかっている。

調査区全体に、埋没土に浅間Ａ軽石および浅間Ｂ軽石を含む土坑･溝が分布する中で、中央部(北３区、北4区西半部)では江戸時代の遺物がやや多く出土する溝が検出された。

なお、遺構確認面はⅤ～Ⅷ層上面であり、全体図を含めて、遺構はほぼ同一面として調査されている。ただし、出土遺物のほか、埋没土に浅間Ａ軽石、浅間Ｂ軽石を含むを根拠に、帰属年代を選別することが可能なため、煩雑にならない限り、時代別に遺構を掲載することとした。



第８図　全体図(１)(１：500)・北２区詳細図　(１：200)



第９図　全体図(2)(1：500)・北４区詳細図　(1：200)

２　遺構と遺物

(1)竪穴住居跡

１号住居跡(第10～13図、ＰＬ５・22)

位置　75R･S-15･16　**重複**　なし　**形態**　長方形

主軸方位　Ｎ－89°－Ｅ

規模　南北5.16m、東西4.52m

カマド　遺物と焼土混土の分布から判断。東壁中央やや南寄りに設置される。使用面は規模、形態とも不明。掘り方は細長い隅丸方形で、規模は長軸156cm短軸78cmである。

柱穴　６基確認されるが、主柱穴はＰ１～Ｐ４で、住居平面形に相似して対角線上に位置する。

柱穴の規模(長径･短径･深さcm)

Ｐ１：51、47、35　Ｐ２：45、37、42、Ｐ３：40、34、33、Ｐ４：53、30、30

床　硬化面は確認されていない。

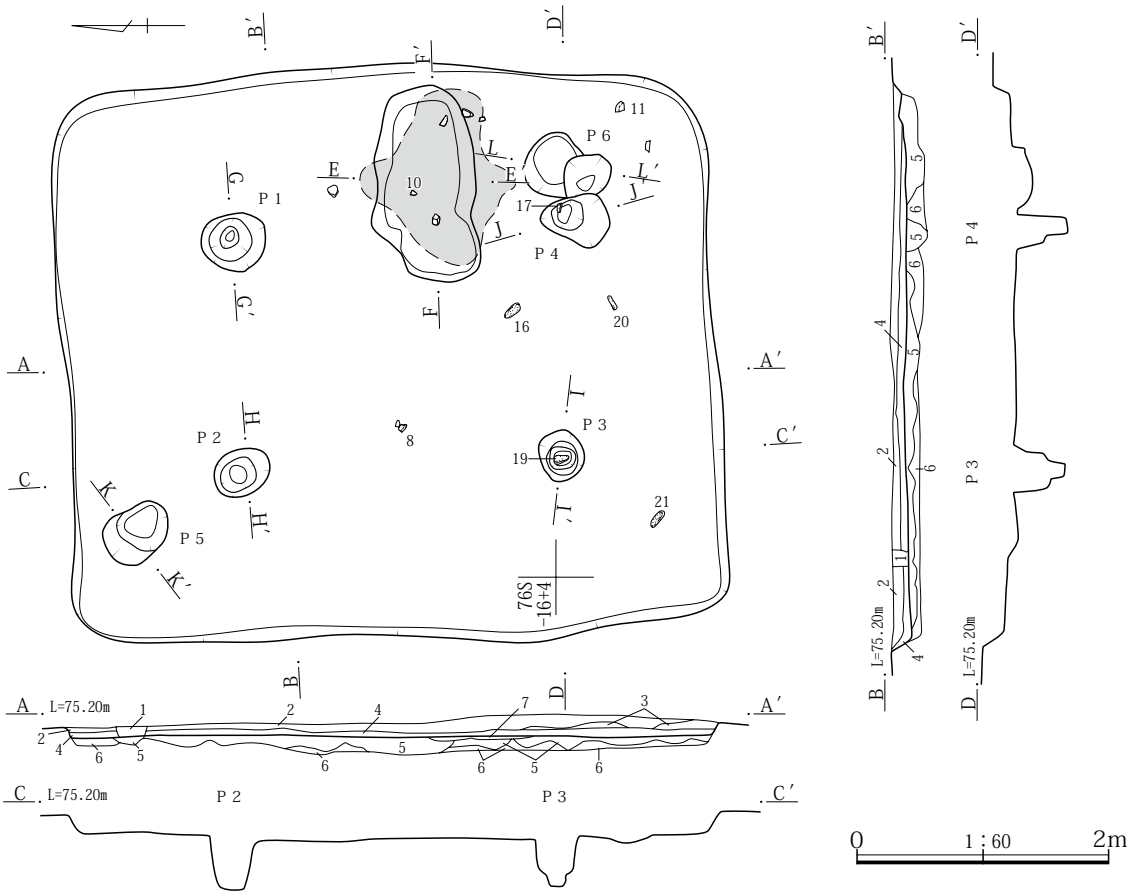
１号床下土坑　住居の南西隅近くにある。２基が重複するかもしれない。東側が円形で深い。規模は長軸116cm短軸84cmである。

２号床下土坑　住居のほぼ中央にある。整った円形。規模は長軸102cm短軸100cmである。

掘り方　全面にローム面まで15cmほど掘り下げる。

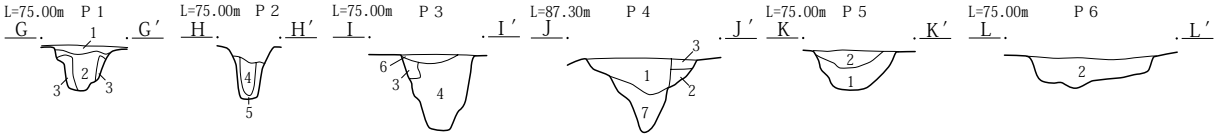
遺物　カマド周辺で散漫に出土したほか、全体の出土量は非常に少ない。

時期　出土遺物から８世紀後半に比定される。



1．暗褐色土　やや粘質。白色細粒少量含む。やや堅くしまる。
2．暗褐色土　やや粘質。白色細粒・ローム粒・焼土粒含む。やや堅くしまる。
3．暗褐色土　白色細粒・ローム粒・灰色土ブロック含む。やや堅くしまる。
4．暗褐色土　やや粘質。白色細粒・ロームブロック・焼土ブロック含む。やや堅くしまる。
5．暗褐色土　やや粘質。白色細粒･ローム粒含む。やや堅くしまる。
6．褐色土　やや粘質。暗褐色土ブロック、白色細粒含む。ややしまる。
7．灰褐色土　やや粘質。ローム粒・焼土粒・炭粒多く含む。

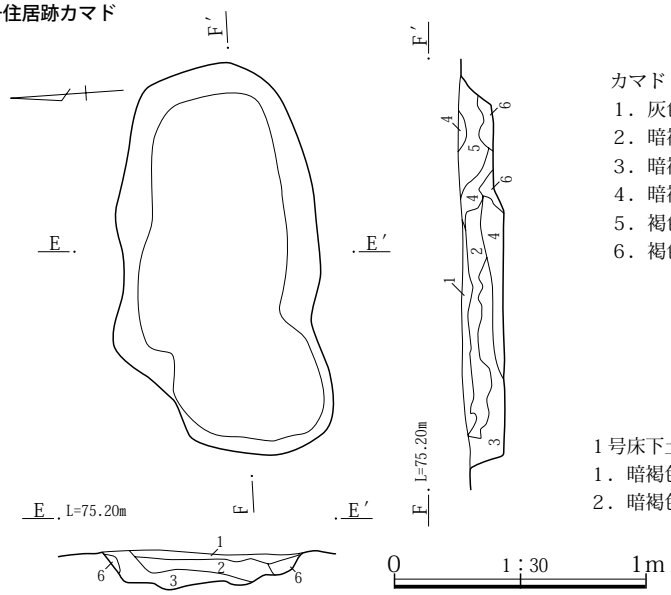
第10図　１号住居跡



ピット

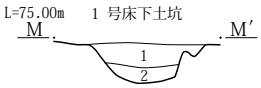
1．暗褐色土　やや粘質。ローム粒わずか含む。ややしまる。
2．暗褐色土　やや粘質。ローム粒･焼土粒わずか含む。ややしまる。
3．暗褐色土　やや粘質。ロームブロック･白色細粒含む。ややしまる。
4．黒褐色土　やや粘質。ローム粒わずか含む。ややしまる。
5．黒褐色土　やや粘質。ローム粒含む。ややしまる。
6．黄白色粘質土　暗褐色土少量含む。やや堅くしまる。
7．暗褐色土　黄白色土ブロック含む。しまらない。

1号住居跡カマド



カマド

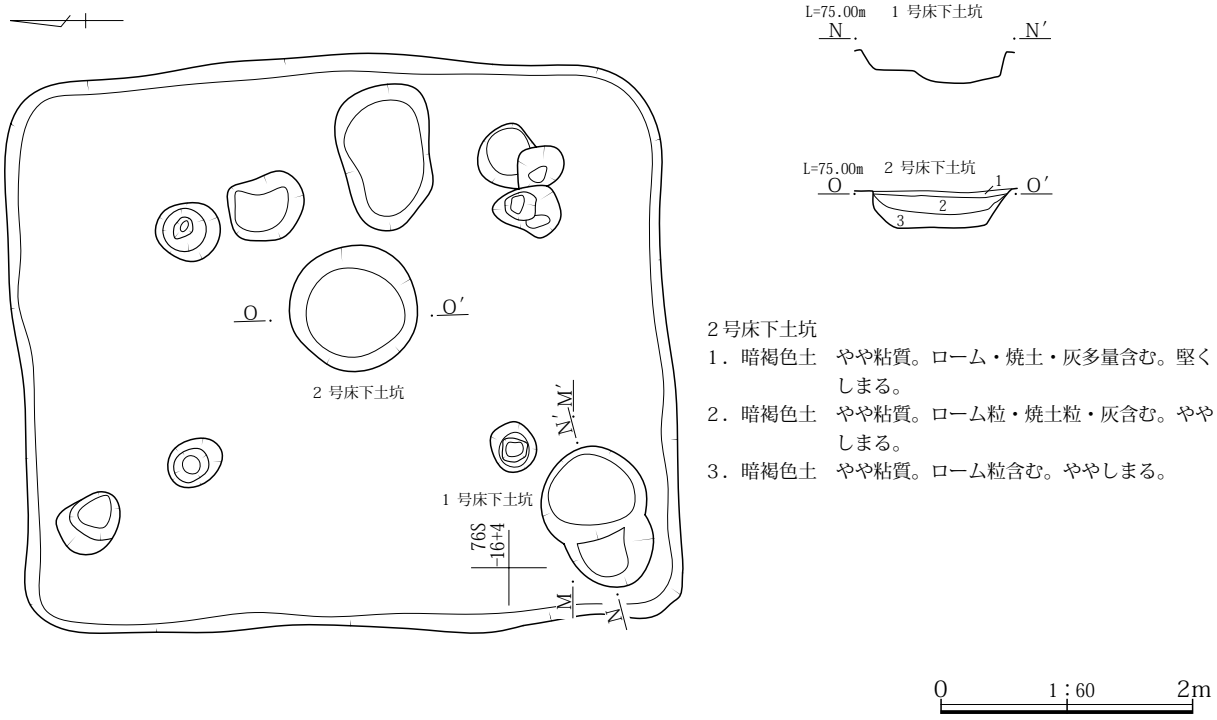
1．灰色灰　やや粘質。焼土粒・炭粒含む。ややしまる。
2．暗褐色土　やや粘質。焼土粒・ローム粒含む。ややしまる。
3．暗褐色土　やや粘質。灰・炭化物多く含む。しまらない。
4．暗褐色土　やや粘質。焼土粒・炭粒少量含む。ややしまる。
5．褐色土　やや粘質。焼土粒多く含む。ややしまる。
6．褐色土　やや粘質。黄褐色粒含む。ややしまる。



1号床下土坑

1．暗褐色土　やや粘質。ロームブロック･焼土粒含む。ややしまる。
2．暗褐色粘質土　ロームブロック少量含む。

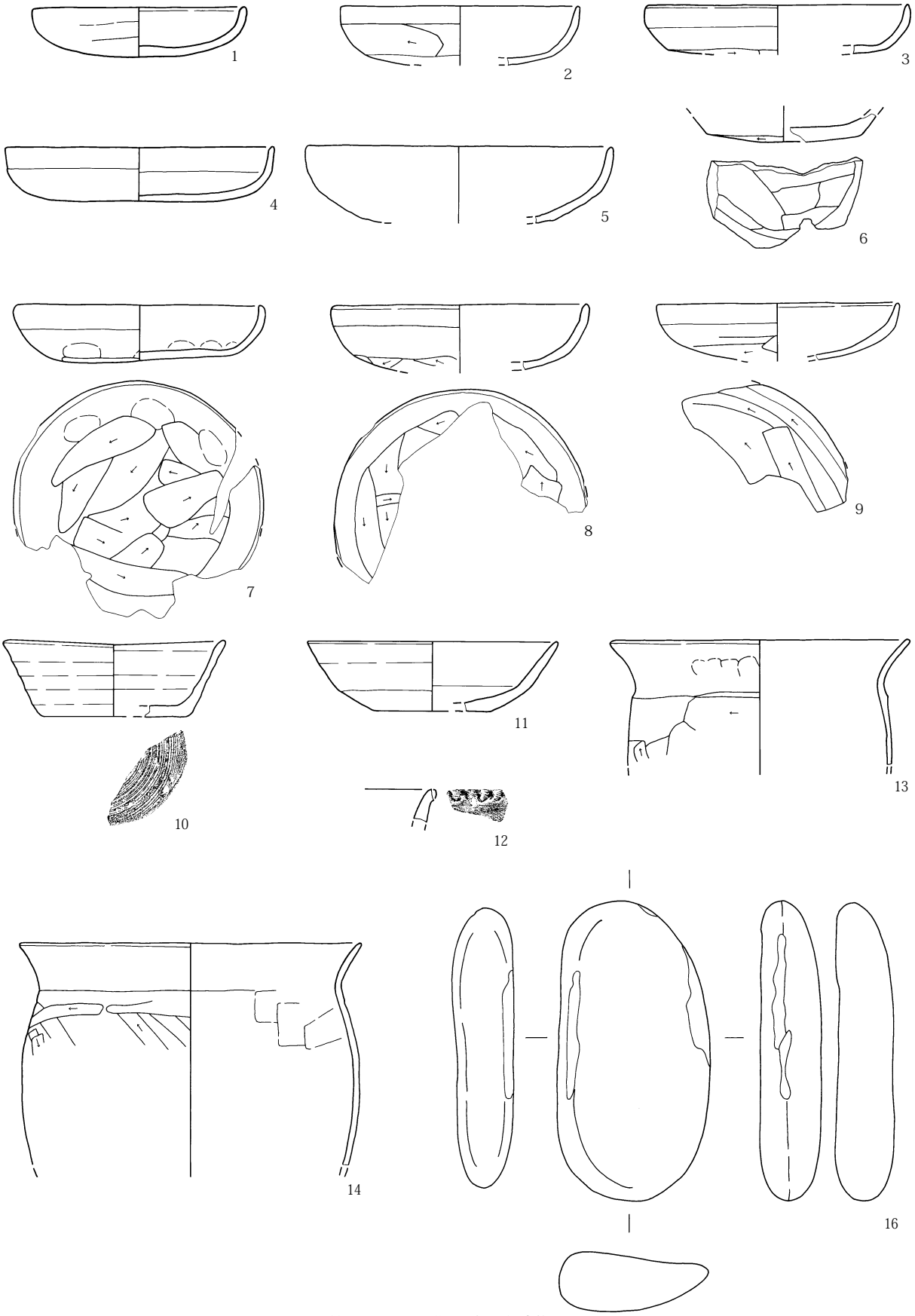
1号住居跡掘り方



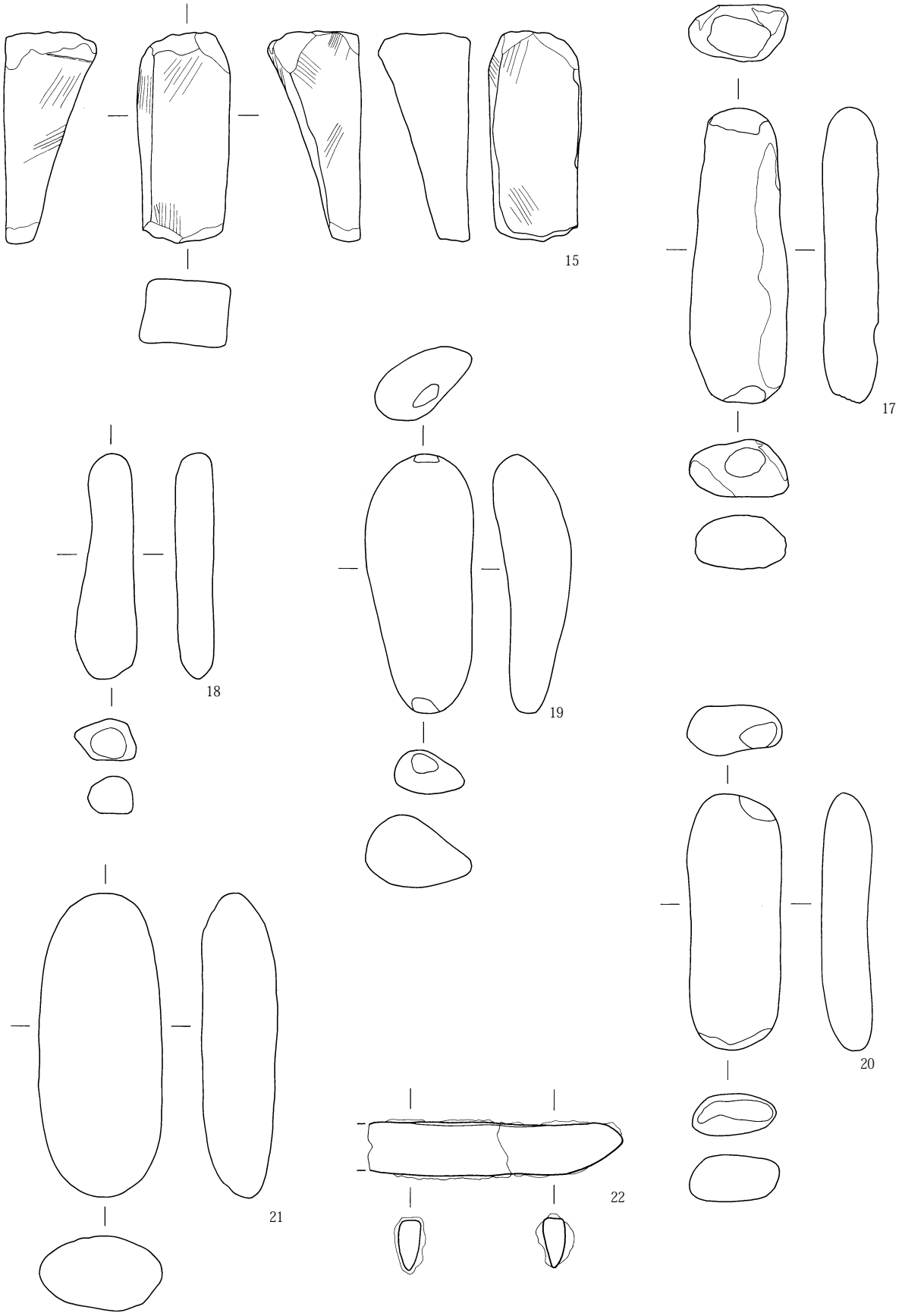
2号床下土坑

1．暗褐色土　やや粘質。ローム・焼土・灰多量含む。堅くしまる。
2．暗褐色土　やや粘質。ローム粒・焼土粒・灰含む。ややしまる。
3．暗褐色土　やや粘質。ローム粒含む。ややしまる。

第11図　1号住居跡ピット・カマド・掘り方・床下土坑



第12図　1号住居跡出土遺物(1)



第13図　１号住居跡出土遺物(２)

２号住居跡(第14～18図、ＰＬ６・22・23)

位置　75S･T-14･15　**重複**　３号住居跡より新しい。

形態　ほぼ正方形。**主軸方位**　Ｎ－86°－Ｗ

規模　南北4.16m、東西4.82m

カマド　東壁中央南寄りに位置する。燃焼部は不明確。焚き口幅は石の内側寸法で約22cmである。

柱穴　ピット名を付したものは３基あるが、柱穴と見なされるものは２基で、Ｐ１は３号住居跡に帰属すると判断する。

柱穴の規模(長径･短径･深さcm)　Ｐ１：22、19、28、Ｐ２：32、23、16

床　やや締まる部分はあるが、硬化面として認識されていない。

掘り方　全面にローム面まで16cmほど掘り下げる。Ｐ１は掘り方の一部であろう。

遺物　床面の出土遺物は少ないが、埋没土からの出土遺物はやや多い。

時期　出土遺物から９世紀前半に比定される。

３号住居跡(第14・15・19・20図、ＰＬ６・23・24)

位置　75S-14･15　**重複**　２号住居跡より古い。

形態　２号住居跡と重複した結果、北半分は明確でないが、状況からみて東西に長い長方形であろう。

主軸方位　Ｎ－87°－Ｗ

規模　(南北2.62m)、東西4.14m

カマド　２号住居跡との重複により消滅か。

柱穴　２号住居のＰ１(数値は２号住居跡参照)を含めて２基である。

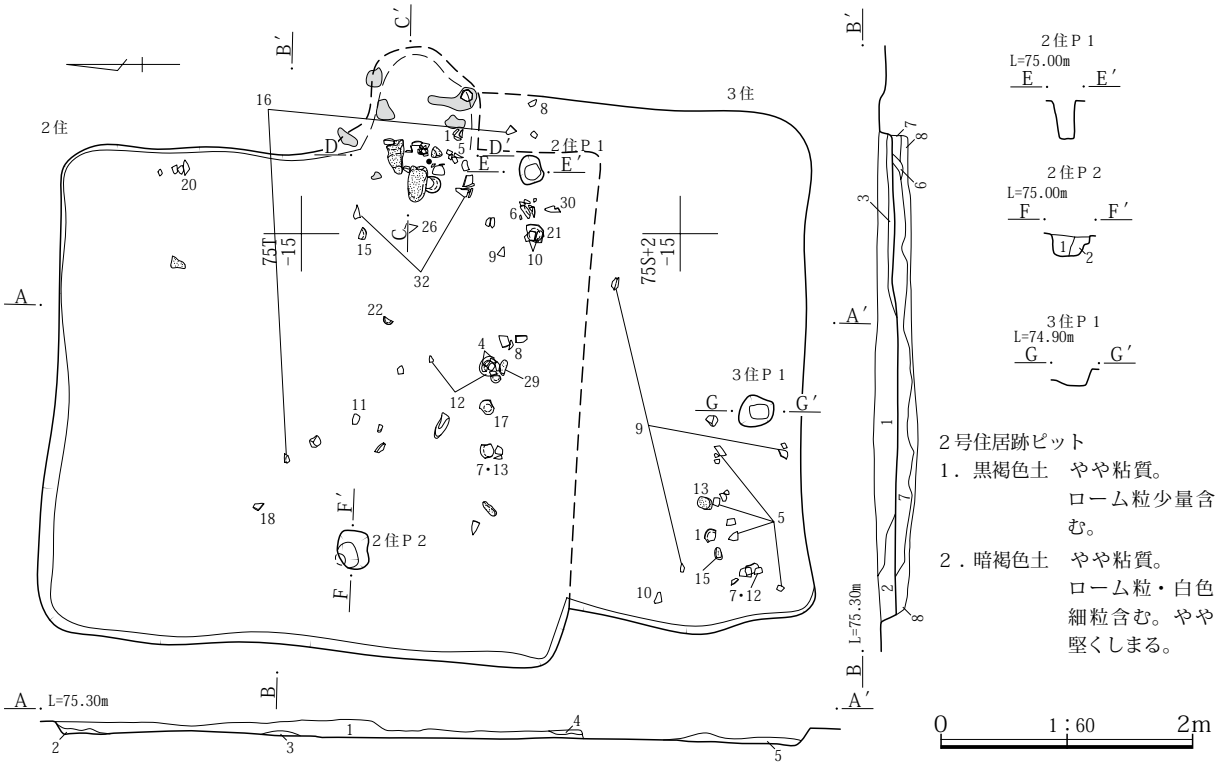
柱穴の規模(長径･短径･深さcm)　Ｐ１：27、24、８

床　明確な床面は確認されていない。

掘り方　不明。

遺物　南西隅近くに、やや集中して出土している。

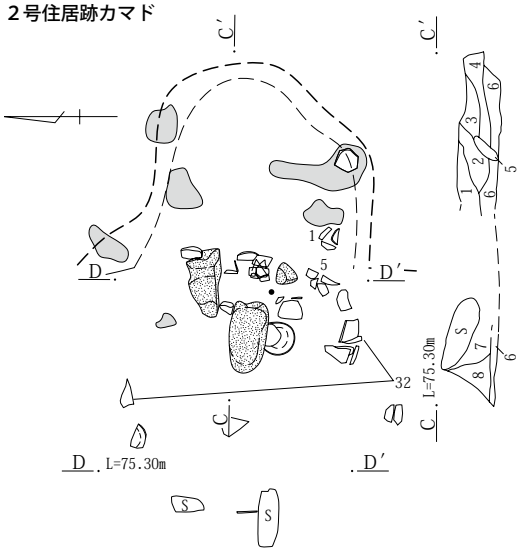
時期　出土遺物から８世紀半ばに比定される。



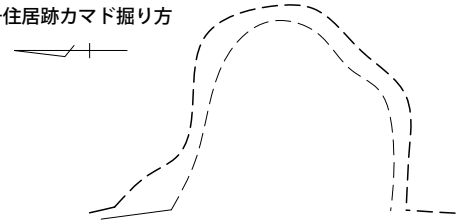
２・３号住居跡
1．暗褐色土　白色細粒・焼土粒・炭粒含む。やや堅くしまる。
2．暗褐色土　白色細粒・焼土粒・ローム粒少量含む。やや堅くしまる。
3．暗褐色土　やや粘質。焼土ブロック・ロームブロック含む。ややしまる。
4．暗褐色土　やや粘質。灰色ブロック含む。
5．暗褐色土　焼土ブロック多量､ローム粒含む。やや堅くしまる。
6．黄白色粘土ブロック
7．暗褐色土　やや粘質。ローム粒・焼土粒・白色細粒少量含む。やや堅くしまる。
8．褐色土　ローム粒・白色細粒含む。やや堅くしまる。

第14図　２・３号住居跡

２号住居跡カマド



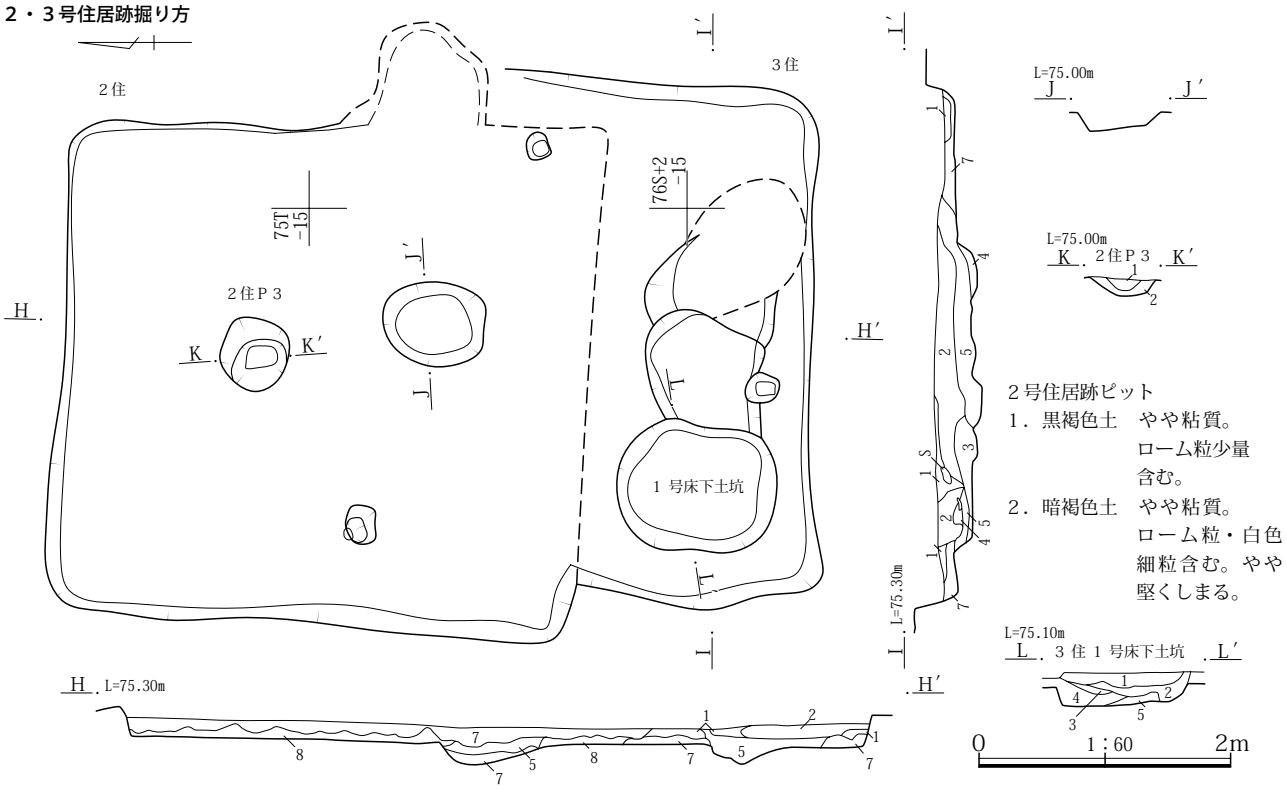
２号住居跡カマド掘り方



２号住居跡カマド
1．暗褐色土　やや粘質。焼土ブロック含む。やや堅くしまる。
2．暗褐色土　やや粘質。ローム粒・焼土粒含む。やや堅くしまる。
3．暗褐色土　やや粘質。ローム粒・焼土粒・白色細粒含む。堅くしまる。
4．暗褐色土　やや粘質。ローム粒・焼土粒含む。
5．暗褐色土　やや粘質。ローム粒多量含む。やや堅くしまる。
6．黒褐色土　やや粘質。やや堅くしまる。
7．暗褐色土　やや粘質。焼土粒・炭粒含む。やや堅くしまる。
8．暗褐色土　やや粘質。白色細粒・焼土粒少量含む。やや堅くしまる。

0　1：30　1m

２・３号住居跡掘り方

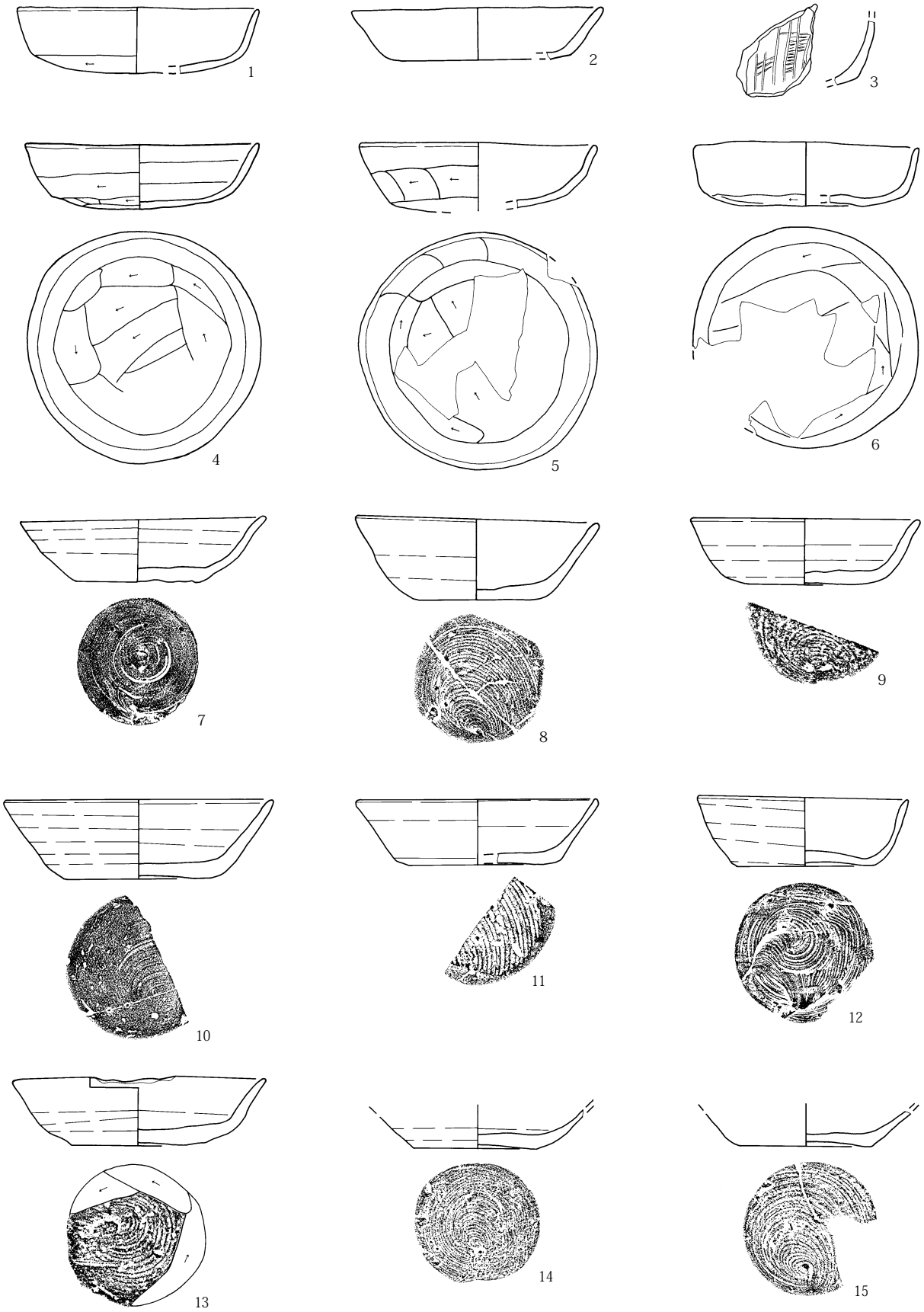


２号住居跡ピット
1．黒褐色土　やや粘質。ローム粒少量含む。
2．暗褐色土　やや粘質。ローム粒・白色細粒含む。やや堅くしまる。

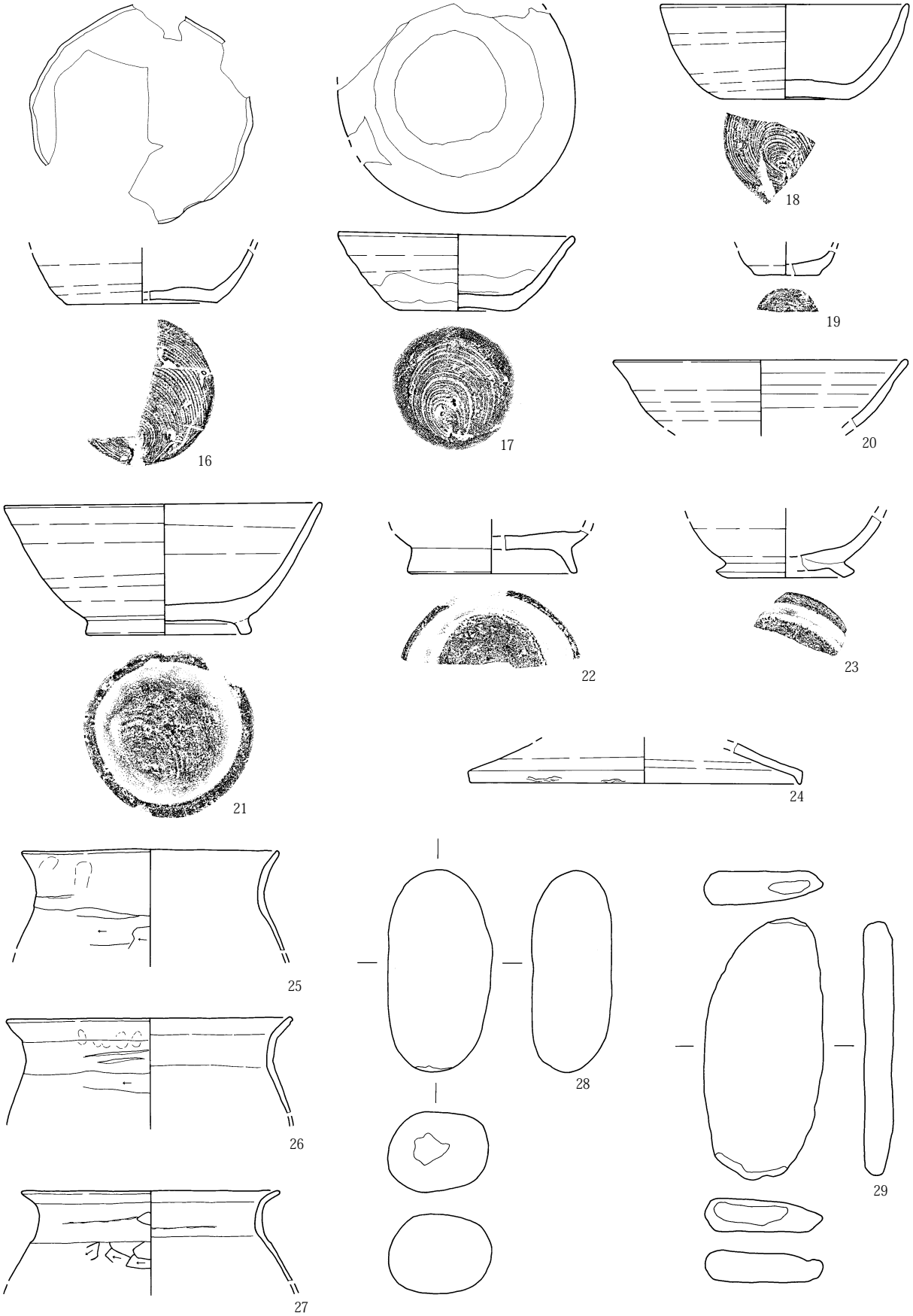
２・３号住居跡掘り方
1．暗褐色土　やや粘質。白色軽石・ローム粒・焼土粒含む。やや堅くしまる。
2．灰褐色土　やや粘質。ロームブロック・焼土ブロック・灰色粘土・白色細粒・炭粒含む。堅くしまる。
3．黄褐色土　やや粘質。ローム多量、焼土ブロック･炭化物含む。やや堅くしまる。
4．灰色粘質土　ローム粒・炭化物少量含む。
5．黒褐色土　やや粘質。ローム粒・焼土粒・白色細粒少量含む。やや堅くしまる。
6．黄白色粘土ブロック
7．暗褐色土　やや粘質。ローム粒・焼土粒・白色細粒少量含む。やや堅くしまる。
8．褐色土　ローム粒・白色細粒含む。やや堅くしまる。

３号住居跡１号床下土坑
1．暗褐色土　やや粘質。焼土ブロック・灰・ロームブロック・炭化物含む。やや堅くしまる。
2．黒褐色土　やや粘質。焼土ブロック・ロームブロック含む。やや堅くしまる。
3．灰褐色土　やや粘質。焼土ブロック・炭化物含む。やや堅くしまる。
4．暗褐色土　やや粘質。焼土ブロック・ローム粒含む。やや堅くしまる。
5．灰褐色粘質土　ローム粒含む。堅くしまる。

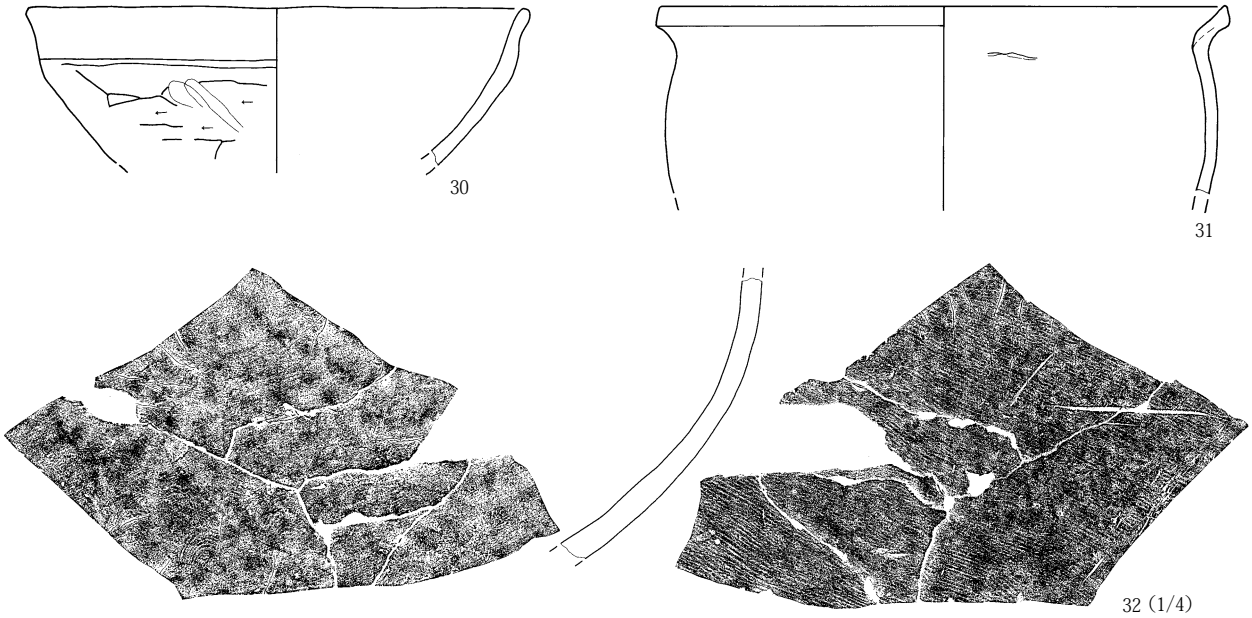
第15図　２・３号住居跡カマド・掘り方・床下土坑



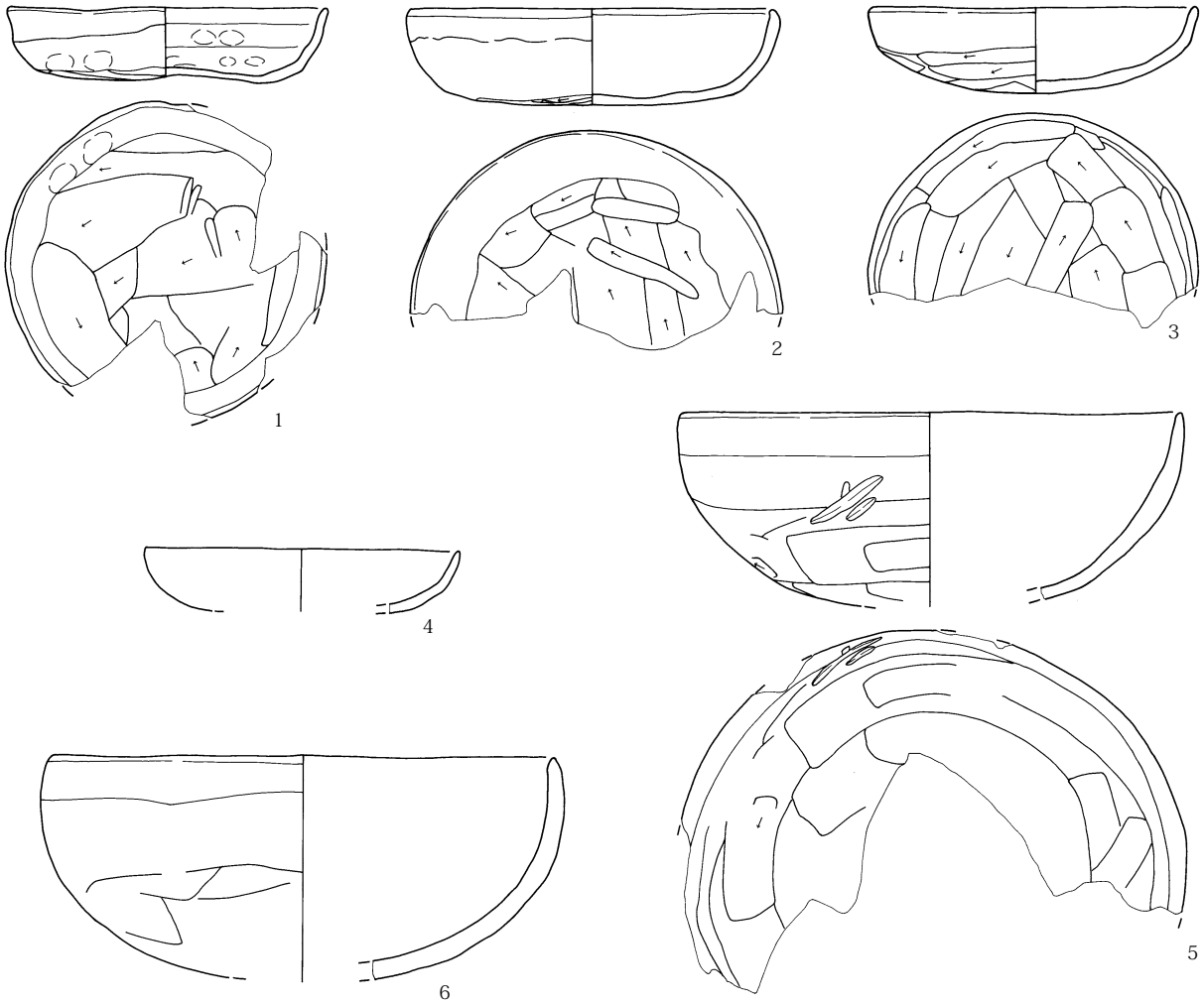
第16図　２号住居跡出土遺物(1)



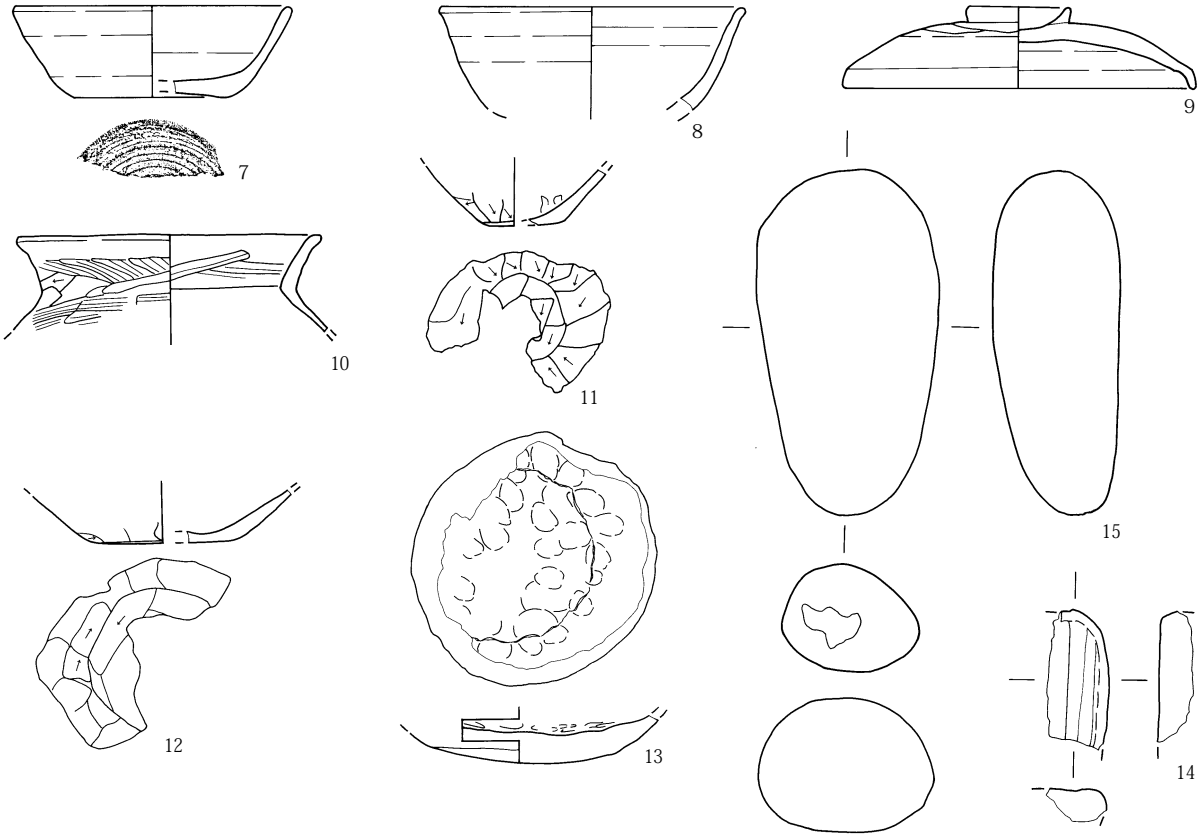
第17図　２号住居跡出土遺物(２)



第18図　２号住居跡出土遺物(３)



第19図　３号住居跡出土遺物(１)



第20図　３号住居跡出土遺物(２)

(2)掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第21図、ＰＬ７）

位置　96A-14･15

重複　Ｐ２が32号溝と重複するが、新旧関係不明。

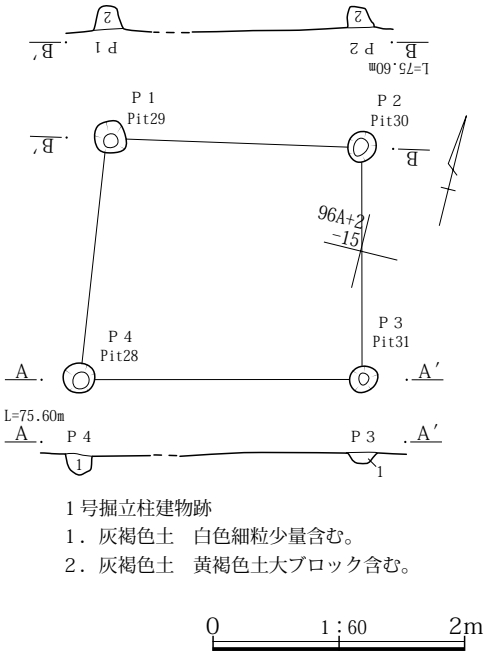
形態　１×１間の東西に長い台形。

主軸方位　Ｎ－76°－Ｅ

規模　南北1.84m、東西2.25m

遺物　なし。

時期　柱穴の埋没土から中世～近世(天明期以前)に比定される。



１号掘立柱建物跡
１．灰褐色土　白色細粒少量含む。
２．灰褐色土　黄褐色土大ブロック含む。

第21図　１号掘立柱建物跡

２号掘立柱建物跡（第22図、ＰＬ７）

位置　95T･96A-12･13　**重複**　なし。

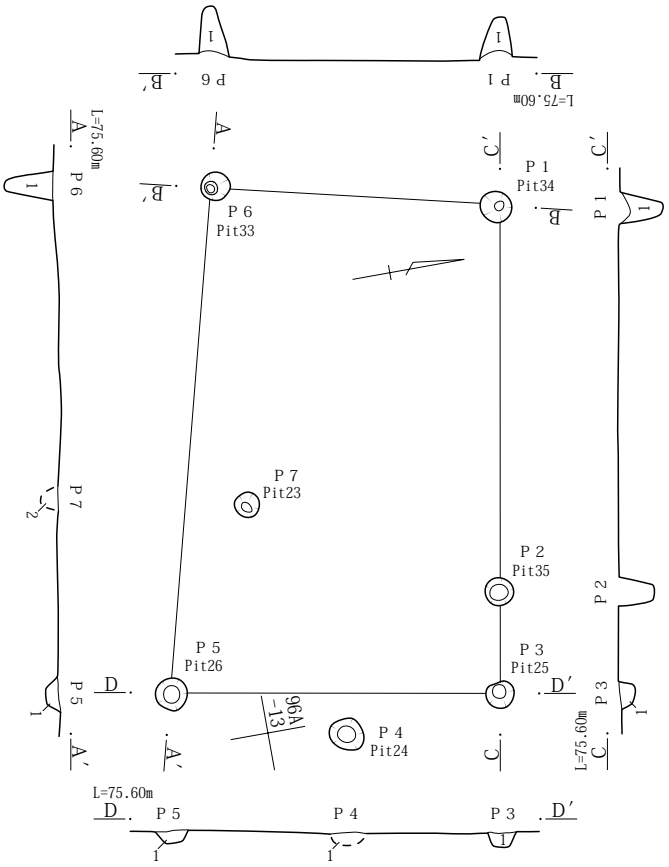
形態　２×１間の長方形。Ｐ４は妻側の中央にあり、東辺から外側に張り出し、棟持ち柱と見られる。Ｐ２は北東隅柱Ｐ３から約80㎝離れており、間隔から出入り口の可能性がある。Ｐ７は建物の軸線に乗っておらず直接的なつながりを見いだせないが、周辺に本遺構以外のピットがないことから､本遺構に属すると判断される。

主軸方位　Ｎ－80°－Ｗ

規模　南北2.60m、東西4.28m

遺物　なし。

時期　柱穴の埋没土から中世～近世(天明期以前)に比定される。



２号掘立柱建物跡
１．灰褐色土　白色細粒少量含む。
２．灰色土　浅間Ｂ軽石多く含む。

0　1：60　2m

第22図　２号掘立柱建物跡

第２表　掘立柱建物計測表

遺構名	１号掘立柱建物跡		主軸方位	N-76°-E	面積	4.14㎡
全体規模	柱穴No.	規模（cm）			形状	次ピットとの間隔（m）
		長径	短径	深さ		
北辺2.00m	Ｐ１	26	25	19	隅方	2
東辺1.83m	Ｐ２	25	22	16	円	1.83
南辺2.25m	Ｐ３	24	20	8	円	2.25
西辺1.91m	Ｐ４	26	25	15	円	1.91
遺構名	２号掘立柱建物跡		主軸方位	N-80°-W	面積	11.13㎡
全体規模	柱穴No.	規模（cm）			形状	次ピットとの間隔（m）
		長径	短径	深さ		
北辺3.84m	Ｐ１	25	24	32	円	3.05
	Ｐ２	23	22	26	円	0.79
東辺2.60m	Ｐ３	23	20	11	円	1.25
	Ｐ４	29	25	8	楕円	1.42
南辺4.02m	Ｐ５	25	25	10	円	P7へ1.60
西辺2.29m	Ｐ６	24	21	38	円	2.29
	Ｐ７	20	20	14	円	P6へ2.55

(3)土坑

ア 古墳時代～平安時代

本時期の土坑は、Ⅷ層上面で確認しており、埋没土はⅥ・Ⅶ層を母材とすることを、時期決定の基本的な根拠とする。

18号土坑(第23図、ＰＬ８)

位置　76B-17。不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長径80cm短径64cm深さ15cmである。遺物は出土しなかった。

21号土坑(第23図、ＰＬ８)

位置　76B-18。楕円形。断面はＶ字形を呈し、底面は円形で丸みを持つ。規模は長径83cm短径59cm深さ37cmである。遺物は出土しなかった。

23号土坑(第23図、ＰＬ８)

位置　76C-18。不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長径77cm短径60cm深さ26cmである。遺物は出土しなかった。

36号土坑(第23図、ＰＬ８)

位置　95T-17。28号溝と重複するが新旧関係不明。不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。規模は長径137cm短径74cm深さ55cmである。遺物は出土しなかった。

45号土坑(第23図、ＰＬ８)

位置　96B-13。楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長径77cm短径61cm深さ16cmである。遺物は出土しなかった。

49号土坑(第23図、ＰＬ８)

位置　76B-16。不整長楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長径235cm短径146cm深さ53cmである。遺物は出土しなかった。

50号土坑(第23図、ＰＬ８)

位置　95R-8。円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長径107cm短径100cm深さ23cmである。遺物は出土しなかった。

51号土坑(第23図、ＰＬ８)

位置　95R-8。楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹するが、土壌攪乱が大きいと思われる。規模は長径172cm短径132cm深さ40cmである。遺物は出土しなかった。

イ 中世･近世

本時期の土坑は、Ⅳ層上面で確認しており、埋没土中に浅間Ａ軽石および浅間Ｂ軽石を含むかが、時期決定の基本的な根拠となっている。

１号土坑(第24図、ＰＬ８)

位置　95R-6。整った円形を呈する。調査できた深さは浅く、壁の形態は不明。底面はやや凸凹するが､土壌攪乱による可能性が高い。埋没土はＢ混土。規模は長径72cm短径64cm深さ5cmである。遺物は出土しなかった。

２号土坑(第24図、ＰＬ８)

位置　95S-1。隅丸長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土で、Ⅳ層土ブロックを多く含み、短期間で埋め戻されたと思われる。規模は長径116cm短径57cm深さ15cmである。遺物は出土しなかった。

３号土坑(第24図、ＰＬ８)

位置　85R-17。隅丸長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土で、Ⅳ層土ブロックを多く含み、短期間で埋め戻されたと思われる。規模は長径145cm短径76cm深さ34cmである。遺物は出土しなかった。

４号土坑(第24図、ＰＬ９)

位置　85R-7。やや整った円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径69cm短径56cm深さ11cmである。遺物は出土しなかった。

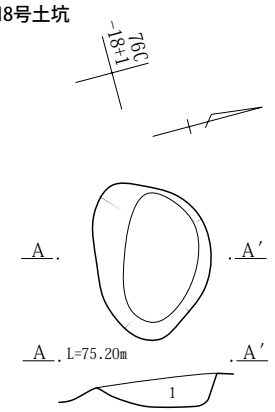
５号土坑(第24図、ＰＬ９)

位置　85R-5。やや整った円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はＢ混土。規模は長径66cm短径59cm深さ11cmである。遺物は出土しなかった。

６号土坑(第24図、ＰＬ８)

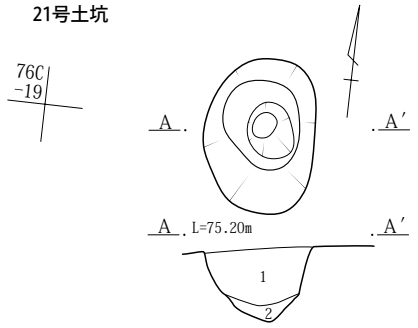
位置　75S-13。ほぼ楕円形を呈し、壁はやや垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径71cm短径53cm深さ17cmである。遺物は出土しなかった。

18号土坑



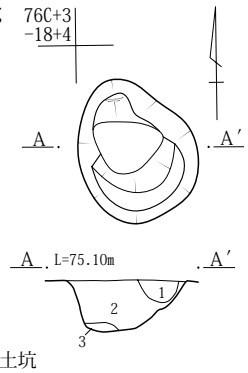
18号土坑
1．黒褐色土　白色砂含む。

21号土坑



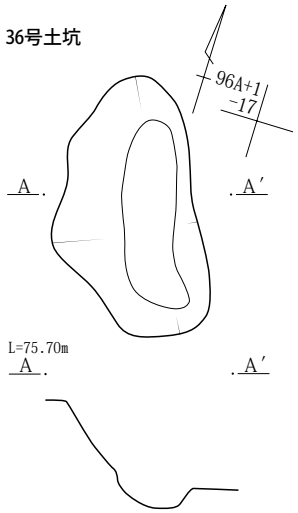
21号土坑
1．黒褐色土　白色砂含む。
2．黒褐色土　やや粘質。灰白色土ブロック含む。

23号土坑

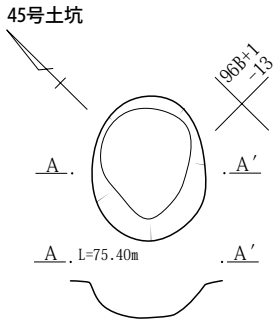


23号土坑
1．黒褐色土　白色砂含む。
2．黒褐色土　褐色土ブロック含む。
3．黒褐色土

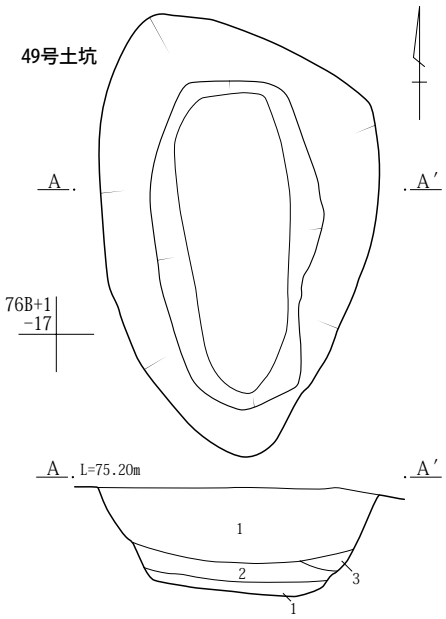
36号土坑



45号土坑

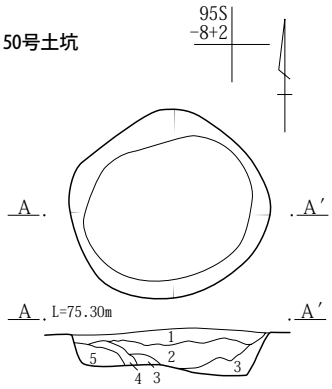


49号土坑

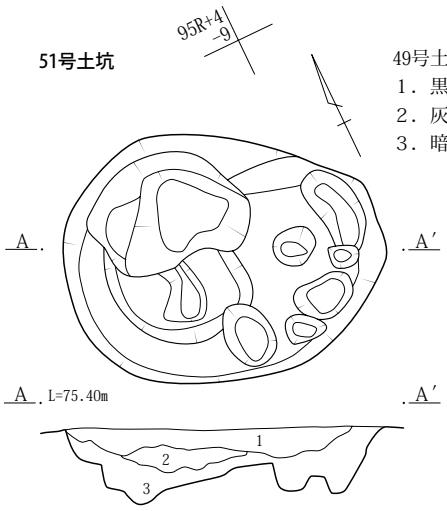


49号土坑
1．黒褐色土　均質。
2．灰白色粘質土
3．暗褐色土　黒褐色土、黄灰色土含む。

50号土坑



51号土坑



50号土坑
1．灰褐色粘質土　白色細粒少量、赤褐色粒含む。しまる。
2．灰褐色粘質土
3．灰褐色粘質土　黒褐色土含む。
4．黒褐色粘質土　白色粘土ブロック多く含む。しまる。
5．黒褐色粘質土　白色粘土ブロック少量含む。しまる。

51号土坑
1．灰褐色粘質土　白色細粒少量、赤褐色粒含む。しまる。
2．灰褐色粘質土
3．灰褐色粘質土　黒褐色土含む。

0　1:40　1m

第23図　18・21・23・36・45・49～51号土坑

８号土坑(第24図、ＰＬ９)

位置　75S-18。ほぼ楕円形を呈する。調査できた深さは浅く、壁の形態は不明。底面はほぼ平坦。規模は長径126cm短径72cm深さ7cmである。遺物は出土しなかった。

９号土坑(第24図、ＰＬ９)

位置　75T-17。不整円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土中に焼土･炭を多く含むが、性格不明。規模は長径56cm短径55cm深さ9cmである。遺物は出土しなかった。

11号土坑(第24図、ＰＬ９)

位置　76G-16。細長い隅丸長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径169cm短径60cm深さ15cmである。遺物は須恵器椀の破片１点が出土したが混入である。

12号土坑(第25図、ＰＬ９)

位置　86B-11。整った隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は全体にほぼ平坦で、中央部が丸みを持って凹むが土壌攪乱の可能性がある。埋没土はＢ混土。規模は長径132cm短径77cm深さ34cmである。遺物は出土しなかった。

13号土坑(第25図、ＰＬ９)

位置　86A-10。長楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径137cm短径63cm深さ21cmである。遺物は出土しなかった。

14号土坑(第25・27図、ＰＬ24)

位置　86A-11。19・46号溝と重複するが新旧関係不明。不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径72cm短径52cm深さ24cmである。遺物は灯明皿１点(１)、徳利1点(２)のほか、磁器碗破片２点･同皿破片1点が出土した。出土遺物から江戸後期頃に比定される。

15号土坑(第25図)

位置　86A-10。長円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径61cm短径40cm深さ15cmである。遺物は出土しなかった。

16号土坑(第25図、ＰＬ９)

位置　76B-18。18号溝と重複し、平面観察から後出である。整った長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はＡ混土。規模は長径130cm短径97cm深さ7cmである。遺物は出土しなかった。

17号土坑(第25図)

位置　76B-18。16･18号溝と重複し、平面観察から18号溝に前出し16号溝より後出する。不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はＡ混土。規模は長径120cm以上短径65cm深さ8cmで、東西端は溝との重複により消滅。遺物は出土しなかった。

19号土坑(第25図、ＰＬ９)

位置　86B-7。不整楕円形。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径150cm短径113cm深さ16cmである。遺物は出土しなかった。

20号土坑(第25図、ＰＬ９)

位置　86C-7。隅丸正方形。壁は垂直ぎみにに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径114cm短径106cm深さ33cmである。遺物は出土しなかった。

22号土坑(第25図、ＰＬ９)

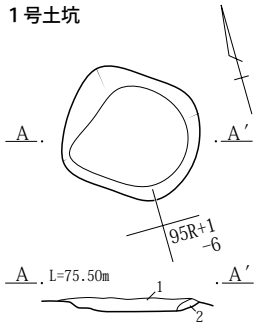
位置　76B-19。不整形で２基が重複するかもしれない。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径100cm短径45cm深さ30cmである。遺物は出土しなかった。

24号土坑(第26図、ＰＬ９)

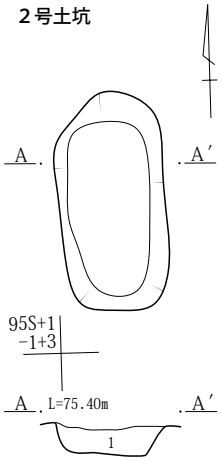
位置　86B-2。不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径96cm短径82cm深さ35cmである。古代の土師器甕破片１点が出土したが混入である。

25号土坑(第26図、ＰＬ９)

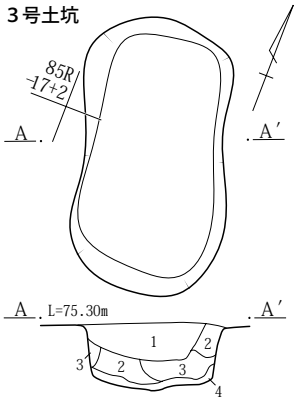
位置　86B-2。不整長楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径237cm短径100cm深さ51cmである。遺物は出土しなかった。古墳時代の土師器破片１点が出土したが混入である。



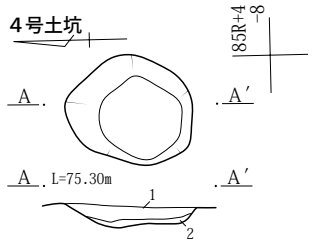
1号土坑
1．褐灰色土　浅間Ｂ軽石多く含む。暗赤灰色土ブロック含む。ややしまる。
2．浅間Ｂ軽石主体土



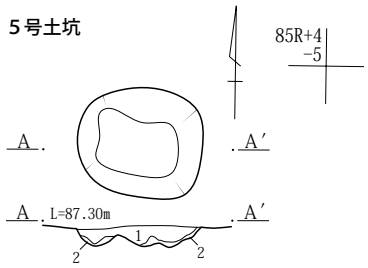
2号土坑
1．褐灰色土　浅間Ｂ軽石多く含む。暗赤灰色土ブロック含む。ややしまる。



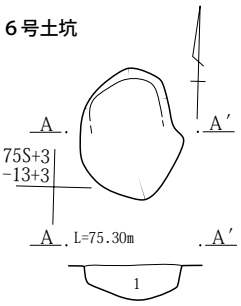
3号土坑
1．褐灰色砂質土　浅間Ｂ軽石多く含む。暗赤灰色土ブロック含む。ややしまる。
2．褐灰色砂質土＋暗赤灰色土大ブロック
3．褐灰色砂質土　暗赤灰色土大ブロック多量に含む。
4．褐灰色砂質土　暗赤灰色土小ブロックわずか含む。



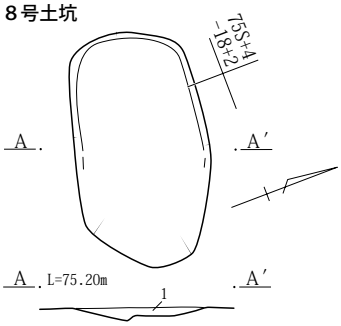
4号土坑
1．褐灰色砂質土　浅間Ｂ軽石多く含む。ややしまる。
2．褐灰色砂質土　浅間Ｂ軽石多く含む。暗赤灰色土ブロック含む。ややしまる。



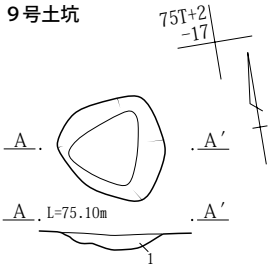
5号土坑
1．褐灰色砂質土　浅間Ｂ軽石多く含む。ややしまる。
2．褐灰色砂質土　浅間Ｂ軽石多く含む。暗赤灰色土ブロック含む。ややしまる。



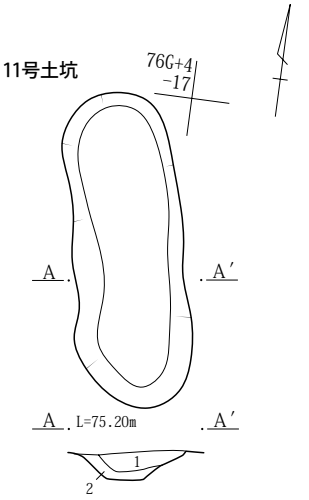
6号土坑
1．灰褐灰色砂質土　浅間Ｂ軽石多く含む。やや堅くしまる。



8号土坑
1．暗褐色土　炭化物・焼土粒・ローム粒含む。しまらない。



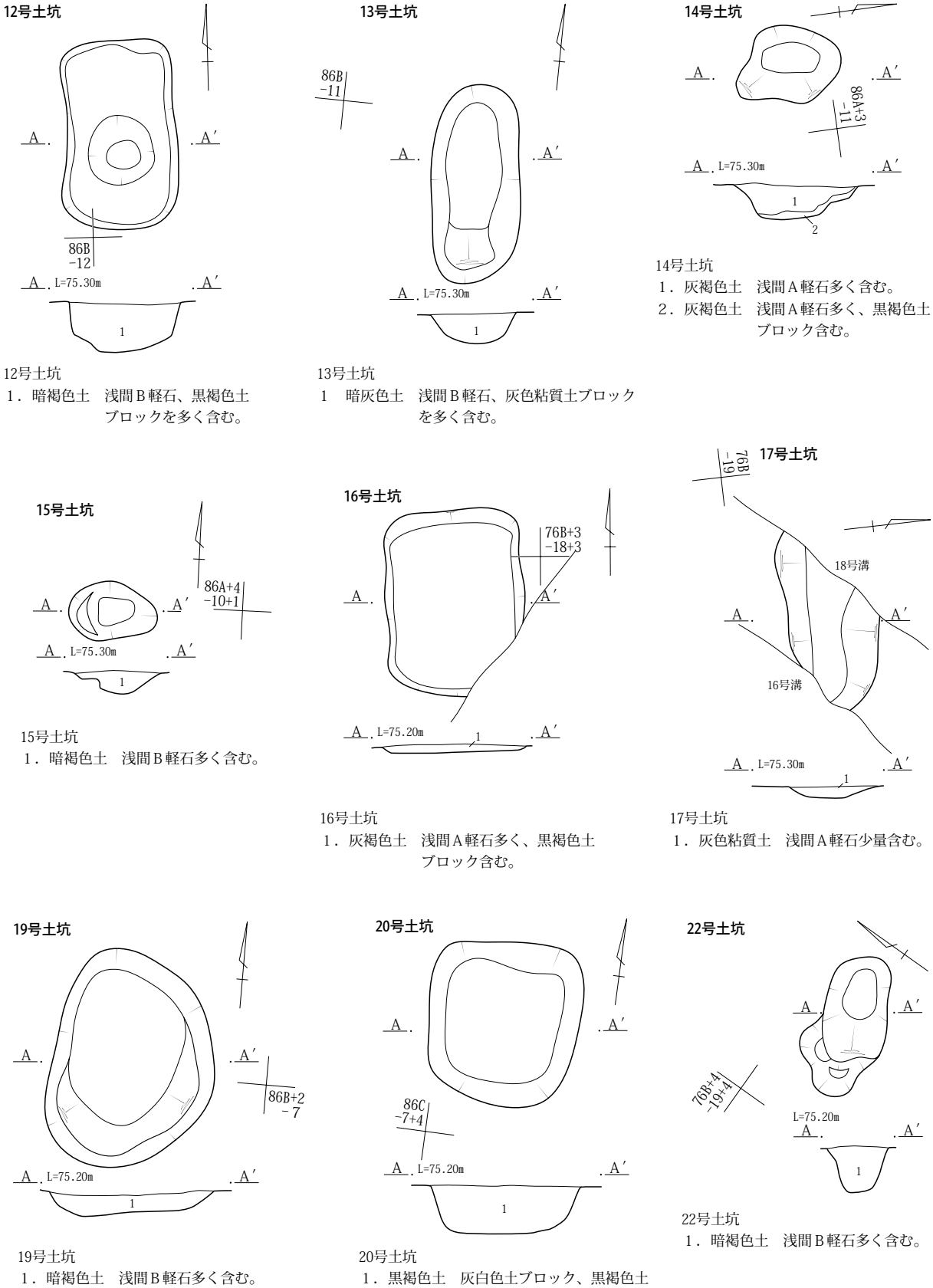
9号土坑
1．暗褐色土　炭化物・焼土粒・ローム粒含む。ややしまる。



11号土坑
1．暗褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。
2．褐色砂礫　浅間Ｂ軽石主体。

0　1:40　1m

第24図　1～6・8・9・11号土坑



14号土坑
1．灰褐色土　浅間Ａ軽石多く含む。
2．灰褐色土　浅間Ａ軽石多く、黒褐色土ブロック含む。

12号土坑
1．暗褐色土　浅間Ｂ軽石、黒褐色土ブロックを多く含む。

13号土坑
1　暗灰色土　浅間Ｂ軽石、灰色粘質土ブロックを多く含む。

15号土坑
1．暗褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。

16号土坑
1．灰褐色土　浅間Ａ軽石多く、黒褐色土ブロック含む。

17号土坑
1．灰色粘質土　浅間Ａ軽石少量含む。

19号土坑
1．暗褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。

20号土坑
1．黒褐色土　灰白色土ブロック、黒褐色土ブロック含む。

22号土坑
1．暗褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。

第25図　12 ～ 17・19・20・22号土坑

26号土坑(第26図)

位置　96A-15。平・断面形、規模不明。25溝に重複して前出する。埋没土はＡ混土。深さは約6cm。遺物は出土しなかった。

27号土坑(第26図、ＰＬ10)

位置　95T-15。ほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径54cm短径46cm深さ12cmである。古墳時代から古代の土師器破片4点が出土したが混入である。

28号土坑(第26図、ＰＬ10)

位置　95T-16。円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径56cm短径54cm深さ14cmである。遺物は出土しなかった。

29号土坑(第26図、ＰＬ10)

位置　96A-15。不整円形。壁は斜めに立ち上がるが、西側が浅く張り出す。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径80cm短径60cm深さ21cmである。土師器の破片がやや多く出土したが混入である。

31号土坑(第26図)

位置　96B-13。平・断面形、規模不明。埋没土はＢ混土。深さは約6cm。遺物は出土しなかった。

34号土坑(第26図、ＰＬ10)

位置　95T-17。29号溝と重複し後出と推定される。ほぼ半分が調査区外となる。隅丸方形と推定。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。石の混入が目立つ。規模は長径101cm短径41cm以上深さ53cmである。古代の土師器破片がやや多く、須恵器甕破片７片が出土したが混入である。

35号土坑(第26図、ＰＬ10)

位置　96A-7。不整方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はＢ混土。規模は長径85cm短径73cm深さ19cmである。遺物は出土しなかった。

37号土坑(第26図、ＰＬ10)

位置　96A-2。整った円形。壁はほぼ垂直で浅い。底面は凸凹する。埋没土はＡ混土。規模は長径87cm短径85cm深さ5cmである。遺物は出土しなかった。

38号土坑(第27図、ＰＬ10)

位置　96A-3。不整長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径113cm短径63cm深さ21cmである。遺物は出土しなかった。

39号土坑(第27図、ＰＬ10)

位置　86B-17。38号溝と重複するが新旧関係不明。不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径209cm短径78cm深さ22cmである。陶器碗1点(１)が出土し、時期は江戸時代に比定される。

40・41・42号土坑(第27図、ＰＬ10)

位置　86B-15。３基が相互に重複し、境界が不明のため、個々の長径規模は不明。形態はすべて隅丸長方形と見られる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。40号土坑は短径65cm深さ36cm、41号土坑は短径50cm深さ33cm、42号土坑は短径71cm深さ39cmである。遺物は出土しなかった。

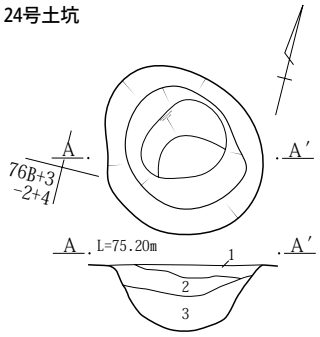
43号土坑(第27図、ＰＬ10)

位置　86B-14。円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はＢ混土。規模は長径88cm短径73cm深さ25cmである。遺物は出土しなかった。

44号土坑(第27図、ＰＬ10)

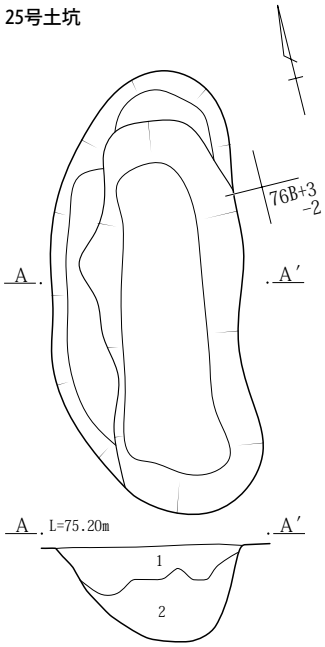
位置　86A-15。38号溝と重複し前出する。隅丸正方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長径66cm短径64cm深さ22cmである。遺物は出土しなかった。

24号土坑



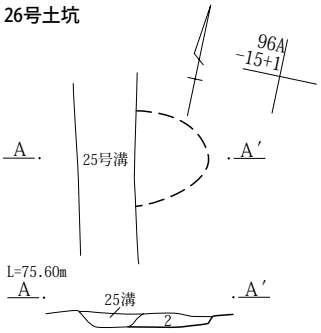
24号土坑
1．暗灰色土　白色細粒含む。
2．黒褐色土　浅間Ｂ軽石多く、灰白色土小ブロック含む。
3．灰褐色土　浅間Ｂ軽石、褐色土ブロック含む。

25号土坑



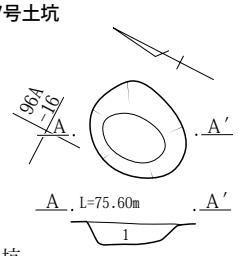
25号土坑
1．灰褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。
2．灰褐色土　浅間Ｂ軽石、灰白色土ブロック多く含む。

26号土坑



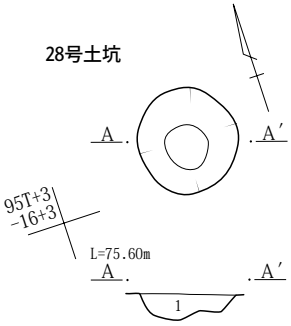
26号土坑
1．灰色土　浅間Ａ軽石わずか含む。

27号土坑



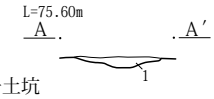
27号土坑
1．灰褐色土　浅間Ｂ軽石、灰白色土ブロック多く含む。

28号土坑



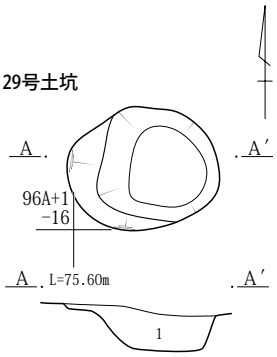
28号土坑
1．灰褐色土　浅間Ｂ軽石、灰白色土ブロック多く含む。

31号土坑



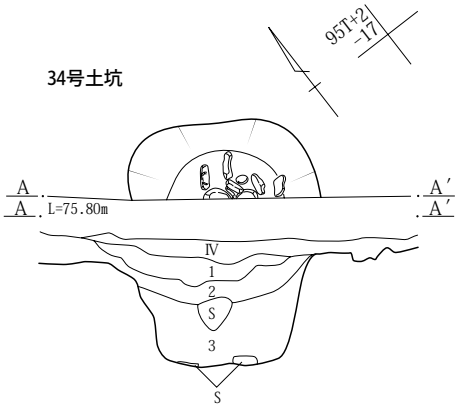
31号土坑
1．灰褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。

29号土坑



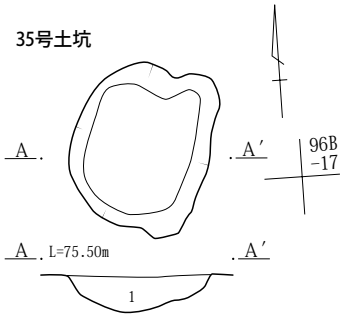
29号土坑
1．暗褐色土　浅間Ｂ軽石、灰白色土ブロック多く含む。

34号土坑



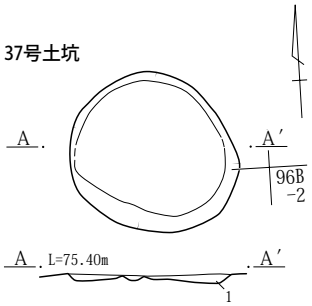
34号土坑
1．灰褐色土　浅間Ｂ軽石、黄灰色土含む。
2．黒褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。
3．黒褐色土　浅間Ｂ軽石含む。

35号土坑



1．暗褐色土　浅間Ｂ軽石、黒褐色土ブロック多く含む。

37号土坑

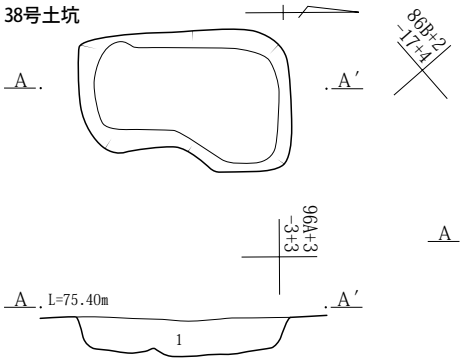


37号土坑
1．灰褐色土　浅間Ａ軽石含む。

0　1:40　1m

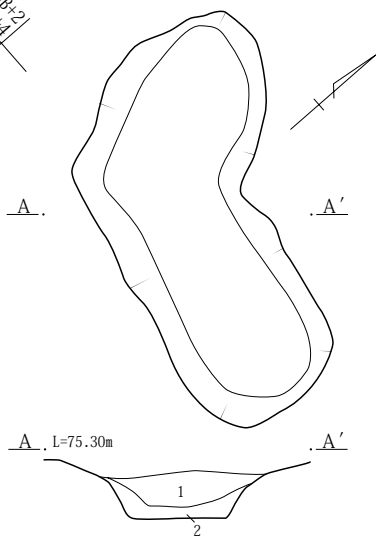
第26図　24 ～ 29・31・34・35･37号土坑

38号土坑



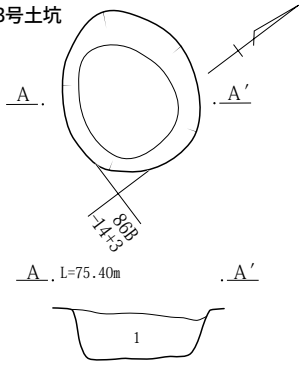
38号土坑
1．灰色土　浅間Ｂ軽石、灰白色土ブロックを多く含む。

39号土坑



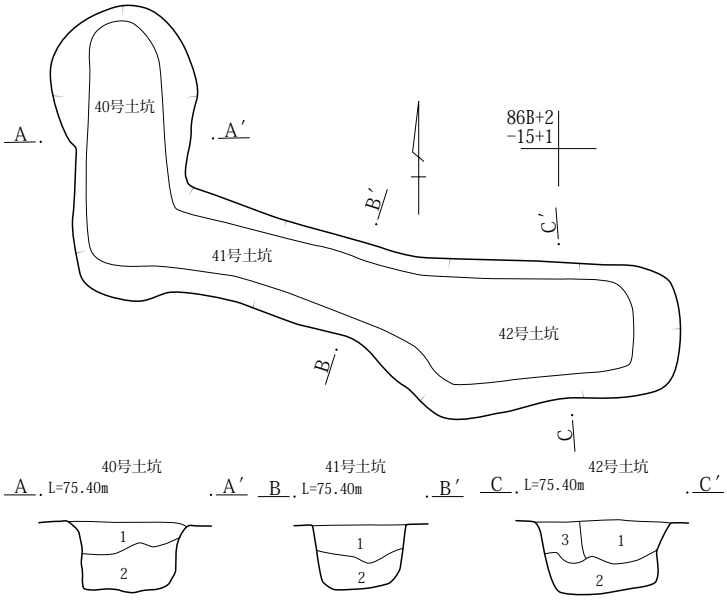
39号土坑
1．灰褐色土　浅間Ｂ軽石、黒褐色土ブロック多く含む。
2．黒褐色土　浅間Ｂ軽石、灰白色土ブロック多く含む。

43号土坑

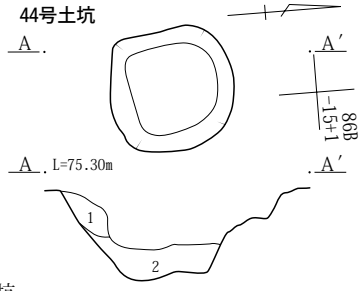


43号土坑
1．灰褐色土　浅間Ｂ軽石多く、灰白色土小ブロック少量含む。

40・41・42号土坑



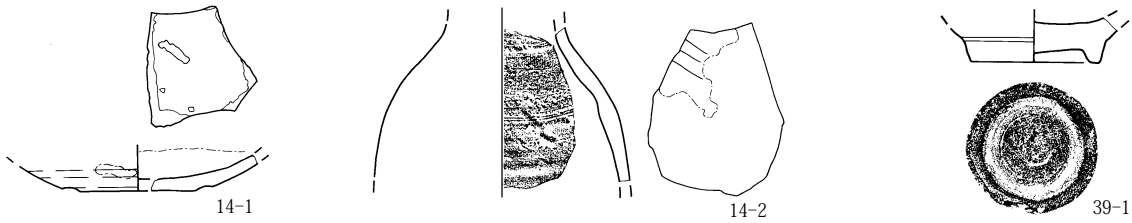
44号土坑



44号土坑
1．暗灰色土　浅間Ａ軽石含む。38号溝埋没土。
2．灰褐色土　浅間Ｂ軽石、灰白色土ブロック含む。

40・41・42号土坑
1．灰褐色土浅間Ｂ軽石､灰白色土ブロック多く含む。
2．暗褐色粘質土灰白色シルトブロック多く含む。
3．暗褐色粘質土黒灰色土ブロック多く含む。

0　1:40　1m



第27図　38～44号土坑平・断面図　、14・39号土坑出土遺物

(4)井戸

１号井戸跡(第28図 、ＰＬ11･24)

位置　75S-13　**重複**　なし

確認面形状と規模　不整楕円形。

長径182㎝短径150㎝

底面形状と規模　隅丸台形。長径62㎝短径50㎝

断面形　漏斗状　深さ104㎝

埋没状況　下層は砂質で埋まり、上層は一気に埋めている。人為的な埋没。

遺物　土師器甕1点(１)のみである。

時期出土　遺物から４世紀後半に比定される。

２号井戸跡(第28図、ＰＬ11・24)

位置　75S-13　**重複**　なし

確認面形状と規模　不整円形。長径146㎝短径134㎝

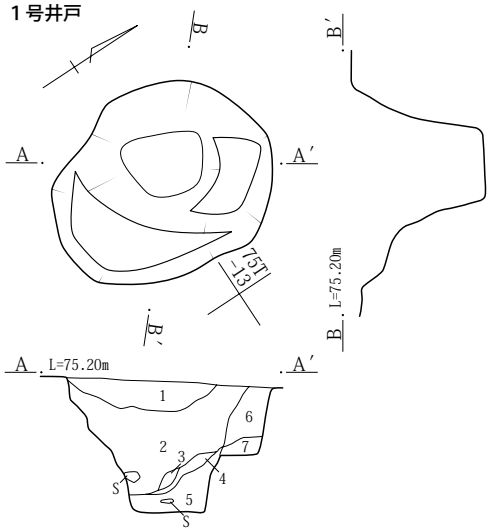
底面形状と規模　不整円形。長径92㎝短径88㎝

断面形　円筒形で上半は斜めに開く。深さ85㎝

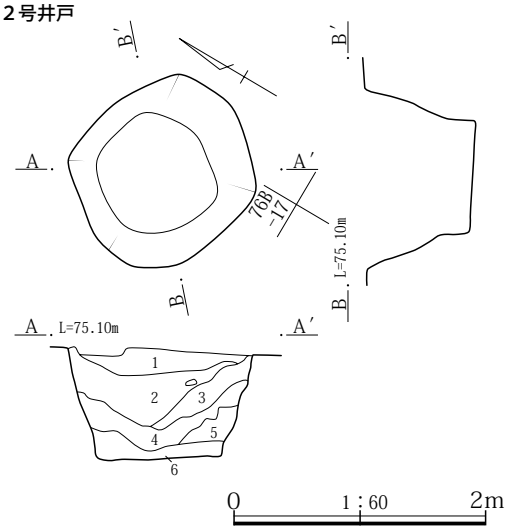
埋没状況　自然埋没か。

遺物　須恵器杯１点(１)のほか、須恵器甕の破片が７点出土している。

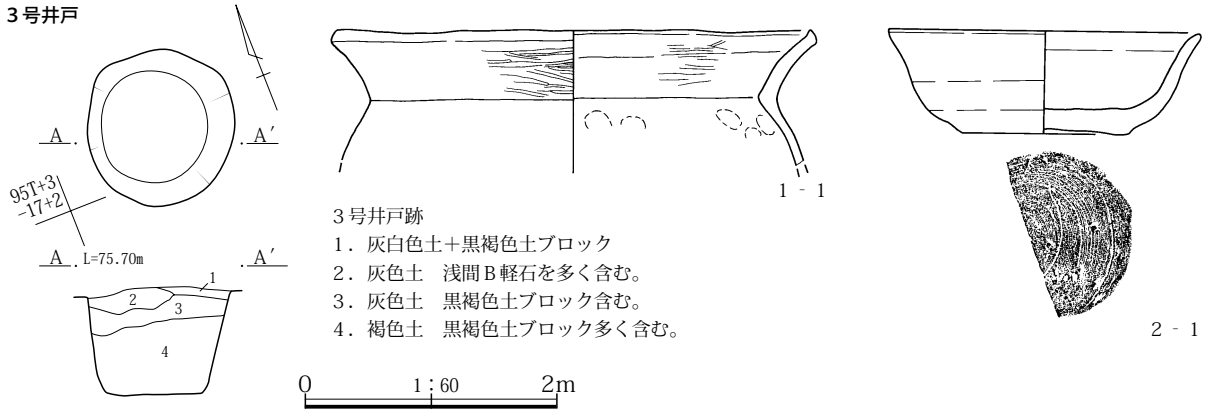
時期　出土遺物から10世紀後半に比定される。



１号井戸跡
1．暗褐色土　やや粘質。灰褐色土ブロック少量､白色細粒を多く含む。しまる。
2．灰褐色土　やや粘質。暗赤褐色土ブロック含む。ややしまる。
3．灰褐色土　やや粘質。ロームブロック含む。ややしまる。
4．黒褐色砂質土　ローム粒わずか含む。ややしまる。
5．灰褐色砂質土　ローム粒わずか含む。ややしまる。
6．黒褐色土　やや粘質｡褐灰色土ブロック､白色細粒含む｡ややしまる。
7．黒褐色土　やや粘質。ローム粒含む。ややしまる。



２号井戸跡
1．灰褐色砂質土　黄色細粒、白色細粒、褐灰色土ブロック含む。ややしまる。
2．灰褐色砂質土　黄色細粒少量、褐灰色土ブロック含む。ややしまる。
3．暗褐色土　やや粘質。褐灰色土ブロック含む。ややしまる。
4．黒褐色土　やや粘質。ロームブロック含む。ややしまる。
5．黒褐色土　やや粘質。褐灰色土ブロック含む。ややしまる。
6．黒色粘質土　ローム粒少量含む。しまらない。



３号井戸跡
1．灰白色土＋黒褐色土ブロック
2．灰色土　浅間Ｂ軽石を多く含む。
3．灰色土　黒褐色土ブロック含む。
4．褐色土　黒褐色土ブロック多く含む。

第28図　１～３号井戸跡、１・２号井戸跡出土遺物

３号井戸跡(第28図、ＰＬ11)

位置　95T-16　**重複**　29号溝に後出し、32号溝と重複するが新旧関係不明。

確認面形状と規模　長径125㎝短径117㎝

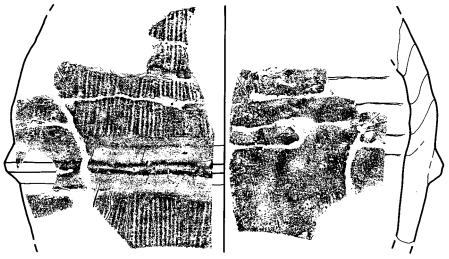
底面形状と規模　長径89㎝短径76㎝

断面形　円筒形　深さ80㎝

埋没状況　黒褐色土ブロックを多く含み、人為的な埋没。埋没土はＢ混土。

遺物　古墳時代の土師器片がやや多く出土したが混入である。

時期　埋没土から中近世に比定される。



1 (1/4)

第29図　36号ピット出土遺物

(5)ピット(第８・９・29～31図、ＰＬ12・24)

ア 古墳時代～平安時代

８～18号、39号ピットは、埋没土から古代以前の所産であり、隣接する下斉田遺跡1号住居跡(古墳時代前期)との関連が想定される。なお、８号､11号、13～15号、39号ピットは、下斉田遺跡調査済のものを再確認したため、埋没土は不明である。出土遺物は、10号ピットから古代の土師器杯片１点、17号ピットから古代の土師器甕片１点が出土した。

35～37号ピットも埋没土から古代以前の所産であり、36号ピットから埴輪片１点(１)が出土している。

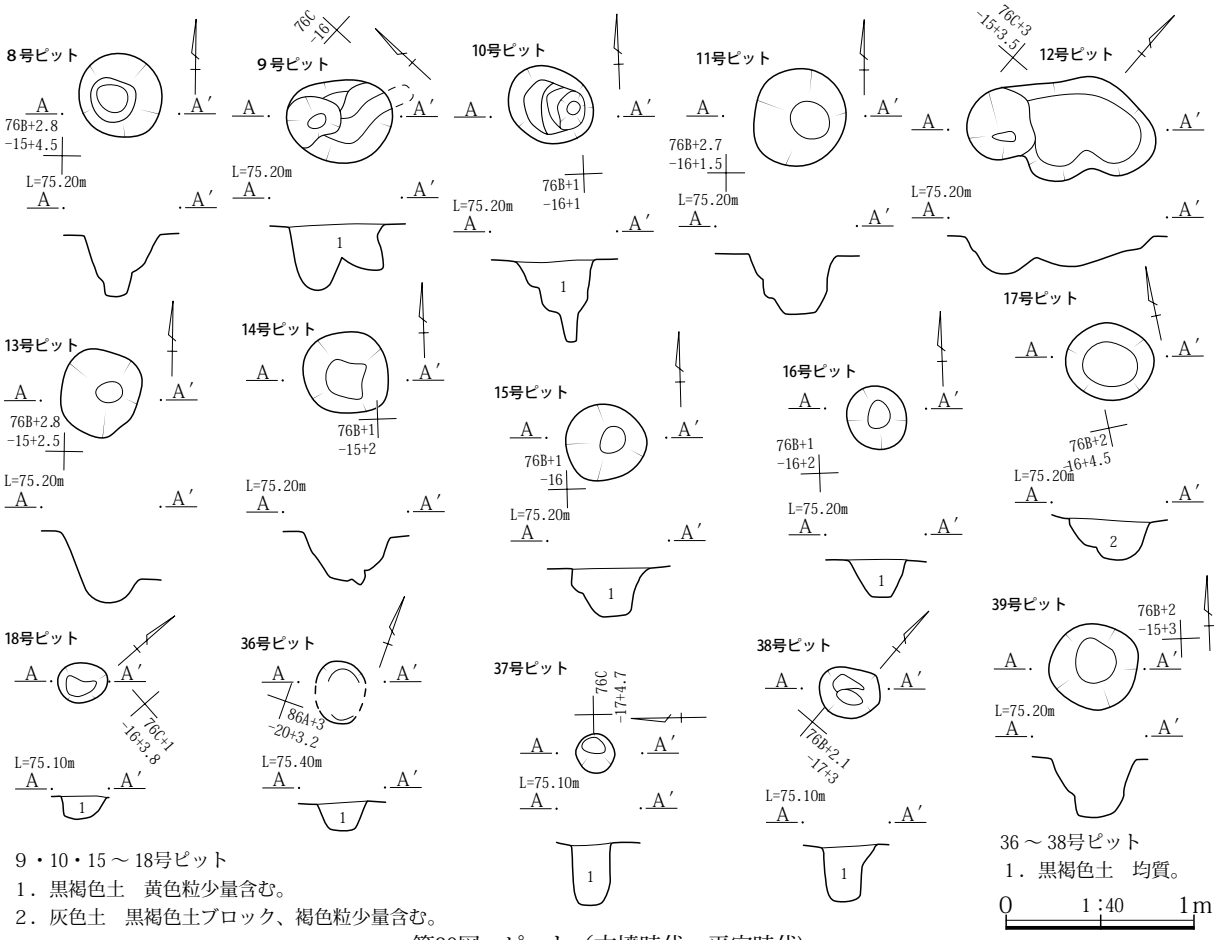
イ 中世・近世

１～５号ピット、22号ピットは、Ａｓ－Ｂ下水田面で確認され、埋没土はＢ混土である。19～21号ピット、32号ピットも確認面は違うが、埋没土はＢ混土である。27号ピットは浅間Ｂ軽石降下以降の所産である。なお、23～26号ピット、28～31号ピット、33～35号ピットは掘立柱建物跡として別に掲載した。

第３表　ピット計測表

単位：㎝

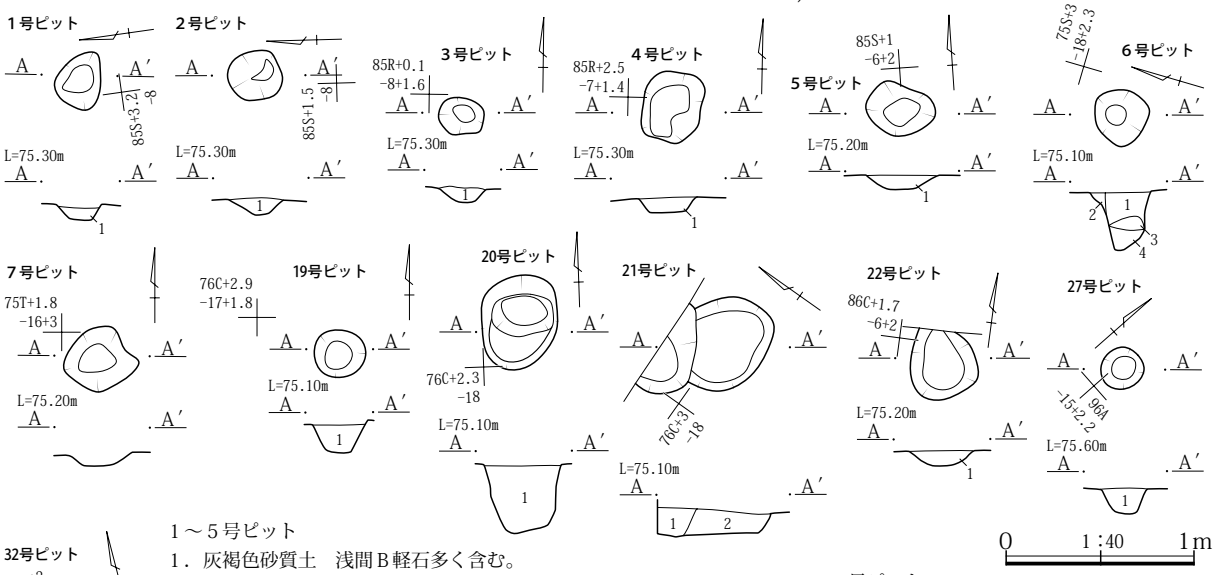
№.	位置	長径	短径	深さ
1	85S-7	31	24	9
2	85S-7	28	26	9
3	85Q-8	25	19	8
4	85R-7	37	30	8
5	85S-6	35	26	8
6	75S-18	30	28	31
7	75T-16	32	31	6
8	76B-15	47	45	32
9	76B-16	57	40	33
10	76B-16	47	34	42
11	76B-16	52	49	31
12	76C-15	100	53	20
13	76B-15	45	42	35
14	76B-15	44	42	24
15	76B-15	42	41	26
16	76B-16	34	32	20
17	76B-16	46	41	21
18	76C-16	27	22	11
19	76C-17	27	26	15
20	76C-17	52	42	35
21	76C-17	59以上	46	15
22	86C-16	37以上	35	8
27	96A-15	24	23	13
32	96B-8	23	19	7
36	86A-20	33	26	15
37	76B-17	21	20	32
38	76B-17	31	26	29
39	76B-15	45	45	30

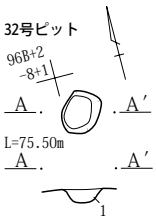


9・10・15～18号ピット
1．黒褐色土　黄色粒少量含む。
2．灰色土　黒褐色土ブロック、褐色粒少量含む。

36～38号ピット
1．黒褐色土　均質。

第30図　ピット（古墳時代～平安時代）





1～5号ピット
1．灰褐色砂質土　浅間Ｂ軽石多く含む。

6号ピット
1．灰褐色土　やや粘質。黄白色土ブロック含む。ややしまる。
2．褐灰色土　やや粘質。黄白色土粒含む。ややしまる。
3．黄白色砂質土　しまる。
4．黒褐色土　やや粘質。黄白色土　粒わずか含む。しまらない。

19・20号ピット
1．黒褐色土　暗褐色土ブロック、浅間Ｂ軽石を多く含む。

21・22号ピット
1．黒褐色土　白色細粒含む。
2．暗褐色土　浅間Ｂ軽石を多く含む。

27号ピット
1．灰色粘質土　白色細粒含む。

32号ピット
1．褐灰色土　浅間Ｂ軽石を多く含む。

第31図　ピット（中世・近世）

(6)溝

ア 古墳時代～平安時代

９号溝(第32図、ＰＬ13)

位置　75R~T-17･18。平面形態は、やや東側に膨らんだ直線状。断面は逆台形。走向方位はＮ－10°－Ｅ。規模は長さ13.32m幅112cm深さ45cmである。遺物は器台脚部１点(１)のほか、土師器片がやや多く出土した。北方延長線上に15号溝があり同一の溝と思われる。時期は出土遺物から４世紀前半に比定される。

15号溝(第32図、ＰＬ13)

位置　76A~C-16･17。平面形態は、やや西側に膨らんだ直線状。断面は逆台形。走向方位はＮ－32°－Ｅ。規模は長さ10.40m幅106cm深さ46cmである。遺物は土師器破片11点が出土している。時期は９号溝同様４世紀前半に比定される。

28号溝(第32図、ＰＬ13・24)

位置　95T~96B-16･17。29号溝より後出し、30･41号溝より前出する。平面形態は、ほぼ直線状。断面は逆台形。走向方位はＮ－20°－Ｗ。規模は長さ11.52m幅188cm深さ47cmである。遺物は土師器杯1点(１)、須恵器杯1点(２)のほか、古代の土師器片がやや多く出土した。時期は出土遺物から９世紀前半に比定される。

29号溝(第33図、ＰＬ14)

位置　95T~96C-15~17。24･28･40号溝より前出する。平面形態は、Ｊ字状をなし、北端部はさらに細く直線状に凹む。断面は皿状に近い。走行方位はＮ－32°－Ｅ～Ｎ－70°－Ｅ。規模は長さ11.04m幅245cm深さ13cmである。遺物は古代の土師器片がやや多く出土した。時期は出土遺物から古代に比定される。

48号溝(第33図、ＰＬ19)

位置　95P~S-10･11。50号溝より前出。平面形態は、輪郭が乱れた直線状。断面は皿状。走向方位はＮ－30°－Ｅ。規模は長さ31.2m幅130cm深さ15cmである。本遺構を境に東側が低地地形、西側が比較的高燥な地形となっており、元来は西側が高くなっており、土手下であったと見られる。南1区では確認されていないが、Ｂ下水田の西限に位置するため、水田の床土面に残された痕跡溝とも考えられる。出土遺物は古代の土師器片８点が出土した。時期は出土遺物と埋没土から古代に比定される。

イ 中世・近世

１・２号溝(第34図、ＰＬ14)

位置　85Q~S-17。１号溝は北壁から約３m付近で一度立ち上がるため、それより南側を２号溝としたが、一連の遺構と考えられる。平面形態は、やや西側に膨らんだ直線状。断面は逆台形で浅い。規模は長さ12.48m幅60cm深さ11cmである。走向方位はＮ－0°～Ｎ－11°－Ｗ。遺物は出土しなかった。北方延長線上に39号溝があり同一の溝と思われる。39号溝の埋没土はＡ混土であり、本遺構も同様に江戸時代後期以降に比定される。

３・４号溝(第34図、ＰＬ14)

位置　85Q~T-8。ほぼ同一方向に重複して走向するが新旧関係不明。平面形態は、やや西側に膨らんだ直線状。断面形は浅くはっきりしない。規模は長さ13.20m幅50cm深さ8cmである。走向方位はＮ－4°－Ｅ～Ｎ－5°－Ｗ。遺物は出土しなかった。北方延長線上に46号溝があるが、平面形態が異なっており同一とは見なしがたい。確認面は浅間Ｂ軽石直下であり、水田との関連も想定される。

５号溝(第34図、ＰＬ14)

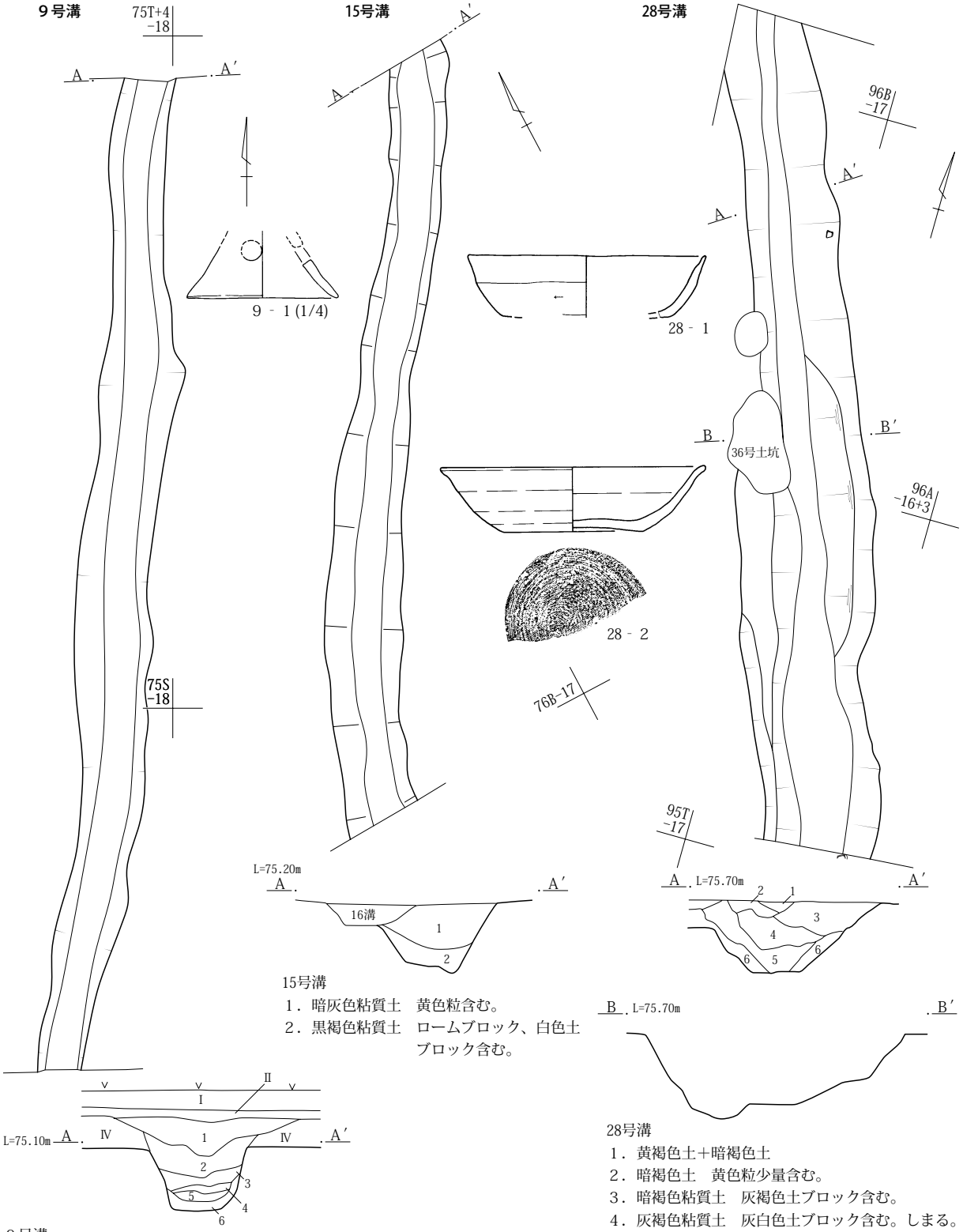
位置　75Q~T-19。平面形態は、ほぼ直線状。断面は逆台形。走向方位はＮ－4°－Ｅ。規模は長さ13.48m幅72cm深さ30cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

６号溝(第34図、ＰＬ15)

位置　75R･S-13。平面形態は、ほぼ直線状。断面は逆台形。走向方位はＮ－17°－Ｅ。埋没土はＢ混土。規模は長さ5.18m幅52cm深さ17cmである。遺物は古代の土師器甕片１点が出土したが混入である。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

７号溝(第35図、ＰＬ15)

位置　75R･S-12･13。平面形態は、ほぼ直線状。



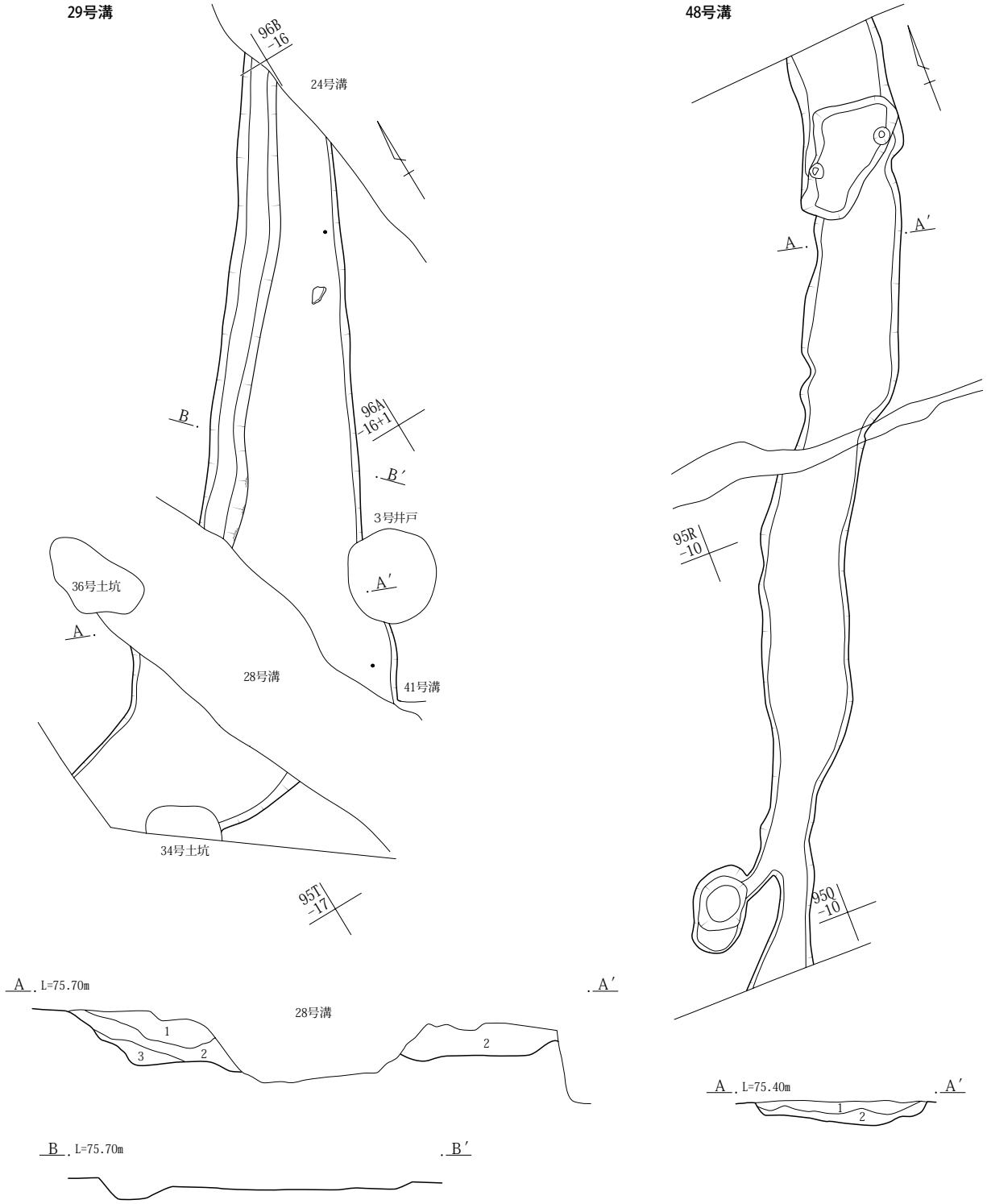
15号溝
1．暗灰色粘質土　黄色粒含む。
2．黒褐色粘質土　ロームブロック、白色土ブロック含む。

28号溝
1．黄褐色土＋暗褐色土
2．暗褐色土　黄色粒少量含む。
3．暗褐色粘質土　灰褐色土ブロック含む。
4．灰褐色粘質土　灰白色土ブロック含む。しまる。
5．灰褐色粘質土　褐色小ブロック含む。しまる。
6．褐色土　黄色土ブロック、黒褐色土ブロック含む。

9号溝
1．暗褐色土　やや粘質。白色細粒含む。やや堅くしまる。
2．暗褐色土　やや粘質。白色細粒・ローム粒わずか含む。やや堅くしまる。
3．暗褐色土　やや粘質。灰褐色土ブロック含む。やや堅くしまる。
4．黒褐色土　やや粘質。均質。
5．灰褐色土　やや粘質。ローム粒わずか含む。やや堅くしまる。
6．黒褐色土　やや粘質。ローム粒含む。ややしまる。

0　1:40　1m
0　1:80　2m

第32図　9・15・28号溝、9・28号溝出土遺物

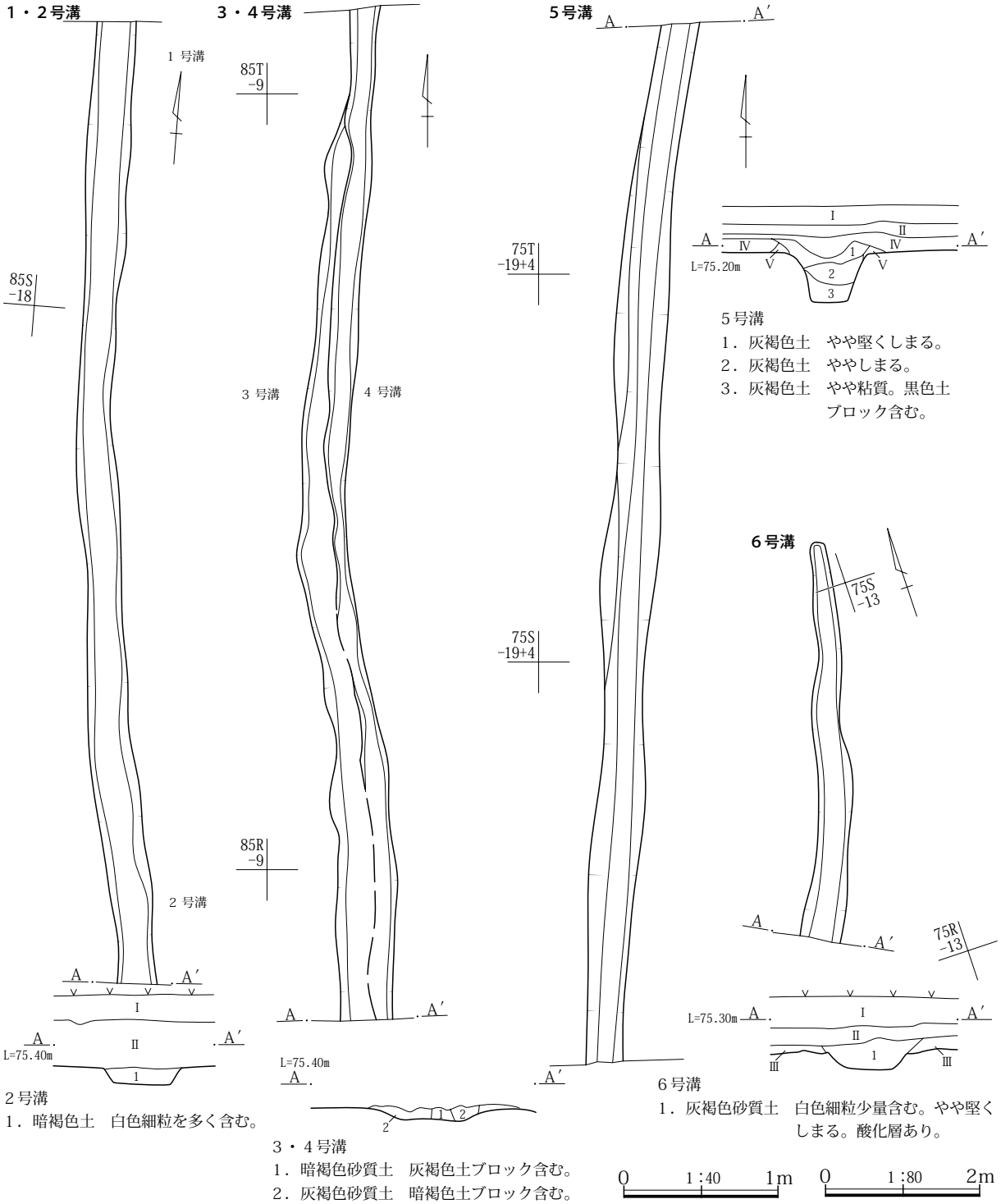


29号溝
1．灰褐色粘質土　灰白色土ブロック含む。しまる。
2．灰褐色粘質土　褐色小ブロック含む。しまる。
3．褐色土　黄色土ブロック、黒褐色土ブロック含む。

48号溝
1．灰褐色粘質土　黄褐色土(FA？)ブロック含む。しまる。
2．黒褐色土　ローム粒含む。

0　1:40　1m
0　1:80　2m

第33図　29・48号溝



第34図　1～6号溝

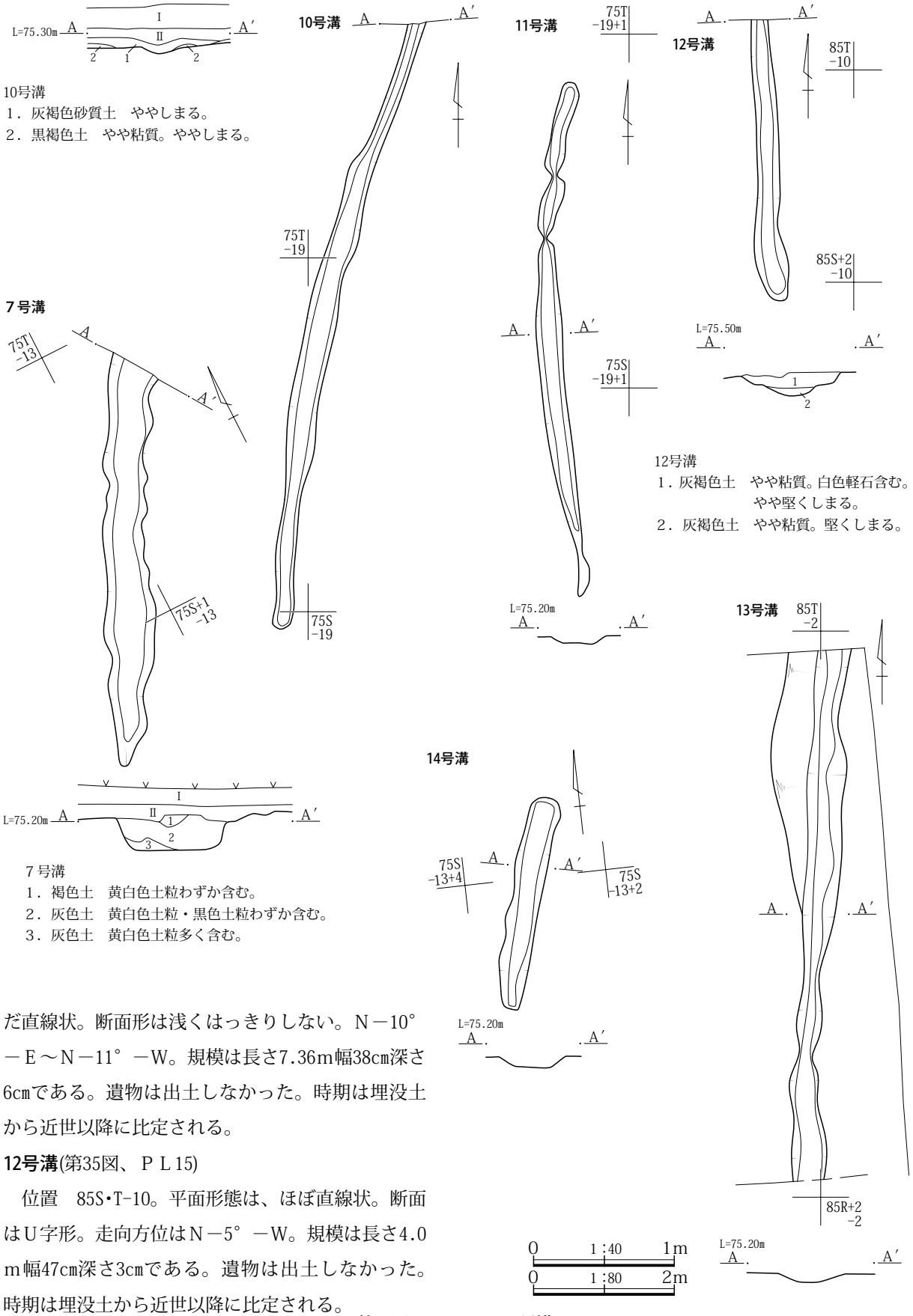
断面は逆台形。走向方位はN－28°－E。埋没土は表土に近い。規模は長さ5.72m幅72cm深さ21cmである。遺物は出土しなかった。時期は埋没土から近現代に比定される。

10号溝(第35図、ＰＬ15)

位置　75R~T-18･19。平面形態は、やや西側に膨らんだ直線状。断面形は浅くはっきりしない。N－13°－E。規模は長さ8.84m幅44cm深さ3cmである。遺物は出土しなかった。時期は埋没土から近世以降に比定される。

11号溝(第35図、ＰＬ14)

位置　75R･S-19。平面形態は、やや西側に膨らん



だ直線状。断面形は浅くはっきりしない。Ｎ－10°－Ｅ～Ｎ－11°－Ｗ。規模は長さ7.36m幅38cm深さ6cmである。遺物は出土しなかった。時期は埋没土から近世以降に比定される。

12号溝(第35図、ＰＬ15)

位置　85S･T-10。平面形態は、ほぼ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－5°－Ｗ。規模は長さ4.0ｍ幅47cm深さ3cmである。遺物は出土しなかった。時期は埋没土から近世以降に比定される。

第35図　７・10～14号溝

13号溝(第35図、ＰＬ15)

位置　85R･S-1･2。平面形態は、ほぼ直線状。断面形は浅くはっきりしない。走行方位はＮ－3°－Ｅ。規模は長さ7.54m幅108cm深さ5cmである。遺物は出土しなかった。北方延長線上に21号溝があり同一の溝と思われる。時期は埋没土から近世以降に比定される。

14号溝(第35図、ＰＬ15)

位置　75R･S-13。平面形態は、ほぼ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－31°－Ｅ。規模は長さ3.02ｍ幅44cm深さ8cmである。遺物は出土しなかった。６号溝に近似しており、時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

16号溝(第36・42図、ＰＬ16・24)

位置　76A~C-16~18。17･18号溝より後出する。平面形態はＹ字形。断面はＵ字形。走向方位はＮ－13°－Ｗ～Ｎ－51°－Ｅ。Ｎ－34°－Ｅ。規模は長さ18.60m幅128cm深さ14cmである。掲載遺物は碗皿類や調理具があり、ほかに施釉陶器碗皿類片４点、鉢片１点、在地土器焙烙･鉢２点が出土している。時期は出土遺物から江戸時代中期頃に比定される。

17号溝(第36図、ＰＬ16)

位置　76A･B-17･18。16号溝より前出する。平面形態は直線状。断面は浅い逆台形。走向方位はＮ－26°－Ｅ。規模は長さ4.48m幅60cm深さ10cmである。遺物は出土しなかった。時期は埋没土から近世以降に比定される。

18号溝(第36・42図、ＰＬ16・24)

位置　76A~C-17~19。16号溝より前出する。平面形態は、ほぼ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－38°－Ｅ。埋没土はＢ混土。規模は長さ10.32m幅50cm深さ35cmである。遺物は出土しなかった。時期は埋没土から中世以降に比定される。

19・46号溝(第37・42図、ＰＬ16・24)

位置　86A~C-10~13。２条が重複し、46号溝が後出する。平面形態は19号溝がＴ字形、46号溝がほぼ直線状をなす。46号溝の底面には小穴が顕著であり、杭跡も含まれる。断面は19号溝がＵ字形、46号溝が逆台形を呈する。埋没土はともにＡ混土。走行方位は19号溝がＮ－83°－Ｗ～Ｎ－5°－Ｅ。規模は長さ23.28m幅210cm深さ3cm。46号溝の走行方位はＮ－89°－Ｗ～Ｎ－0°、長さ23.60m幅48cm深さ6cmである。遺物は19号溝から陶器碗１点(２)、焙烙１点(３)、甕１点(４)が出土するが、カワラケ1点(１)は混入であろう。ほかに焙烙片1点がある。ただし、46号溝との重複が著しく、遺物は46号溝のものも含まれるかもしれない。19号溝西方延長線上に38号溝があり同一の溝と思われる。また、46号溝南方延長線上に３・４号溝があるが、平面形態が異なっており同一とは見なしがたい。19号溝は出土遺物から江戸時代中期頃に、46号溝はそれ以降に比定される。

20号溝(第37図、ＰＬ17)

位置　86B-3~5。平面形態は、ほぼ直線状。断面は浅くはっきりしない。埋没土はＡ混土。走行方位はＮ－80°－Ｗ。規模は推定で長さ11.88m幅40cm深さ3cmである。遺物は出土しなかった。東方延長線上に23号溝があり同一の溝の可能性もある。時期は浅間Ａ軽石降下以降である。

21号溝(第38図)

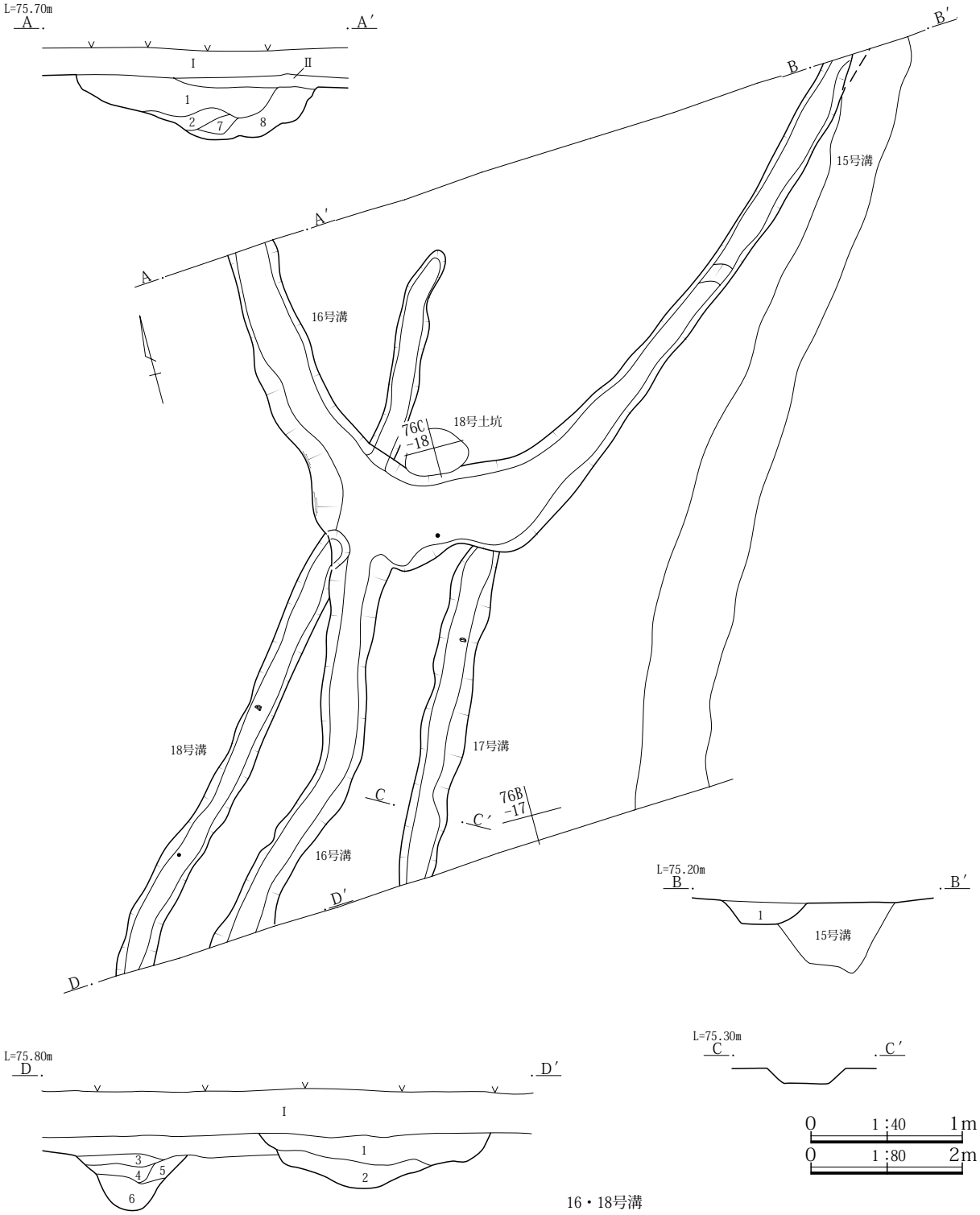
位置　86A~C-1･2。Ｂ下水田面東大畦より後出する。平面形態は、西側に膨らんだ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－4°－Ｅ。規模は長さ8.8m幅45cm深さ9cmである。遺物は古代の土師器片1点が出土したが混入である。南方延長線上に13号溝があり同一の溝と思われる。時期は埋没土から近世以降に比定される。

22号溝(第38図)

位置　86C-1･2。平面形態は、ほぼ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－5°－Ｗ。埋没土はＢ混土。規模は長さ1.28m幅51cm深さ15cmである。遺物は出土しなかった。時期は埋没土から浅間Ｂ軽石降下以降である。

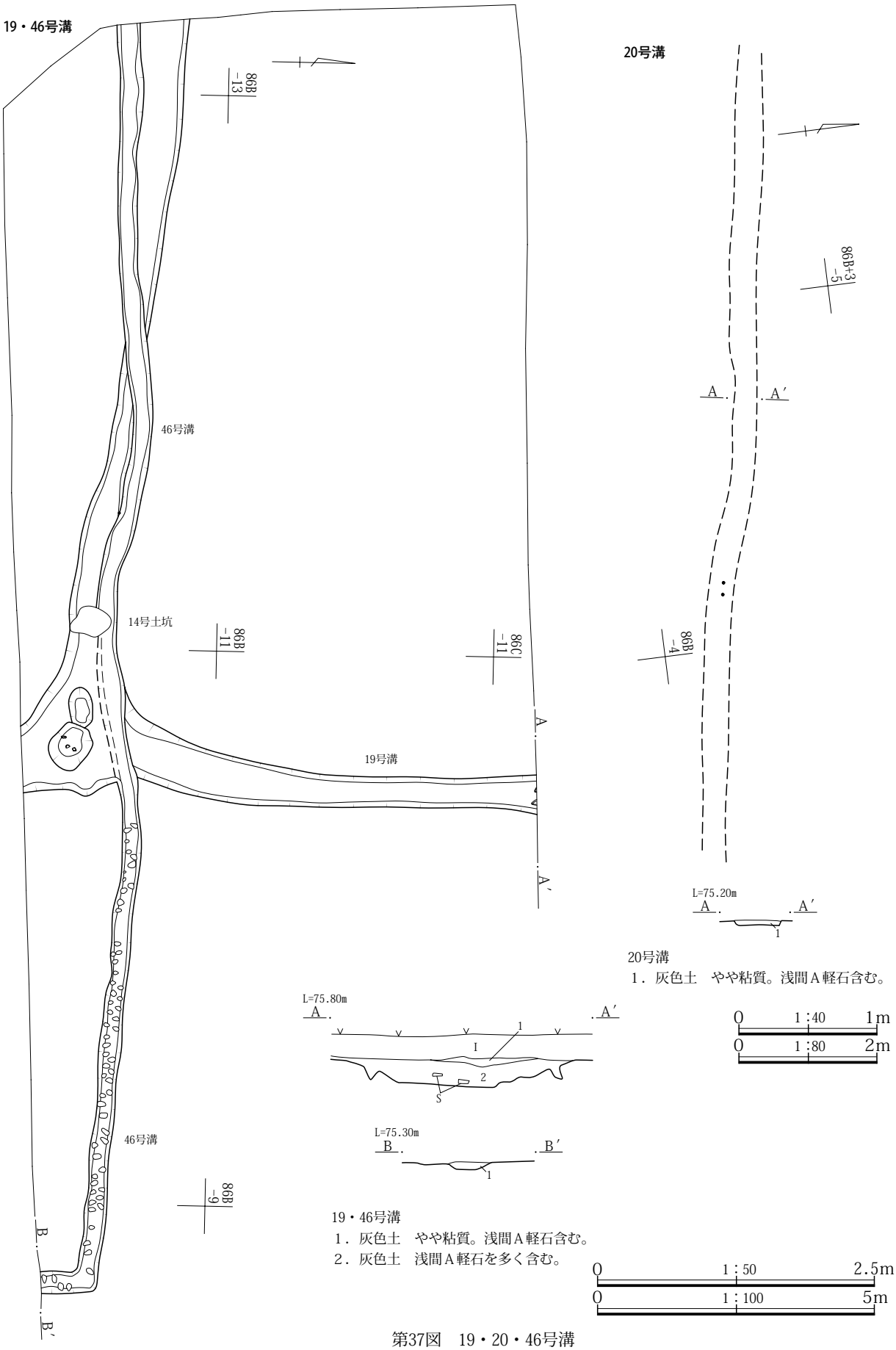
23号溝(第38図)

位置　76･86A-20･1。平面形態は、ほぼ直線状。断面形は浅くはっきりしない。走行方位はＮ－80°－Ｗ。規模は長さ7.24m幅48cm深さ9cmである。遺

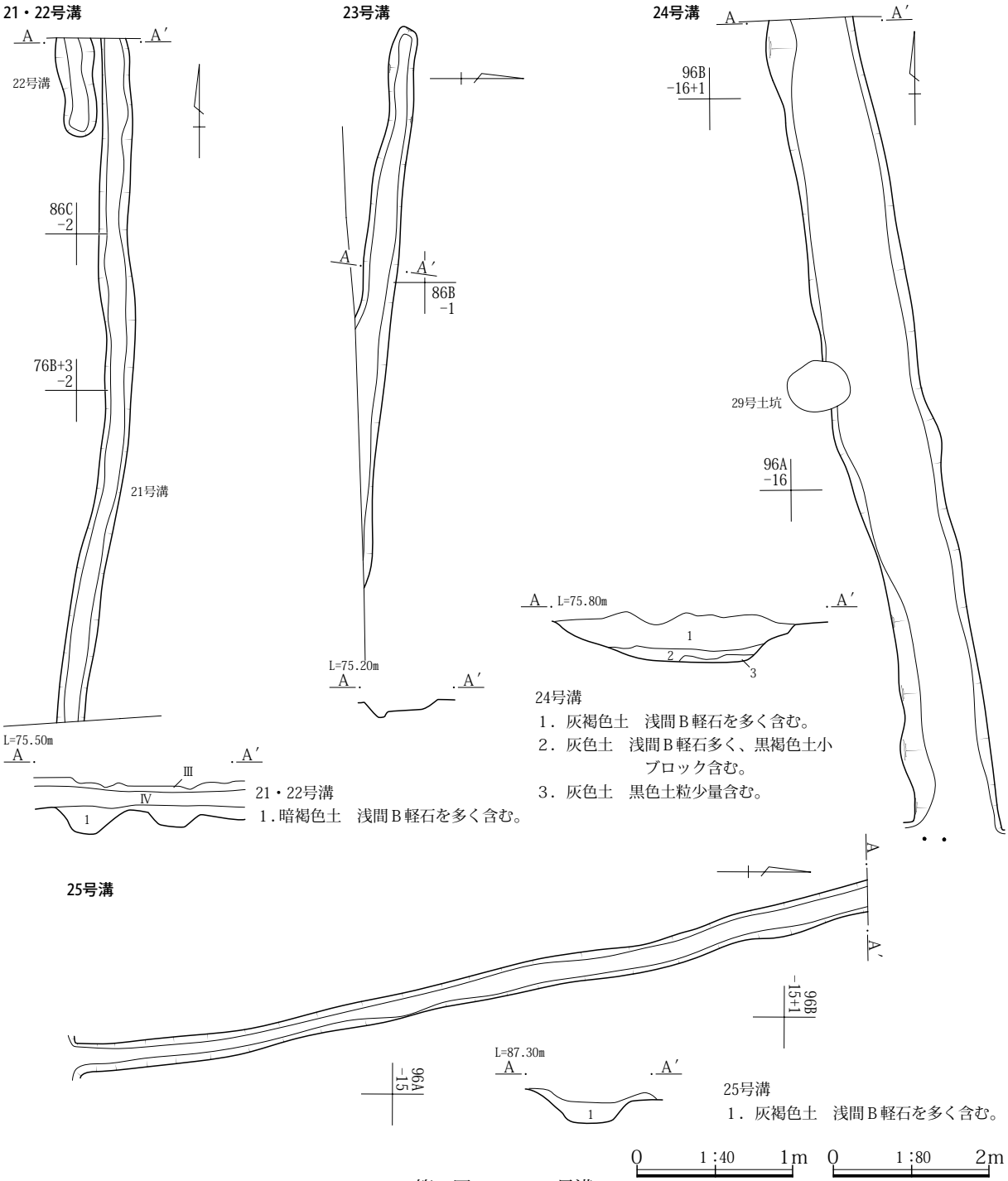


16・18号溝
１．灰色土　浅間Ａ軽石多く含む。しまらない。
２．灰色土　浅間Ａ軽石、浅間Ｂ軽石多く含む。
３．灰褐色土　浅間Ｂ軽石多く、灰色土含む。
４．灰褐色土　浅間Ｂ軽石多く、黒褐色土含む。
５．暗褐色土　浅間Ｂ軽石多く、灰褐色土ブロック含む。
６．暗褐色土　浅間Ｂ軽石を多く含む。
７．浅間Ａ軽石主体
８．灰色土

第36図　16 ～ 18号溝



第37図　19・20・46号溝



第38図　21～25号溝

物は出土しなかった。西方延長線上に20号溝があり同一の溝の可能性もある。時期は20号溝に近いと思われる。

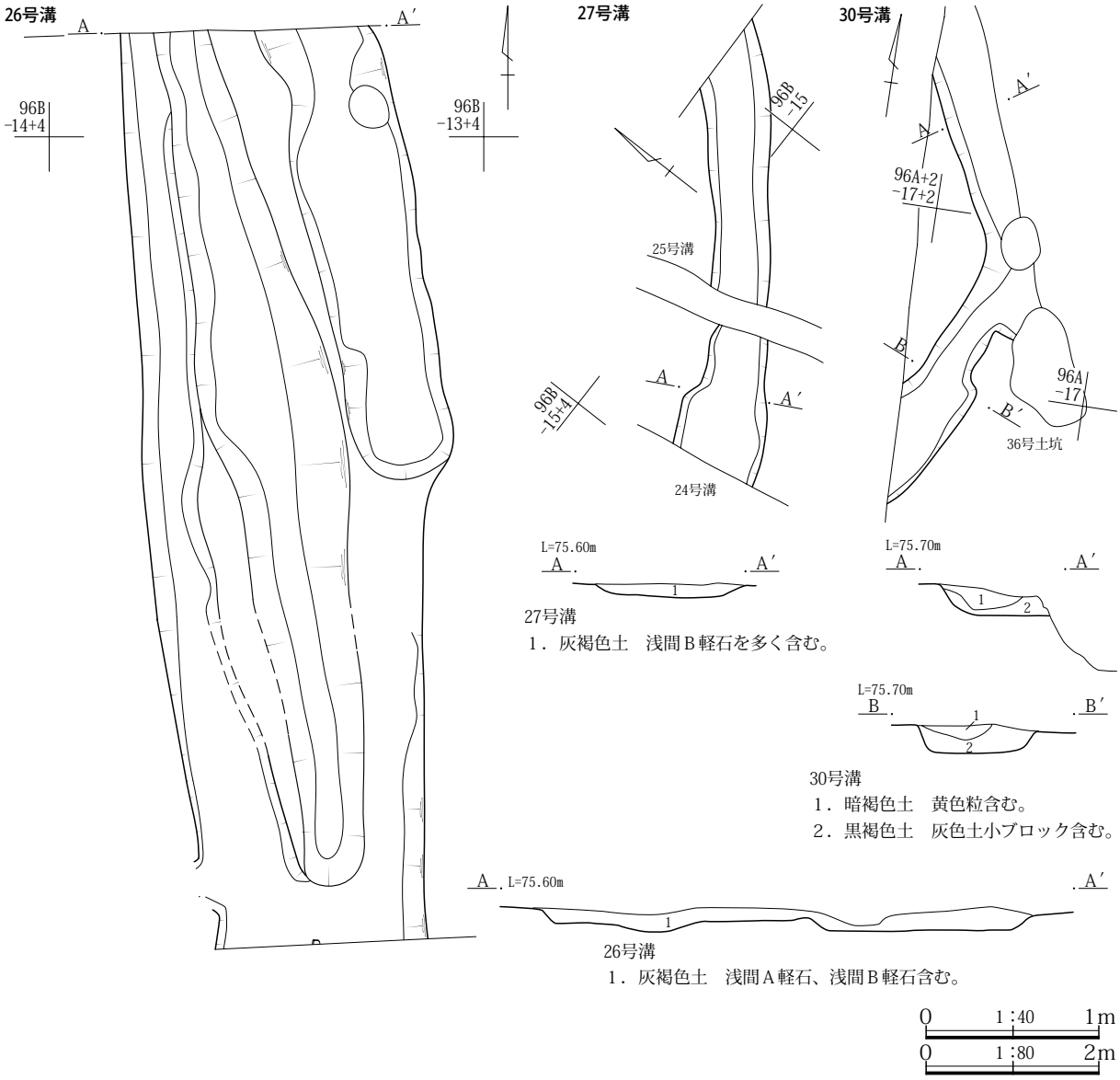
24号溝(第38図、ＰＬ16)

位置　95T~96B-15・16。29号溝より後出し、27・32・33・42号溝と重複するが新旧関係不明。平面形態は、ほぼ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－9°－Ｗ。埋没土はＢ混土。規模は長さ10.64m幅130cm深さ12cmである。遺物は古代の土師器片がやや多く出土したが混入である。

時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

25号溝(第38図、ＰＬ16)

位置　95T~96B-15。27・32・33・42号溝と重複するが新旧関係不明。平面形態は、ほぼ直線状。断面は



第39図　26・27・30号溝

Ｕ字形。走向方位はＮ－22°－Ｗ。埋没土はＡ混土。規模は長さ10.40m幅43cm深さ13cmである。遺物は土師器1点が出土したが混入である。時期は浅間Ａ軽石降下以降である。

26号溝(第39・42図、ＰＬ17・24)

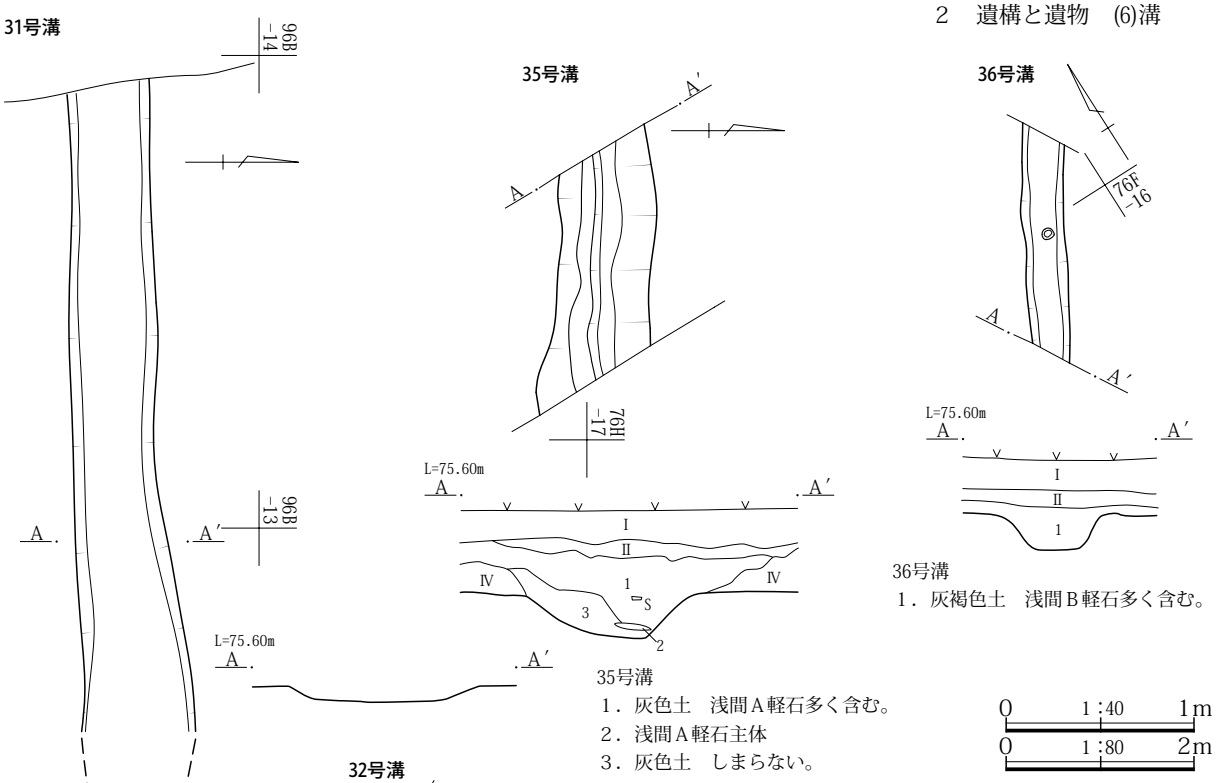
位置　95T~96B-13･14。複数の溝が混在するように見えるが、一つの溝として調査されている。断面は浅くはっきりしない。埋没土はＡ混土。走行方位はＮ－6°－Ｗ。規模は長さ10.64m幅362cm深さ13cmである。遺物は輪禿皿１点(1)のほか、古代の土師器片が混入していた。時期は出土遺物から17世紀以降に比定される。

27号溝(第39図、ＰＬ17)

位置　96A･B~14･15。24･25号溝と重複するが新旧関係不明。平面形態は、ほぼ直線状。断面は皿状。走向方位はＮ－54°－Ｅ。埋没土はＢ混土。規模は長さ5.45m幅106cm深さ8cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

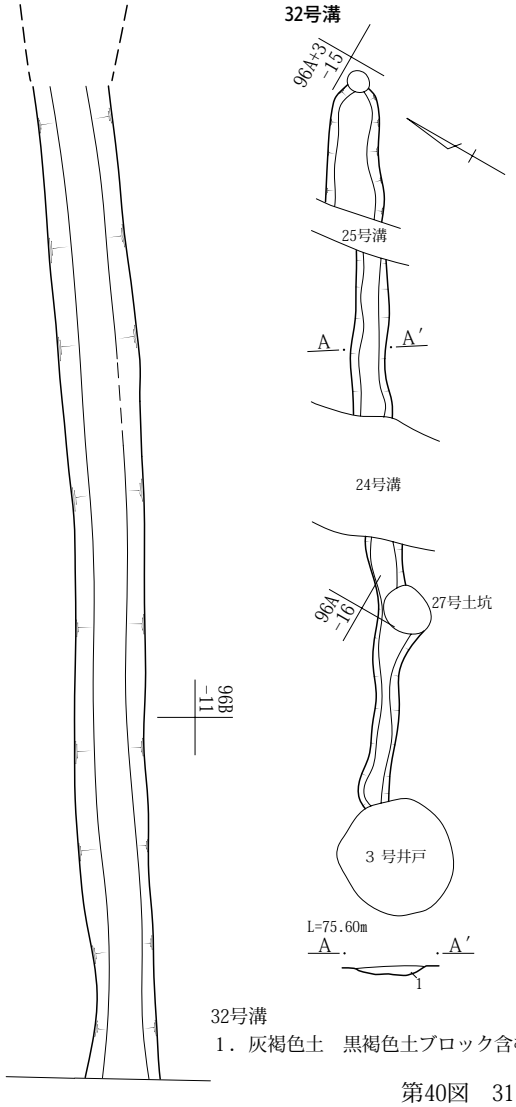
30号溝(第39図、ＰＬ18)

位置　95T~96A-17。28号溝より後出する。平面形態は、くの字状を呈する。断面は逆台形。走向方位はＮ－22°－Ｗ～Ｎ－28°－Ｅ。規模は長さ6.52m幅80cm深さ18cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。



35号溝
１．灰色土　浅間Ａ軽石多く含む。
２．浅間Ａ軽石主体
３．灰色土　しまらない。

36号溝
１．灰褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。



32号溝
１．灰褐色土　黒褐色土ブロック含む。

31号溝(第40図、ＰＬ17)

位置　96A-10~13。平面形態は、ほぼ直線状。断面は皿状。走向方位はＮ－87°－Ｅ。埋没土はＢ混土。規模は長さ18.64m幅122cm深さ9cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

32号溝(第40図、ＰＬ17)

位置　96A-15。24･25号溝、３号井戸跡と重複するが新旧関係不明。平面形態は、ほぼ直線状。断面は皿状。走向方位はＮ－59°－Ｅ。埋没土はＢ混土。規模は長さ7.72m幅63cm深さ5cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

33号溝(第41図)

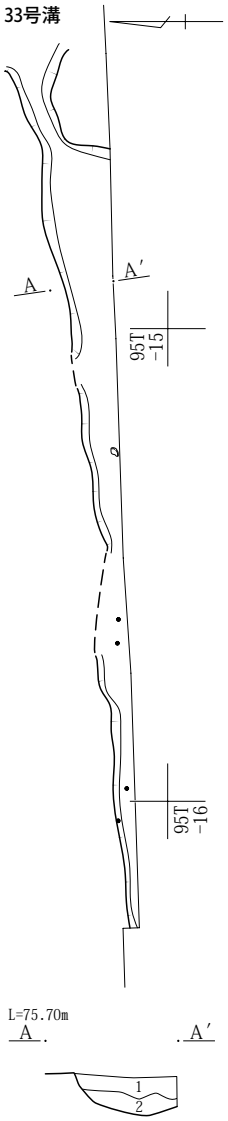
位置　95T-14~16。24･25･26･41号溝と重複するが新旧関係不明。北側上端のみ調査できたため、平･断面形、規模不明。走行方位はＮ－84°－Ｅ。遺物は古墳時代の土師器片が多く出土したが混入である。時期は埋没土から近世以降に比定される。

34号溝(第41・42図、ＰＬ18・24)

位置　95T~96B-8。平面形態は、ほぼ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－3°－Ｅ。埋没土はＡ混土。規模は長さ10.00m幅112cm深さ24cmである。

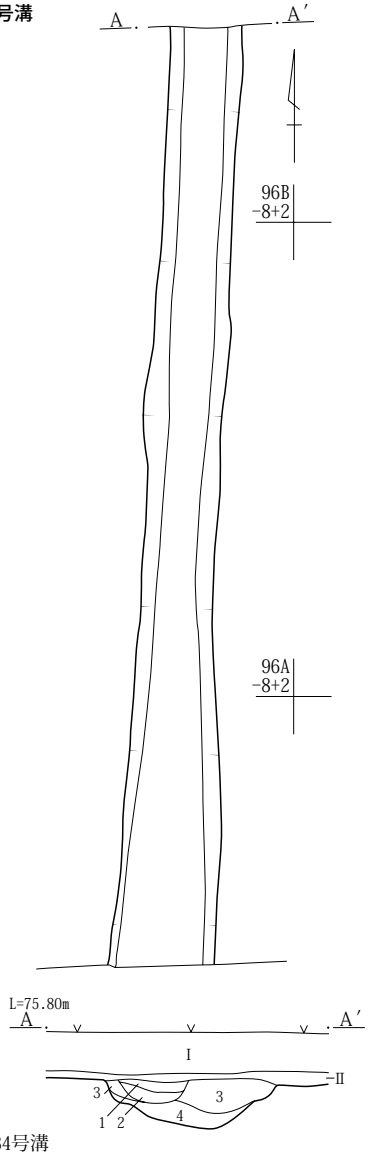
第40図　31・32・35・36号溝

33号溝



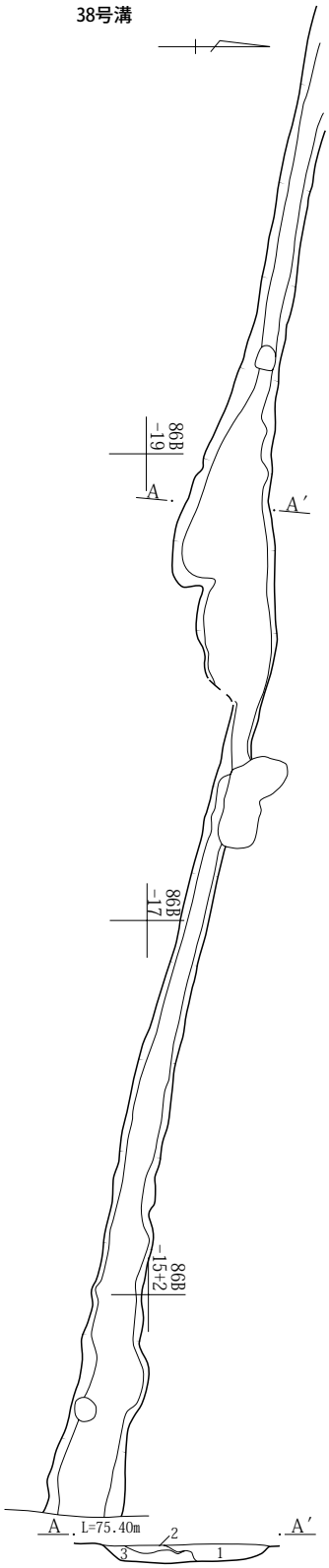
33号溝
1．灰色粘質土　鉄分凝集あり。
2．灰色粘質土＋黒灰色粘質土

34号溝



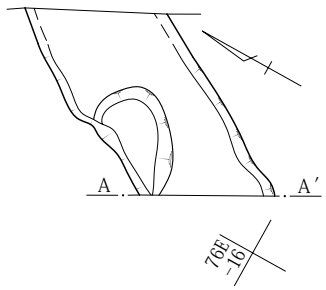
34号溝
1．灰褐色土　浅間Ａ軽石少量含む。鉄分凝集あり。
2．灰色シルト焼土　ブロック、炭化物含む。
3．灰色土　焼土ブロック、炭化物含む。
4．灰色土　浅間Ａ軽石、浅間Ｂ軽石含む。

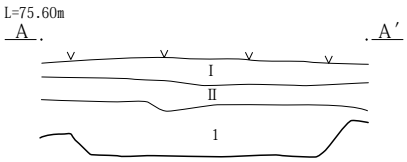
38号溝



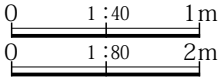
38号溝
1．灰色土　浅間Ａ軽石多く含む。
2．浅間Ａ軽石主体
3．灰色土　しまらない。

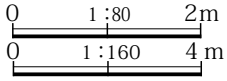
37号溝



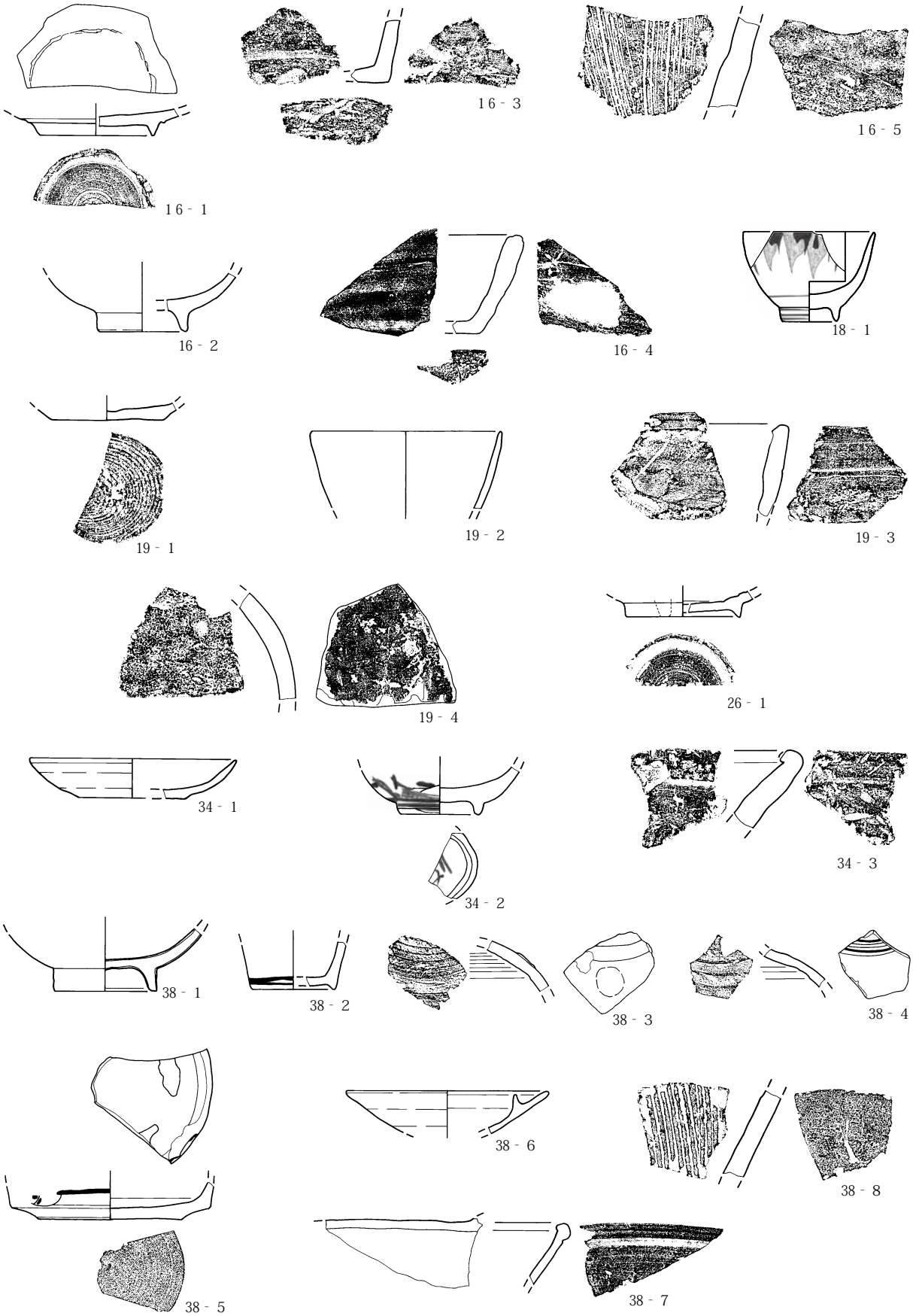


37号溝
1．灰褐色土　浅間Ｂ軽石多く含む。

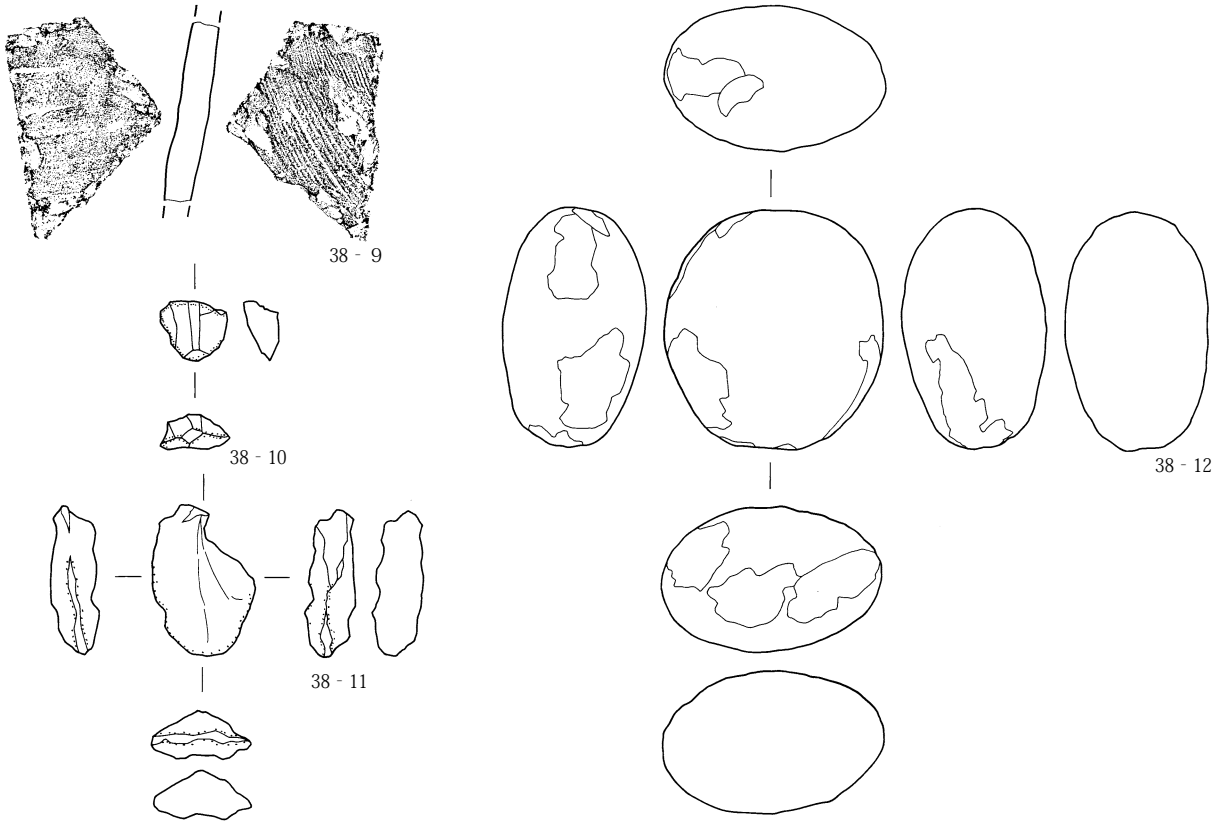




第41図　33・34・37・38号溝



第42図　16・18・19・26・34・38号溝出土遺物



第43図　38号溝出土遺物(２)

遺物は江戸時代の磁器碗片２点、施釉陶器鉢類片１点などのほか、近代磁器も出土した。時期は出土遺物から近現代に比定される。

35号溝(第40図、ＰＬ18)

位置　76G･H-17。平面形態は、ほぼ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－90°。埋没土はＡ混土。規模は長さ2.60m幅106cm深さ30cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ａ軽石降下以降である。

36号溝(第40図、ＰＬ18)

位置　76E･F-16。平面形態は、ほぼ直線状。断面は逆台形。走向方位はＮ－31°－Ｅ。埋没土はＢ混土。規模は長さ2.35m幅47cm深さ18cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

37号溝(第41図、ＰＬ18)

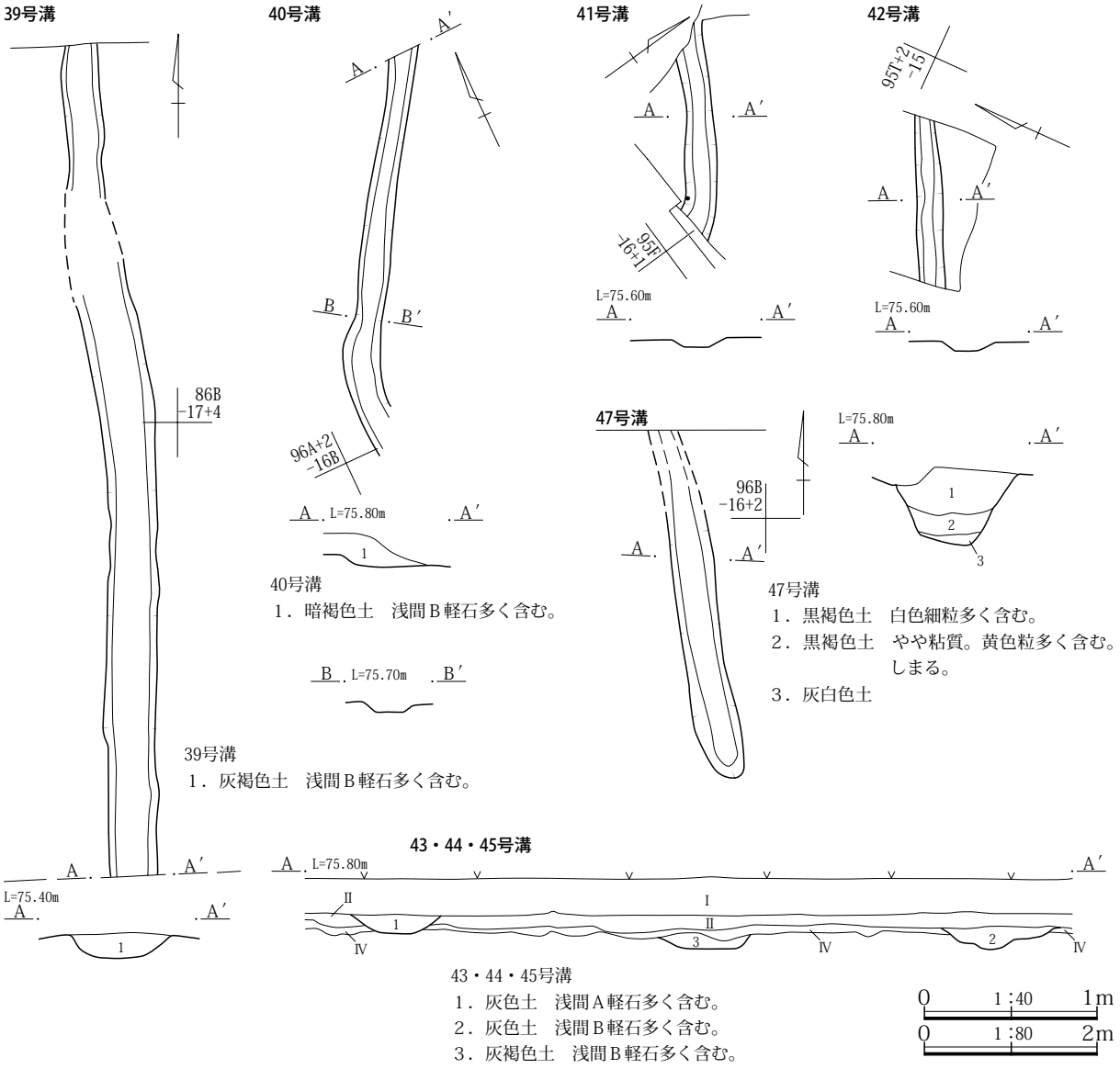
位置　76E-15。平面形態は、ほぼ直線状だが、輪郭は乱れる。北壁寄りは更に浅く円形に凹む。断面は皿状。走向方位はＮ－29°－Ｅ。埋没土はＢ混土。規模は長さ2.4m幅140cm深さ15cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

38号溝(第41～43図、ＰＬ18・19・24)

位置　86A･B-14~20。39号溝、44号土坑より後出。平面形態は、への字状で、中央部が不整形に広がる。断面は皿状。走向方位はＮ－81°－Ｗ。底面に木杭が残る部分が認められた。埋没土はＡ混土。規模は長さ33.00m幅221cm深さ20cmである。出土遺物は近世の生活遺物が多く、掲載遺物のほか、磁器碗片５点、施釉陶器：碗片５点、鉢類片１点、香炉片1点、急須･徳利など３点、在地土器：焙烙片１点、鉢類片２点が出土した。東方延長線上に19号溝があり同一の溝と思われる。時期は出土遺物から江戸時代中期頃に比定される。

39号溝(第44図、ＰＬ19)

位置　85T~86B-17･18。38号溝より前出。平面形態は、ほぼ直線状。断面は逆台形。走向方位はＮ－4°－Ｗ。埋没土はＢ混土。規模は長さ9.64m幅67cm深さ13cmである。遺物は古代の土師器片が出土



第44図　39～45・47号溝

したが混入である。南方延長線上に１・２号溝があり同一の溝と思われる。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

40号溝(第44図)

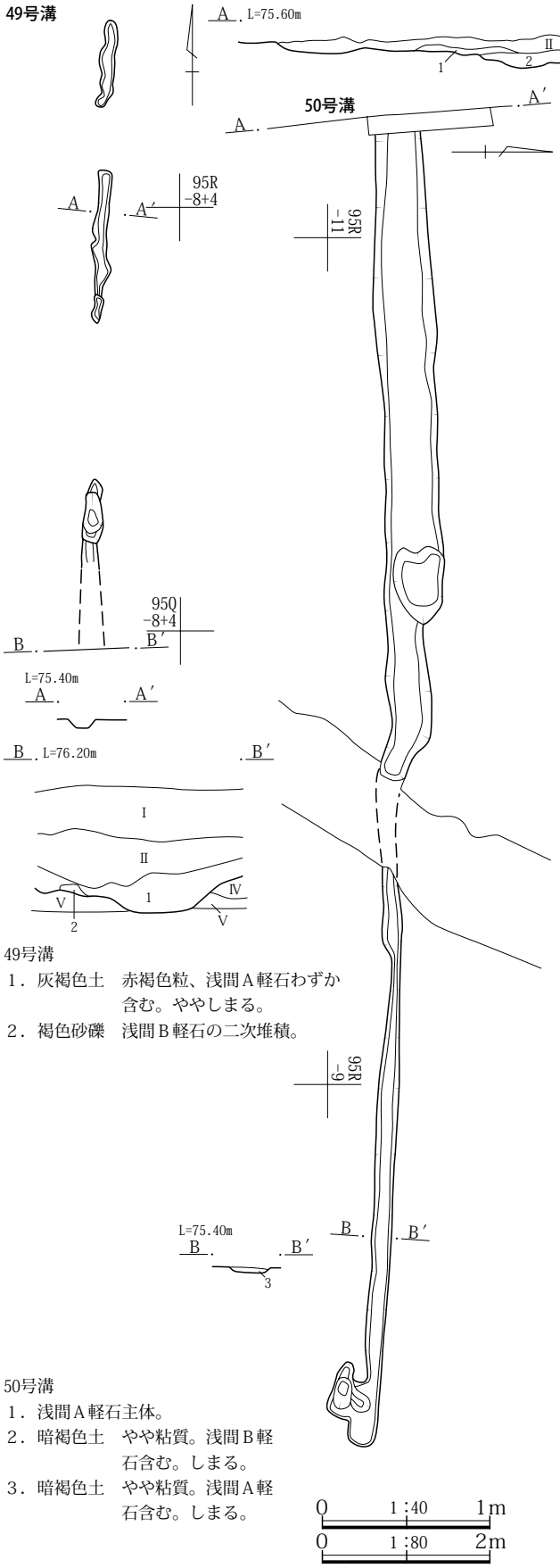
位置　96A･B-16。29号溝より後出であるが、合流して消滅するため、矛盾を生じている。平面形態は、しの字状。断面は皿状。走向方位はＮ－34°－Ｅ～Ｎ－0°。埋没土はＡ混土。規模は長さ4.56m幅45cm深さ6cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ａ軽石降下以降である。

41号溝(第44図)

位置　95T-16。28･29号溝より後出であるが、西側部分は確認できていない。平面形態は、ほぼ直線状。断面は皿状。走向方位はＮ－56°－Ｗ。埋没土はＢ混土。規模は長さ2.56m幅40cm深さ5cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

42号溝(第44図)

位置　95T-15。24･25号溝と重複するが新旧関係不明。平面形態は、ほぼ直線状。断面は皿状。走向方位はＮ－62°－Ｅ。埋没土はＢ混土。規模は長さ1.88m幅32cm深さ5cmである。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。



49号溝
1．灰褐色土　赤褐色粒、浅間Ａ軽石わずか含む。ややしまる。
2．褐色砂礫　浅間Ｂ軽石の二次堆積。

50号溝
1．浅間Ａ軽石主体。
2．暗褐色土　やや粘質。浅間Ｂ軽石含む。しまる。
3．暗褐色土　やや粘質。浅間Ａ軽石含む。しまる。

第45図　49・50号溝

43・44・45号溝(第８・44図、ＰＬ19)

位置　96B-2。遺構確認面よりも上層の遺構であり、調査区北壁で断面のみ確認された。平面形、平面規模、走向方位不明。断面はすべてＵ字形。埋没土は43号溝がＡ混土で、44･45号溝はＢ混土。深さは43号溝が10㎝、44号溝が９㎝、45号溝が12㎝である。遺物は出土しなかった。時期は43号溝が浅間Ａ軽石降下以降、44･45号溝が浅間Ｂ軽石降下以降である。

47号溝(第44図、ＰＬ19)

位置　96A･B-16。40号溝と重複するが新旧関係不明。平面形態は、ほぼ直線状。断面はＵ字形。走向方位はＮ－22°－Ｗ。規模は長さ4.1ｍ幅53㎝深さ38㎝である。遺物は出土しなかった。時期は埋没土から近世以降に比定される。

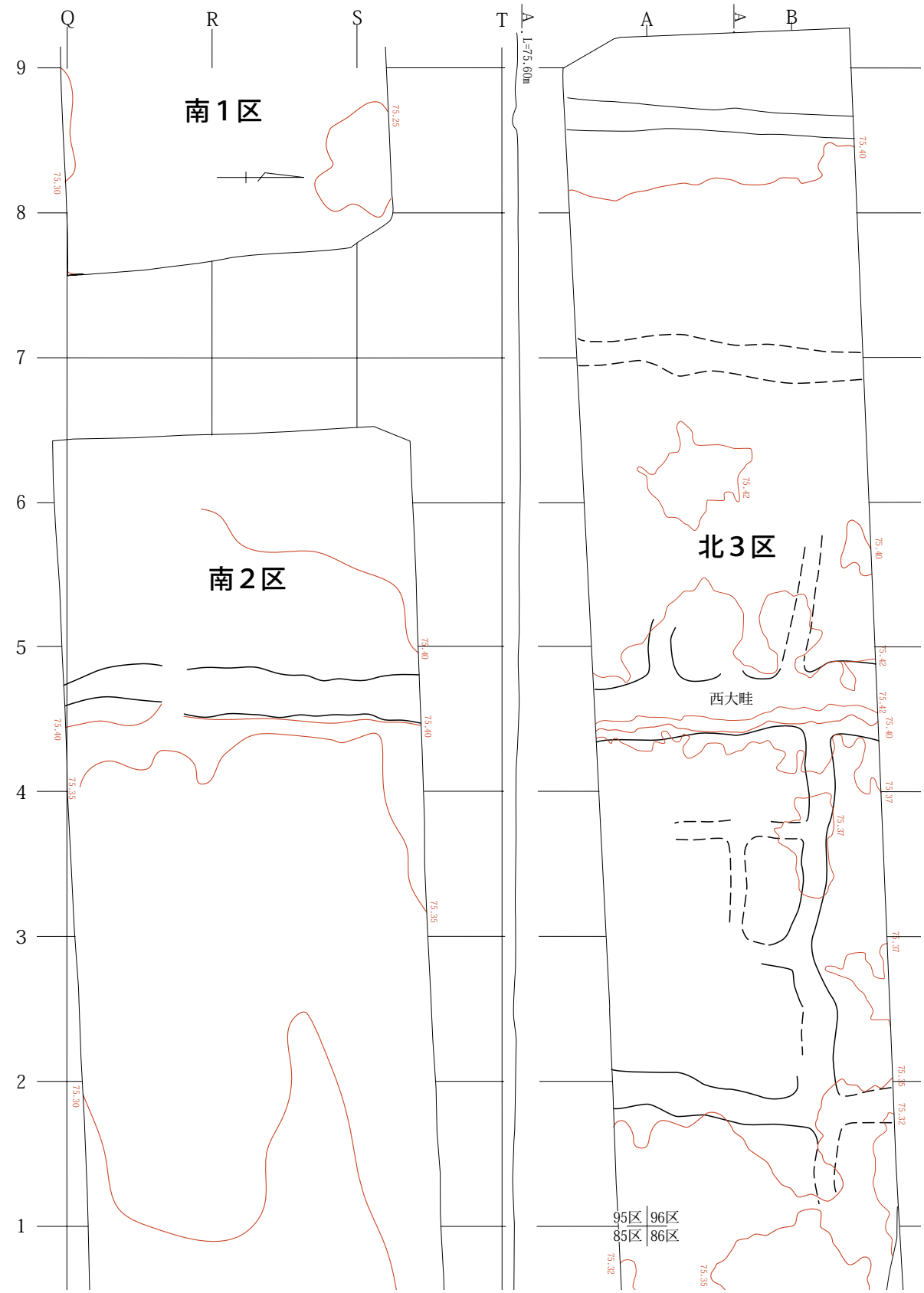
49号溝(第45図、ＰＬ19)

位置　95P~R-8･9。確認面が下がっており、断続的に確認された。平面形態は、ほぼ直線状。断面は北壁で逆台形が確認できる。走向方位はＮ－2°－Ｅ。埋没土はＡ混土。規模は長さ7.48ｍ幅24㎝深さ5㎝である。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ａ軽石降下以降である。

50号溝(第45図、ＰＬ19)

位置　95R-9~12。サク状遺構より前出。平面形態は、ほぼ直線状で、西半分の輪郭はやや乱れる。断面は皿状。走向方位はＮ－85°－Ｗ。埋没土はＢ混土。規模は長さ15.6ｍ幅75㎝深さ3㎝である。遺物は出土しなかった。時期は浅間Ｂ軽石降下以降である。

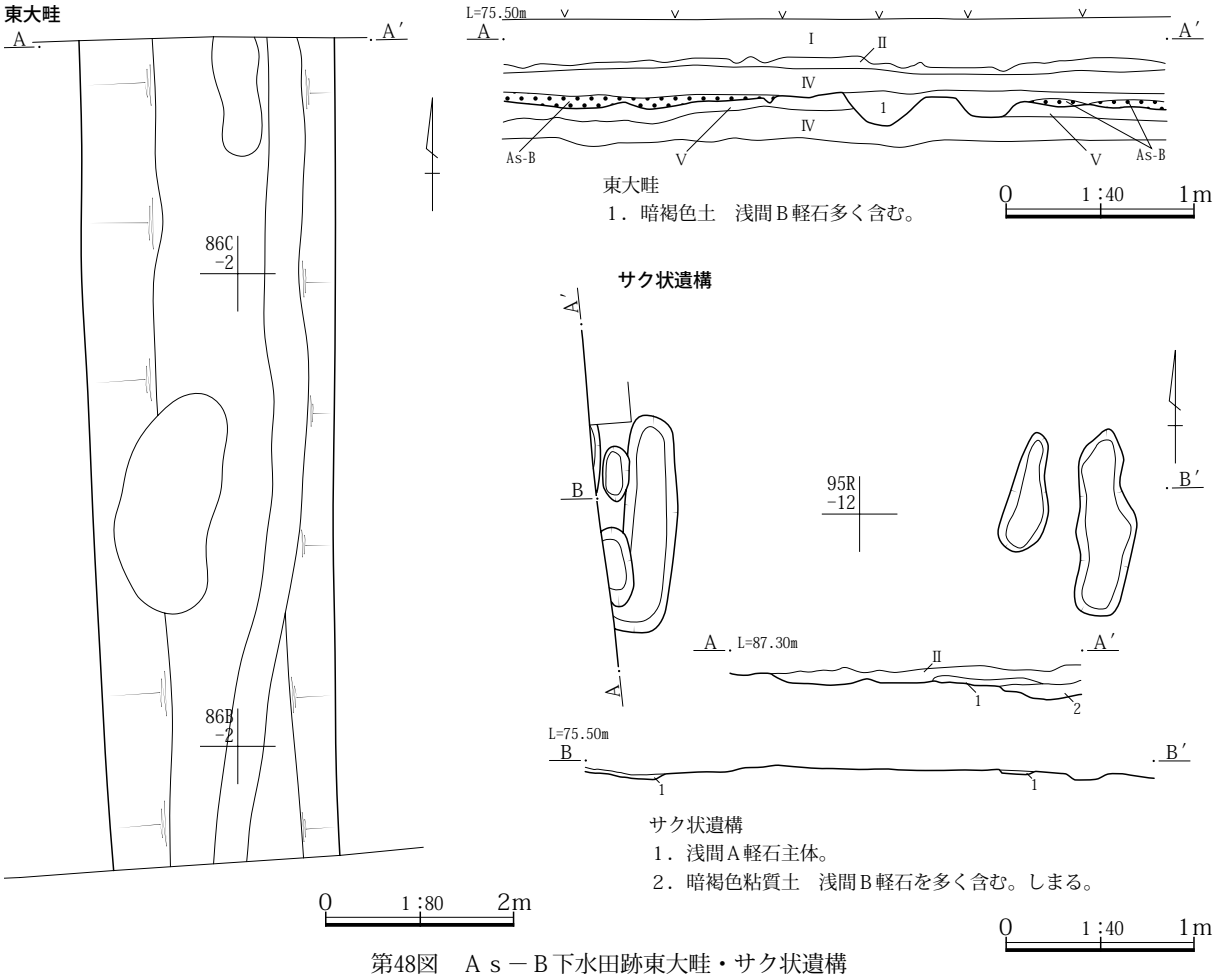
(7)Ａｓ－Ｂ下水田跡(第46～48図、ＰＬ20・21)



第46図　Ａｓ－Ｂ下水田跡(１)

第47図　Ａｓ－Ｂ下水田跡(２)

75・76区と85・86区が接する南北軸を境として西方へ、95・96区10ラインくらいまでを遺構範囲とする。水田面は降下したＡｓ－Ｂに被災し放棄された状態を基本とするが、Ａｓ－Ｂの純堆積層は少なく、流水などによる二次堆積層や後事の土壌攪乱によって生じたＢ混土層の下面であることが多い。したがって、遺構面の遺存状態も悪く、明確な畦は検出できていない。そうした中、上面の削平が著しいが、東限近くで東大畦が確認された。また、西側でもわずかな痕跡を手がかりに畦を想定し、95・96区４～５ラインの中間で南北軸の大畦を想定し西大畦とした（詳細図省略)。東大畦の規模は、長さ8.84m、上幅2.7m、下幅1.4mで、高さ４㎝である。走向方位はＮ－３°－Ｗ。東大畦と西大畦の間隔は芯々距



第48図　Ａｓ－Ｂ下水田跡東大畦・サク状遺構

離で約113m、下端間で約110mを測る。およそ１町：約109mに該当することから、条理水田に基づくことも想定される。

なお、北4区で行った植物珪酸体分析の結果、イネの植物珪酸体(起動細胞由来)が稲作の判断基準となる試料１ｇ当たり5,000個以上の密度を超えて、Ｖ層から約6,700～5,000個/ｇ検出された。このため、稲作が自然科学的にも裏付けられたこことなる。また、16号溝付近(分析試料1地点)で採取された試料のＶ層では、イネの植物珪酸体が約2,100個/ｇと少なかった。これは東大畦以東が微高化し、古代の集落域となる点と一致している。

また、同一面で半月形を呈する農具痕が検出され、中世段階という調査段階の所見があるが、特徴を示す詳細な平面図や写真記録がないため、紹介に止める。

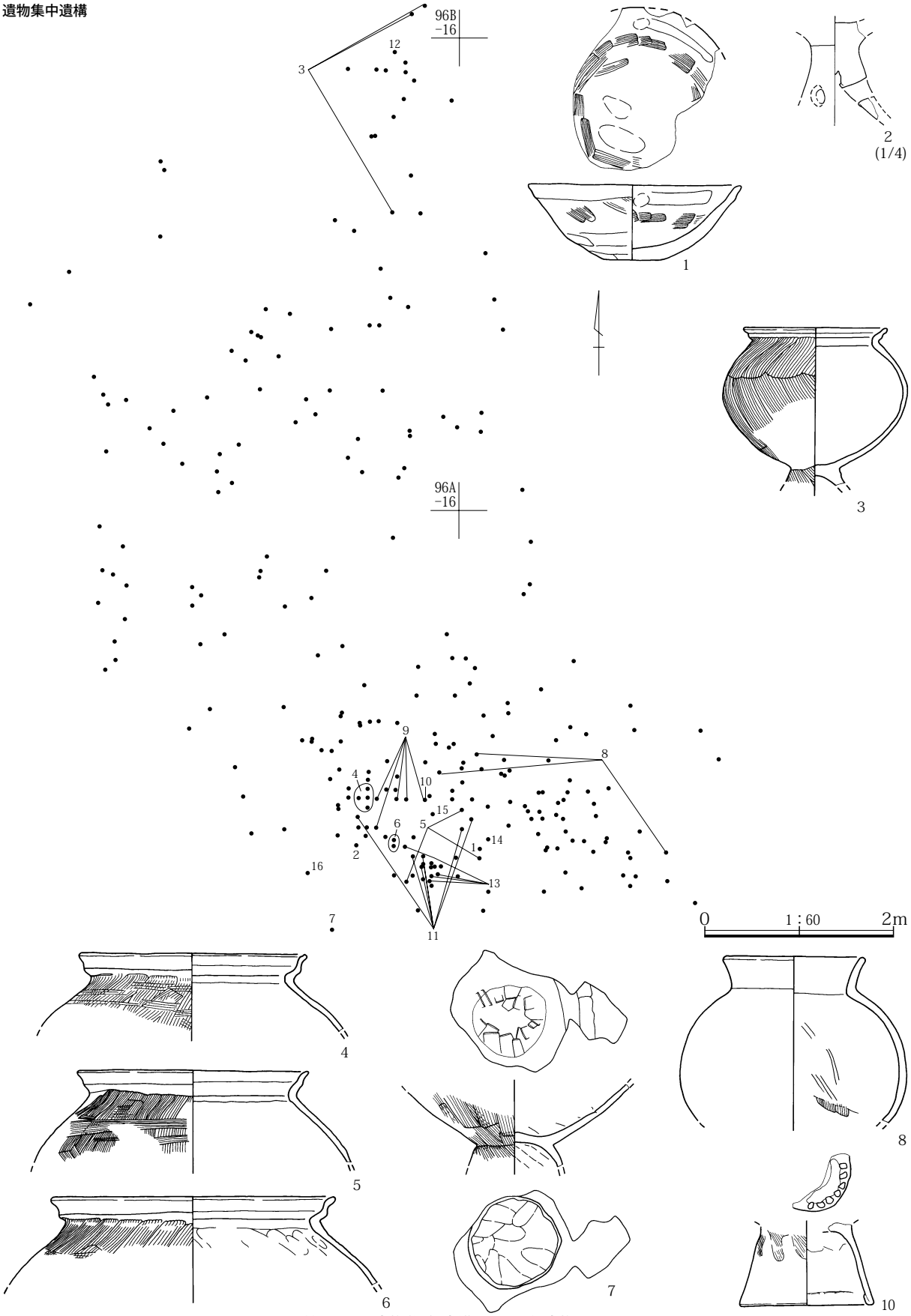
(8)サク状遺構(第48図、ＰＬ21)

位置95Q･R－11･12。溝状に４条確認。走向方向は、真北に対して東に振れるが一定でない。規模は長さ65～115cm幅24～32cm深さ２～４cmである。断面は皿状。埋没土は浅間Ａ軽石の純層に近い。天地返しなどを行った痕跡か、灰掻き溝と推測される。

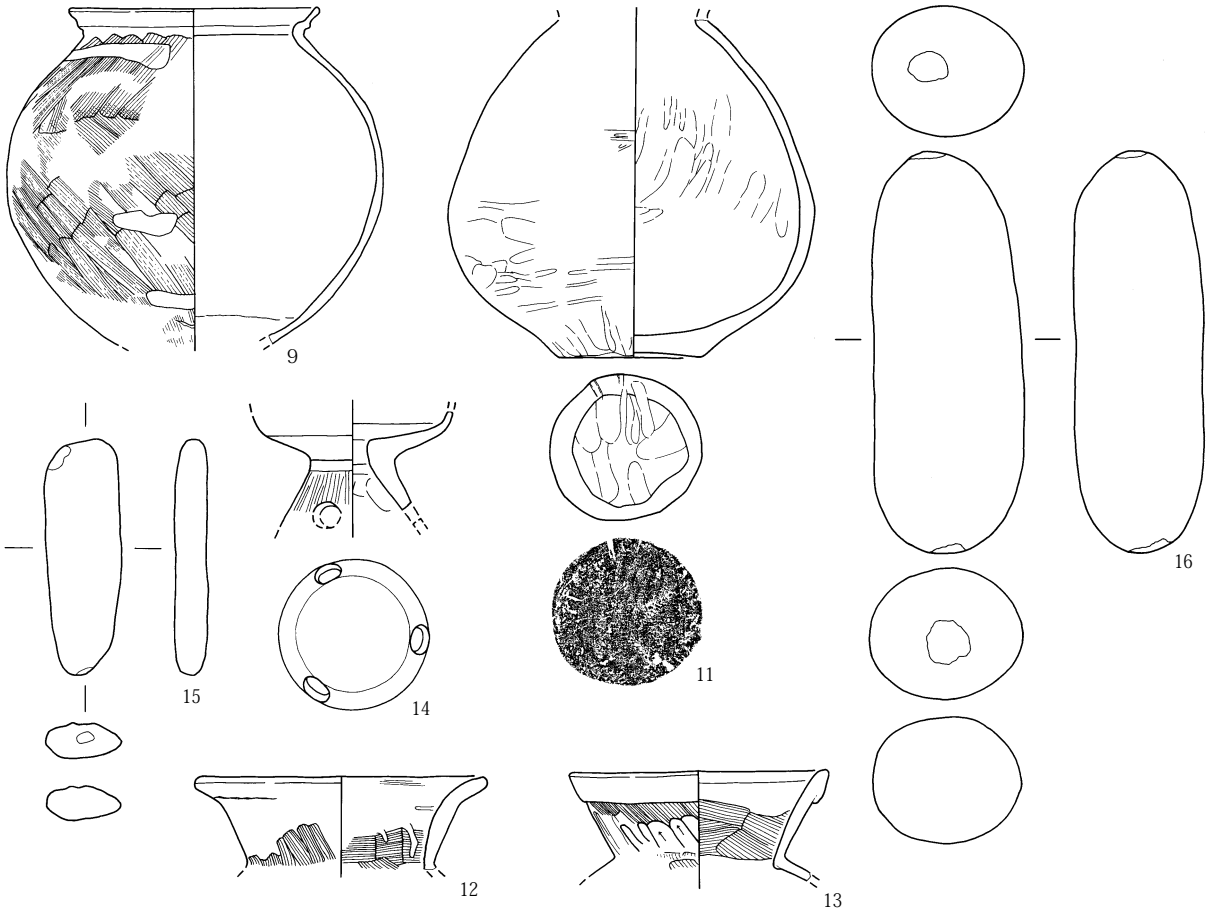
(9)遺物集中遺構(第49・50図、ＰＬ21・25)

位置95T～96B－15･16。北２区西端部分にあたる。Ｖ層以下を平面的に掘削した結果、遺物の集中を確認したものである。出土遺物は古墳時代でまとまっており、調査当初は住居跡の可能性も模索されたが、確証はえられなかった。ただし、状況から見て、何らかの遺構であると思われ、ここでは遺物集中遺構として扱う。なお、掘り込みなどの遺構は見つかっておらず、遺物の分布だけを図示した。時期は出土遺物から４世紀前半に比定される。

遺物集中遺構



第49図　遺物集中遺構、同出土遺物(1)



第50図　遺物集中遺構出土遺物(２)

(10)遺構外遺物(第51～53図、ＰＬ25・26)

縄文時代の遺物は、微高地に当たる北2区西端で特に集中して出土している。土器は、縄文時代前期後半の諸磯ｂ式、諸磯ｃ式期のまとまりである。

石器は、打製石斧５・石鏃１・加工痕ある剥片１・凹石２・剥片14点が出土した。区ごとの出土量は、南３区６・北２区11・北３区３・北４区３点で、北２区の出土が多い。

古墳時代遺物も比較的大きな破片が遺構外から出土している。別項の遺物集中遺構からも、周辺に当該期の集落が広がることを示唆している。

平安時代遺物は、１～３号住居跡の時期に一致するものであり、こうした遺構からの供給遺物が多いと思われる。また、特に古代瓦(遺構外43)は注目される遺物である。

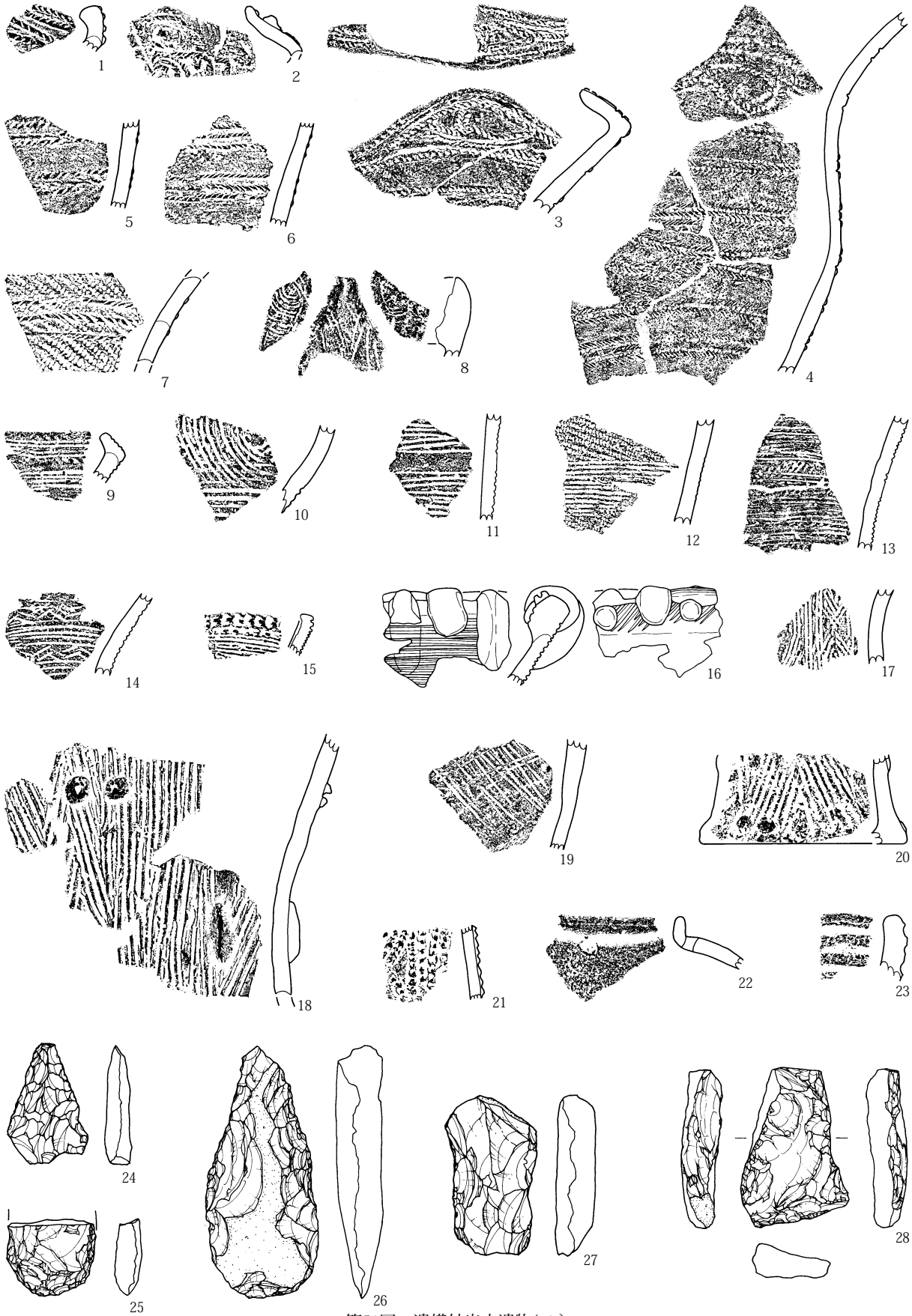
中世遺物では中国産の青磁碗が注目される。

(11)まとめ

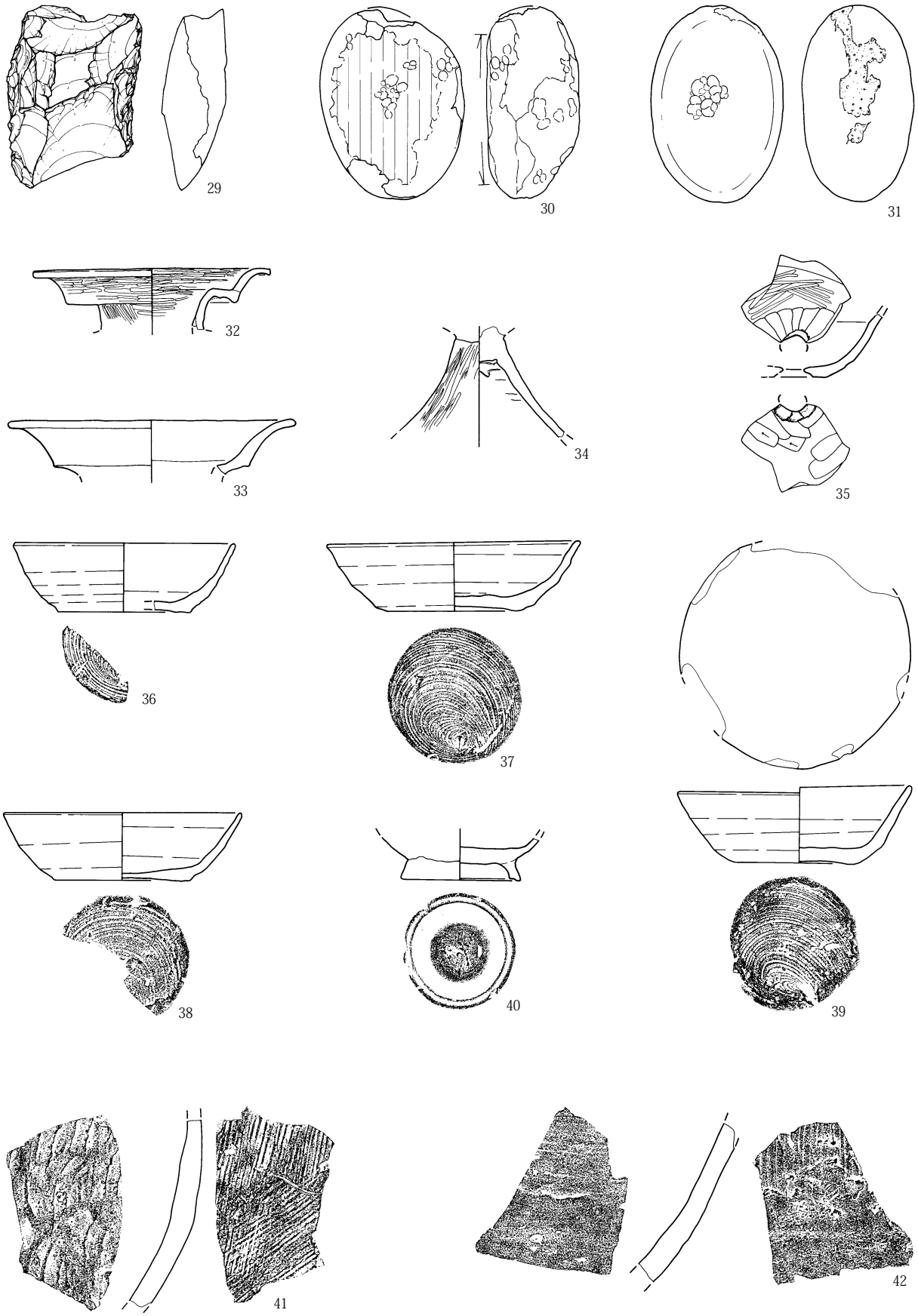
縄文時代では、前期後半の土器群が北２区西端に集中して出土したが、散漫な状態であり遺構は見つかっていない。

石器石材は、剥片系石器に黒色頁岩を多用し、礫石器類には粗粒輝石安山岩を用いており、利根川中流域に所在する縄文期遺跡の石材構成と同様である。器種レベルで石器製作を見ると、遺跡内で製作したと見られる打製石斧がある一方、これに伴う不要剥片類は出土資料の中には見当らず、複数の母岩から得られた比較的形状の整う大形剥片類が主体を占めている。出土資料の単位的把握が困難であり、詳細については不明とせざるを得ない。

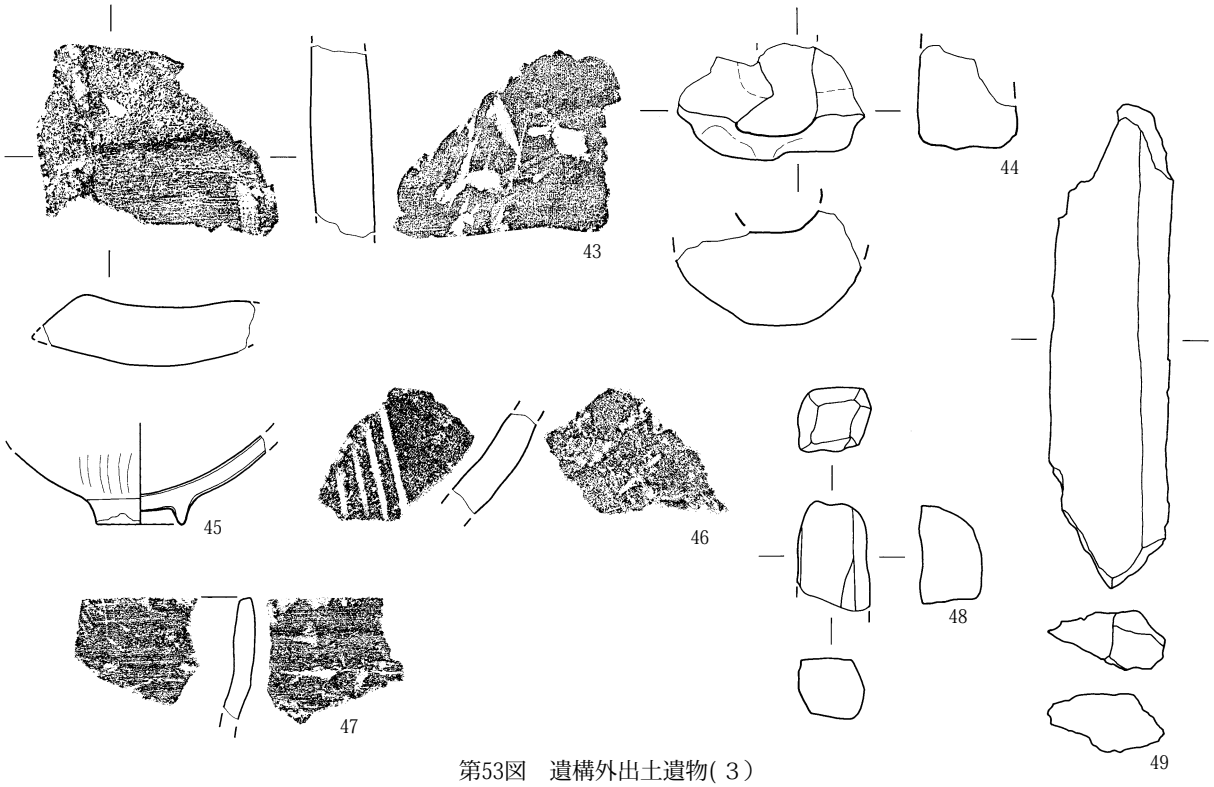
古墳時代住居としては、北4区に下斉田遺跡1号住居跡があり、古墳時代初頭と報告されている(註1)。この住居跡の西に隣接して９・15号溝があり、同時期の遺物を伴っている。なお、南４区の1号井戸跡は、



第51図　遺構外出土遺物(１)



第52図　遺構外出土遺物(２)



第53図　遺構外出土遺物(３)

4世紀後半であり、周辺に同時期の集落を推測させる。

奈良・平安時代の住居跡は北4区のみで発見され、３号住居跡(８世紀半ば)→１号住居跡(８世紀後半)→２号住居跡(９世紀前半)の年代順で推移している。また、２号井戸跡は10世紀後半と見られ、住居跡に続いている。集落域西限となる75・76区と85・86区が接する南北軸を境として、西方へ95・96区10ラインくらいまで、Ａｓ－Ｂ下水田跡が検出され、下層の堆積状況や植物珪酸体分析成果などから、集落に対応する水田耕作域であったと考えられる。北２区の西端では、９世紀前半の遺物を伴う28号溝があり、西側の微高地に広がる古代集落の存在を反映したものと言える。なお、西側延長に位置する下滝高井前遺跡では、古代の集落が見つかっている(註2)。

井野川を挟んだ対岸に所在する綿貫廃寺(第４図22：綿貫遺跡)では９世紀頃の瓦葺建物の基壇が確認されており、本遺跡出土の瓦片も同時期であり関連が想起される。

中世では、遺物を伴う遺構は見つかっていないが、Ｂ混土を埋没土に持つ１・２号掘立柱建物跡をはじめ、３号井戸跡、27・29・34号土坑、24・31・32・41・42号溝などが、北２区西半に集中している。西側延長に位置する下滝高井前遺跡では、中世の屋敷遺構も見つかっていることから、関連がうかがえる。中世遺物では中国産の青磁碗(遺構外45)をはじめ、在地土器では34号溝の片口鉢(15世紀)やスリ鉢(遺構外46)などが確認された。

近世ではＡ混土を埋没土とする溝が、12条見つかった。なかでも、16・19・34・38号溝では、生活遺物がややまとまって出土している。調査前は水田が周辺に広がっていたが、江戸時代には屋敷地も存在していたことを想像させる成果である。また、南１区ではわずかながら、浅間Ａ軽石を除去した可能性を持つサク状遺構も見つかった。

註１『下斉田・滝川Ａ遺跡滝川Ｂ・Ｃ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1987

註２『年報28』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009

3　自然科学分析

(1)　はじめに

本遺跡では、検出水田跡の理解のため、植物珪酸体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

(2)　分析の目的

本遺跡北４区の75・76区と85・86区が接する南北軸を境として西方へ、95・96区10ラインくらいまででは、降下テフラであるAs-B直下から水田跡が検出された。そこで、どのような状況で生産されていたかを知るため、植物珪酸体分析を実施した。

この分析では、対象がイネ科植物栽培に限られるが､最重要作物であるイネの動向を探ることができ、水田跡を検出できた遺構面以外においても、イネ栽培の可能性や、栽培状況などを考える指標とすることができる。また、ススキやネザサの分析値から、古植生・古環境の推定も応用でき、調査結果を加えた総合判断が可能となる。

(3)　植物珪酸体分析

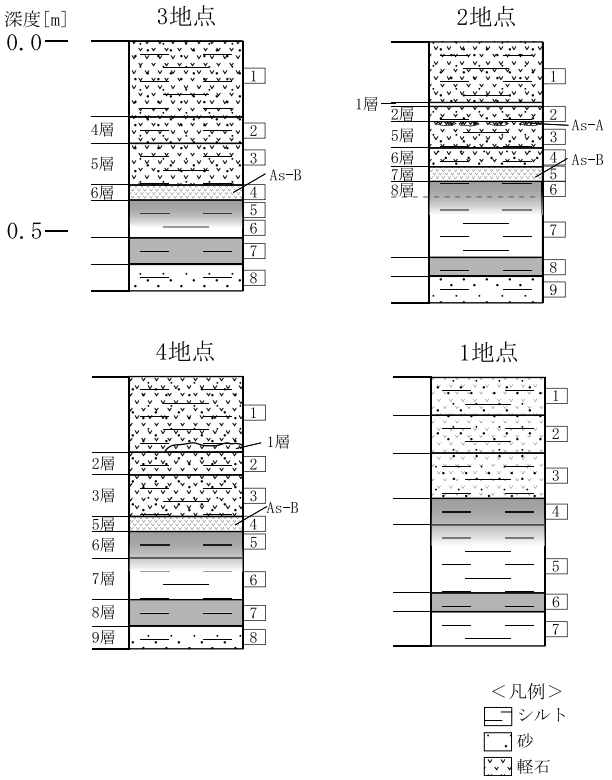
ア　試料

試料は、As-B下水田が検出された北４区北壁の任意の地点(１～４地点：第９図)より採取された土壌32点(1地点;試料番号1 ～ 7、2地点;試料番号1 ～ 9、3地点;試料番号1 ～ 8､4地点;試料番号1 ～ 8)である。

試料採取地点は、東より1、4、2、3地点と設定されている。また、各地点の試料採取位置は、表土(水田耕作土)からAs-Cとみられる軽石が混じる黒灰色泥質土下位の灰色を呈する泥質土までの任意の基本土層が対象とされている。各地点で認められた堆積物は概ね類似しており、このうち、2地点で観察された堆積物は、最下位は褐灰～灰色を呈する砂混じりシルトであり、上部には灰色砂混じりシルトの偽礫が混じる黒色シルトが認められる。黒色シルト上位には淡暗灰～灰色シルトが不整合で堆積し、上方に向かって漸移的に暗色化し、最上部は黒灰～暗灰色を呈する。なお、これらの堆積物中には径約1～3mmの軽石が混じる状況も観察される。黒灰～暗灰色シルト上位には、As-Bが堆積する。As-B上位は、褐灰色を呈する泥混じりの砂質土(以下、As-B混土)からなり、As-Bの混入および糸根状～管状酸化鉄の発達の程度に違いが観察される。褐灰色を呈する泥混じりの砂質土上位には、レンズ状に堆積するAs-Aが観察され、その上位にはAs-A混じり灰色泥混じり砂質土(以下、As-A混土)、および表土が堆積する。各地点の模式柱状図を第54図に示す。

イ　分析方法

各試料について過酸化水素水･塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。



第54図　各地点の模式柱状図

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表を示す。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化を図示する。各分類群の含量は100単位として表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に100単位として表示する。

ウ　結果

結果を表、図２に示す。各試料からはイネ科起源の植物珪酸体が検出されるが、いずれも保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

(ア)　１地点

植物珪酸体含量は、約13万～3.1万個/gの間で推移する。本地点では、As-B下位の堆積物に相当する黒灰～暗灰色シルト(試料番号4)および下位の堆積物とAs-B混土から表土試料で差異が認められる。試料番号4は約13万個/gであり、試料番号4より下位試料では、試料番号5が約3.1万個/g、試料番号6,7が約13.1万～11.1万個/g、試料番号4より上位試料(試料番号3～1)は約9.8～7.5万個/gである。

本地点では、チゴザサ属、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属およびススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属等のほか、栽培植物のイネ属および栽培種を含むヒエ属､キビ属、オオムギ族等が検出される。各分類群の層位的変化は、ネザサ節を含むタケ亜科は、試料番号4で含量が高い。ヨシ属は、上記した下位試料(試料番号7,6)で高く、試料番号5および上位試料では下位試料に対して低い値を示す。ススキ属などを含むウシクサ族も、ヨシ属と同様の層位的変化が認められ、下位試料で高い値を示す傾向にある。

栽培植物および栽培種を含む分類群では、イネ属は葉部に形成される短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体、籾殻に形成される珪酸体が検出され、上位試料(試料番号1～3)で高い値を示す。その含量は、短細胞珪酸体が約5,000～2,000個/g、機動細胞珪酸体が約14,400～8,900個/g、穎珪酸体は試料番号2,3からのみ検出され約500～300個/gである。また、試料番号1,3からヒエ属、試料番号1,2からキビ属およびオオムギ族が検出される。

(イ)　２地点

植物珪酸体含量は、As-B(試料番号5)を境として層位的な変化が認められる。試料番号5は約2,100個/gであり、これより下位試料(試料番号6～9)では約35,1～10,2万個/g、上位試料(試料番号1～4)は約5.3万～2,4万個/gである。

本地点で検出された分類群は1地点と同様であり、チゴザサ属、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属およびススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属などのほか、栽培植物のイネ属、栽培種を含むヒエ属、キビ属、オオムギ族等が検出される。各分類群の層位的な変化は、1地点と比較して明瞭である。ネザサ節を含むタケ亜科は、As-B(試料番号5)より下位試料(試料番号6～9)で含量がやや高い。ヨシ属およびススキ属を含むウシクサ族も同様に下位試料で高い値を示す傾向にあり、とくに、試料番号8,9は極めて高く、上方に向かって漸減するという特徴も看取される。

栽培植物のイネ属は、試料番号8および上位の各試料で連続的に検出される。下位試料(試料番号8～6)からは短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約4,000～1,100個/gであり、試料番号6で最も高い。機動細胞珪酸体は約7,600～2,200個/gであり、試料番号6,7で高い値を示す。上位試料(試料番号1～4)では、短細胞珪酸体は約7,700～1,600個/g、機動細胞珪酸体は約9,100～900個/gであり、ともに試料番号1,2で高い値を示す。その他に、試料番号6からヒエ属、試料番号6,3からキビ属、試料番号2,1からオオムギ族が検出される。

(ウ)　３地点

植物珪酸体含量は、2地点と同様にAs-B(試料番号

植物珪酸体含量(1)

分類群		1地点 1	2	3	4	5	6	7
イネ科葉部短細胞珪酸体								
	イネ族イネ属	4,100	5,000	2,000	−	−	−	−
	キビ族ヒエ属	1,000	−	300	−	−	−	−
	キビ族キビ属	600	500	−	−	−	−	−
	キビ族チゴザサ属	300	0	700	−	300	−	−
	タケ亜科ネザサ節	2,600	1,700	1,300	10,800	1,400	1,800	−
	タケ亜科	4,500	3,600	3,300	8,000	3,300	2,600	1,100
	ヨシ属	2,900	1,000	2,700	7,200	3,900	20,200	21,100
	ウシクサ族コブナグサ属	−	−	300	−	−	−	−
	ウシクサ族ススキ属	8,000	4,600	5,000	8,800	4,900	15,400	10,600
	イチゴツナギ亜科オオムギ族	1,900	200	−	−	−	−	−
	イチゴツナギ亜科	8,000	1,900	1,300	2,000	1,400	2,600	3,500
	不明キビ型	12,400	7,400	14,600	12,700	8,200	18,000	19,400
	不明ヒゲシバ型	4,100	2,900	3,300	4,800	2,000	3,500	2,800
	不明ダンチク型	6,400	4,600	7,300	8,400	1,900	5,300	6,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
	イネ族イネ属	14,400	12,000	8,900	400	−	400	−
	キビ族	1,000	500	300	800	−	−	−
	タケ亜科ネザサ節	2,200	2,200	2,000	12,700	800	1,300	400
	タケ亜科	3,800	3,100	5,000	8,800	300	2,600	1,400
	ヨシ属	2,900	2,400	1,300	6,800	400	15,400	20,800
	ウシクサ族	10,500	8,600	11,300	23,100	600	25,500	9,200
	シバ属	600	3,600	700	−	−	−	−
	不明	5,400	8,900	14,200	15,100	1,600	15,800	13,700
珪化組織片								
	イネ属穎珪酸体	−	500	300	−	−	−	−
合計								
	イネ科葉部短細胞珪酸体	56,800	33,300	42,100	62,600	27,400	69,500	65,100
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	40,800	41,200	43,700	67,700	3,700	61,200	45,400
	珪化組織片	0	500	300	0	0	0	0
	総計	97,600	75,000	86,100	130,300	31,100	130,700	110,600

植物珪酸体含量(2)

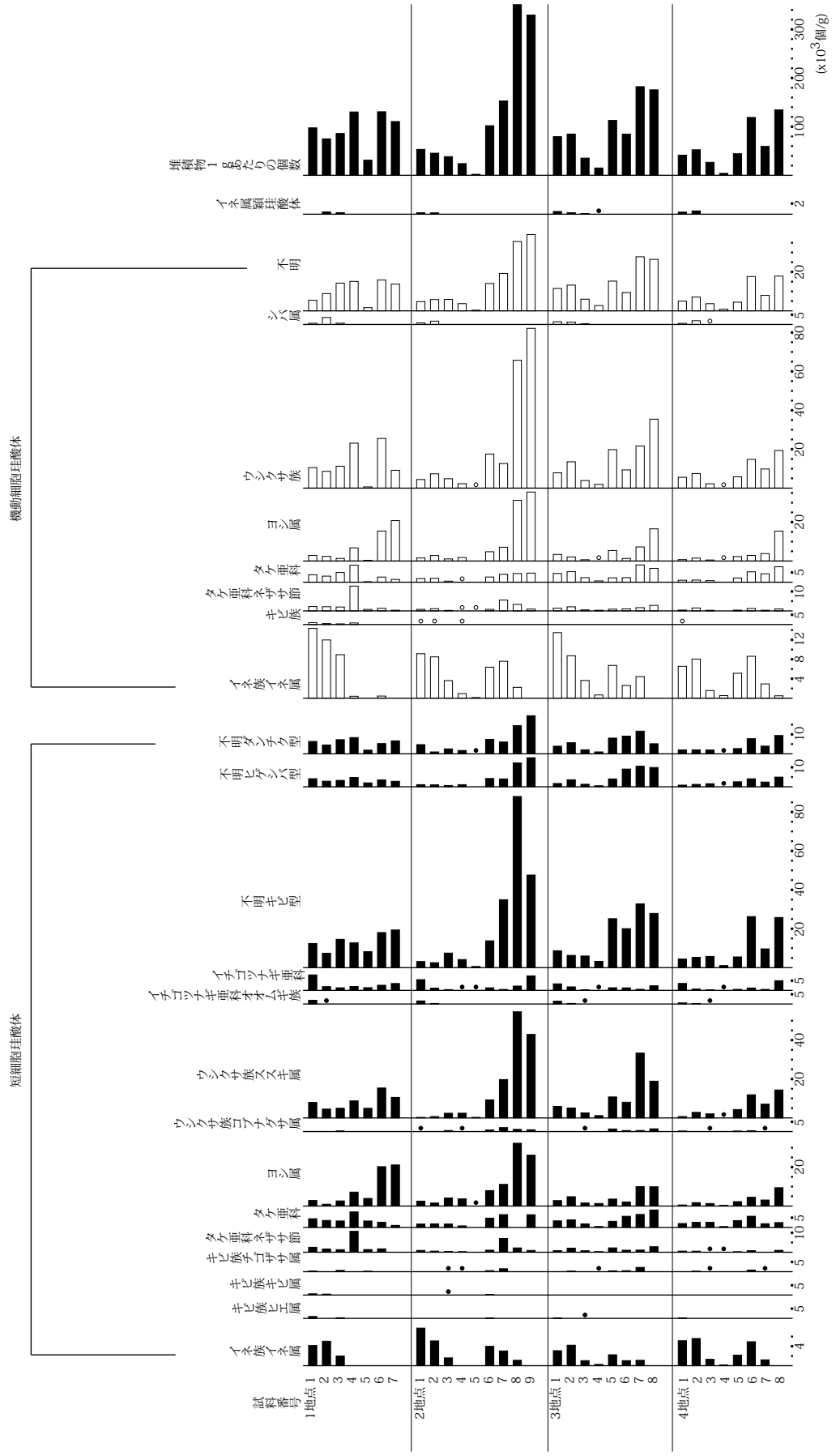
分類群		2地点 1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ科葉部短細胞珪酸体										
	イネ族イネ属	7,700	5,100	1,600	−	−	4,000	3,000	1,100	−
	キビ族ヒエ属	−	−	−	−	−	300	−	−	−
	キビ族キビ属	−	−	100	−	−	300	−	−	−
	キビ族チゴザサ属	−	−	100	200	−	500	1,500	−	−
	タケ亜科ネザサ節	900	600	400	300	−	1,100	7,100	2,200	900
	タケ亜科	1,700	1,800	1,700	800	−	4,800	6,600	−	6,500
	ヨシ属	2,500	1,600	4,200	3,700	100	8,000	11,100	32,300	26,100
	ウシクサ族コブナグサ属	200	−	500	200	−	800	2,000	1,100	900
	ウシクサ族ススキ属	300	700	2,400	2,400	300	9,300	19,700	54,600	42,900
	イチゴツナギ亜科オオムギ族	1,600	300	−	−	−	−	−	−	−
	イチゴツナギ亜科	5,500	1,100	400	200	<100	1,300	500	2,200	7,500
	不明キビ型	3,200	2,500	7,500	4,200	600	13,800	34,900	88,000	47,600
	不明ヒゲシバ型	1,100	1,000	700	1,100	−	4,200	4,000	12,300	14,900
	不明ダンチク型	4,700	1,000	2,500	1,700	200	7,400	6,100	14,500	19,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
	イネ族イネ属	9,100	8,500	3,600	900	100	6,400	7,600	2,200	−
	キビ族	200	100	−	<100	−	−	−	−	−
	タケ亜科ネザサ節	800	1,100	300	<100	100	800	5,600	3,300	900
	タケ亜科	1,900	2,000	500	200	−	2,700	4,000	4,500	4,700
	ヨシ属	1,600	2,800	1,100	1,800	−	4,800	7,100	31,200	35,500
	ウシクサ族	4,400	7,400	4,800	2,300	200	17,500	12,700	65,700	82,100
	シバ属	800	1,700	−	−	−	−	−	−	−
	不明	4,700	5,800	5,900	3,700	300	14,100	19,200	35,600	39,200
珪化組織片										
	イネ属穎珪酸体	300	300	−	−	−	−	−	−	−
合計										
	イネ科葉部短細胞珪酸体	29,500	15,700	22,200	14,900	1,300	55,800	96,700	208,300	167,100
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	23,500	29,500	16,200	9,100	800	46,200	56,200	142,600	162,400
	珪化組織片	300	300	0	0	0	0	0	0	0
	総計	53,300	45,400	38,400	24,000	2,100	101,900	152,900	350,800	329,500

植物珪酸体含量(3)

分類群		3地点 1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科葉部短細胞珪酸体									
	イネ族イネ属	3,100	4,200	1,000	300	2,200	1,000	1,100	−
	キビ族ヒエ属	300	−	100	−	−	−	−	−
	キビ族キビ属	−	−	−	−	−	−	−	−
	キビ族チゴザサ属	−	300	−	<100	500	500	2,200	−
	タケ亜科ネザサ節	800	2,100	800	300	2,200	1,000	1,100	2,800
	タケ亜科	3,400	3,900	1,800	500	3,100	5,700	6,700	9,000
	ヨシ属	2,800	4,800	1,600	1,300	3,600	2,100	10,000	9,900
	ウシクサ族コブナグサ属	−	−	100	−	1,300	500	600	1,400
	ウシクサ族ススキ属	5,900	5,100	2,600	1,200	10,800	8,100	33,300	18,900
	イチゴツナギ亜科オオムギ族	1,400	300	100	−	−	−	−	−
	イチゴツナギ亜科	3,400	1,800	300	<100	1,300	1,300	600	2,400
	不明キビ型	8,700	6,300	6,000	3,300	25,200	20,100	32,800	27,900
	不明ヒゲシバ型	1,700	3,600	1,300	500	4,000	9,100	10,600	9,900
	不明ダンチク型	3,900	5,700	2,100	1,000	8,100	9,100	11,700	5,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
	イネ族イネ属	13,500	8,700	3,600	700	6,700	2,600	4,400	−
	キビ族	−	−	−	−	−	−	−	−
	タケ亜科ネザサ節	1,400	2,100	500	300	900	1,000	1,700	2,800
	タケ亜科	4,500	5,400	2,300	700	2,200	2,300	8,900	7,100
	ヨシ属	3,400	2,100	700	200	5,400	1,300	7,200	16,500
	ウシクサ族	7,900	13,500	3,900	1,900	19,800	9,400	21,700	35,400
	シバ属	1,400	1,200	400	−	−	−	−	−
	不明	11,500	13,200	6,000	2,700	15,300	9,400	27,800	26,500
珪化組織片									
	イネ属穎珪酸体	600	300	100	<100	−	−	−	−
合計									
	イネ科葉部短細胞珪酸体	35,400	38,200	17,800	8,500	62,500	58,600	110,600	87,400
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	43,500	46,300	17,400	6,500	50,400	26,000	71,700	88,400
	珪化組織片	600	300	100	100	0	0	0	0
	総計	79,500	84,800	35,400	15,100	112,800	84,700	182,300	175,800

植物珪酸体含量(4)

分類群		4地点 1	2	3	4	5	6	7	8
	イネ族イネ属	5,100	5,600	1,300	200	2,200	4,900	1,200	−
	キビ族ヒエ属	300	−	−	−	−	−	−	−
	キビ族キビ属	−	−	−	−	−	−	−	−
	キビ族チゴザサ属	−	300	100	−	−	800	200	−
	タケ亜科ネザサ節	600	500	200	<100	300	800	−	1,000
	タケ亜科	2,000	2,600	2,600	500	3,500	5,700	1,900	2,500
	ヨシ属	600	1,800	1,300	400	2,300	4,500	3,100	9,400
	ウシクサ族コブナグサ属	300	−	100	−	300	400	200	−
	ウシクサ族ススキ属	700	2,900	2,100	<100	4,300	11,900	7,100	14,400
	イチゴツナギ亜科オオムギ族	600	300	100	−	−	−	−	−
	イチゴツナギ亜科	3,600	700	300	<100	500	1,200	500	5,000
	不明キビ型	4,400	5,300	5,800	1,100	5,500	26,300	9,700	25,800
	不明ヒゲシバ型	900	1,200	1,600	<100	2,600	4,100	2,400	5,000
	不明ダンチク型	2,000	2,000	2,000	<100	2,700	7,800	4,000	9,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
	イネ族イネ属	6,600	8,000	1,600	500	5,100	8,600	2,900	500
	キビ族	100	−	−	−	−	−	−	−
	タケ亜科ネザサ節	400	1,500	300	−	400	1,200	300	1,000
	タケ亜科	1,000	1,100	800	−	2,200	5,300	4,300	7,900
	ヨシ属	700	1,500	500	<100	2,300	2,900	3,800	15,400
	ウシクサ族	5,600	7,500	2,200	<100	5,800	14,800	9,800	19,300
	シバ属	600	1,900	100	−	−	−	−	−
	不明	5,000	7,100	3,700	800	4,500	17,600	7,900	17,900
珪化組織片									
	イネ属穎珪酸体	400	700	−	−	−	−	−	−
合計									
	イネ科葉部短細胞珪酸体	21,000	23,200	17,500	2,500	24,200	68,500	30,200	72,400
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	20,000	28,600	9,300	1,500	20,200	50,500	29,200	62,000
	珪化組織片	400	700	0	0	0	0	0	0
	総計	41,400	52,500	26,700	4,000	44,400	119,000	59,400	134,400



堆積物1ｇあたりに換算した個数を示す。イネ属類珪酸体の●は100個/ｇ未満、その他の●○は250個/ｇ未満を示す。

第55図　各地点の植物珪酸体含量の層位的変化

4)を境として層位的な変化が認められ、その傾向も2地点と類似する。試料番号4は約1,5万個/gであり、これより下位試料(試料番号5 ～ 8)は約18,2 ～ 8,5万個/g、上位試料(試料番号1 ～ 3)は約8,5 ～ 3,5万個/gである。

本地点で検出された分類群は、1,2地点と概ね同様であり、チゴザサ属、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属およびススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属等のほか、栽培植物のイネ属、栽培種を含むヒエ属、オオムギ族等が認められる。各分類群の層位的変化は2地点と概ね類似し、ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属などは上位試料と比較して下位試料で高い値を示す。また、栽培植物のイネ属も同様の変化を示す。下位試料(試料番号5 ～ 8)では、短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約2,200 ～ 1,000個/gであり試料番号5で最も高い。機動細胞珪酸体は約6,700 ～ 2,600個/gであり、試料番号5,7で高い値を示す。上位試料(試料番号1 ～ 3)では、葉部に由来する植物珪酸体とともに穎珪酸体も検出される。短細胞珪酸体は約4,200 ～ 1,000個/g、機動細胞珪酸体は約13,500 ～ 3,600個/gであり、ともに試料番号1,2で高い。その他に、試料番号3からヒエ属、試料番号1 ～ 3からオオムギ族が検出される。

(エ)　4 地点

植物珪酸体含量は、2,3地点と比較すると低いが、層位的な変化は2,3地点と同様にAs-B(試料番号4)を境に変化が認められる。試料番号4は約4,000個/gであり、これより下位試料(試料番号5 ～ 8)は約13,4万～ 4,4万個/g、上位試料(試料番号1 ～ 3)は約5,3万～ 2,7万個/gである。

本地点で検出された分類群は、3地点と同様でありチゴザサ属、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属およびススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属等のほか、栽培植物のイネ属、栽培種を含むヒエ属、オオムギ族等が認められる。

各分類群の層位的変化は、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族は、いずれも下位試料で高い値を示す試料が多い。また、栽培植物のイネ属も2,3地点と概ね同様の層位的変化を示す。下位試料(試料番号5 ～ 8)では、短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体が約4,900 ～ 1,200個/g、機動細胞珪酸体が約8,600 ～ 500個/gであり、いずれも試料番号6で最も高い。上位試料(試料番号1 ～ 3)では、葉部に由来する植物珪酸体とともに穎珪酸体も検出される。短細胞珪酸体は約5,600 ～ 1,300個/g、機動細胞珪酸体は約8,000 ～ 1,600個/gであり、試料番号1,2で高い値を示す。その他に、試料番号1からヒエ属、試料番号1 ～ 3からオオムギ族が検出される。

エ　考察

(ア)土地利用

4区北壁(1 ～ 4地点)における植物珪酸体分析の結果、各地点より栽培植物のイネ属の葉部や籾殻に形成される植物珪酸体が検出された。その含量の層位的変化は、1地点と2 ～ 4地点で異なり、1地点ではAs-B混土より下位試料ではイネ属の含量は低い、あるいは検出されなかったが、As-B混土から表土(水田耕作土)試料では上位に向かって増加するという傾向を示した。2 ～ 4地点は、As-Bを境として、下位試料および上位試料において、イネ属の植物珪酸体含量が上方に向かって増加するという傾向が認められた。詳細にみると、下位試料では、As-B下水田試料で最も植物珪酸体含量が高い地点(3地点)や、As-B下水田試料下位の暗灰色～灰色シルトで高い値を示す地点(2,4地点)など相違があるが、これらの地点ではその下位の黒色シルトにおいてもイネ属が検出されるという共通点も指摘される。また、上位試料の層位的変化は、1地点と同様に上方に向かって増加する傾向を示した。

各土層におけるイネ属の機動植物珪酸体含量は、黒～黒灰色シルト(2地点;試料番号8、3地点;試料番号7、4地点;試料番号7)が約4,000 ～ 2,200個/g、上位の暗灰～灰色シルト(2地点;試料番号7、3地点;試

料番号6、4地点;試料番号6)が約8,600～2,600個/g、As-B下水田に相当する暗灰色シルト(2地点;試料番号6,3地点;試料番号5,4地点;試料番号5)が約6,700～5,100個/gであった。As-B堆積層より上位の試料では、As-B混土(1地点;試料番号2,3、2地点;試料番号3,4、3地点;試料番号2,3、4地点;試料番号2,3)は約12,000～900個/gであったが、As-B混土上部では約12,000～3,600個/gと含量が高い。さらに、As-A混土に相当する2地点;試料番号2は約8,500個/g、表土試料(1～4地点;試料番号1)では約14,400～6,600個/gといずれも高い値を示した。

このうち、今回分析対象とした表土試料は、現在の水田耕作土の作土に相当することから、稲作を判断する指標となる。また、水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山,2000)。

これらの分析結果や事例を参考とすると、本遺跡のAs-A混土やAs-B混土の各土層で稲作が行われていたと推定される。また、As-B下水田に相当する土層においても、2～4地点における植物珪酸体含量はいずれも5,000個/g以上であったことから、検出された水田では稲作が行われていたと考えられる。1地点のAs-B下水田に相当すると考えられる堆積物(試料番号4)では、イネ属の植物珪酸体含量が極めて低い。調査区内の微地形の変化をみると、1地点は低地から微高地への転換点付近に位置することから非耕作域であった可能性もあり、As-B下水田の検出状況などと合わせた検討が必要と考えられる。また、2～4地点の黒色シルトは、約4,000～2,200個/gであった。稲作の可能性が示唆される各土層と比べ含量は低いが、下位の褐灰～灰色砂混じりシルトと比較すると含量の増加が顕著である。このことから、当土層においても稲作が行われていた可能性がある。

また、イネを除く栽培植物では、ヒエ属やキビ属、オオムギ族などの栽培種を含む分類群が、As-B混土～表土試料より検出された。ヒエ属やキビ属には、栽培種のヒエやキビのほか、野生種のタイヌビエやヌカキビなども含まれることから、栽培の特定には至らない。オオムギ族は、栽培種のオオムギやコムギが含まれ、表土試料でとくに含量が高くなる傾向が認められたことから、これらは現在の二毛作のムギ栽培に由来する可能性がある。

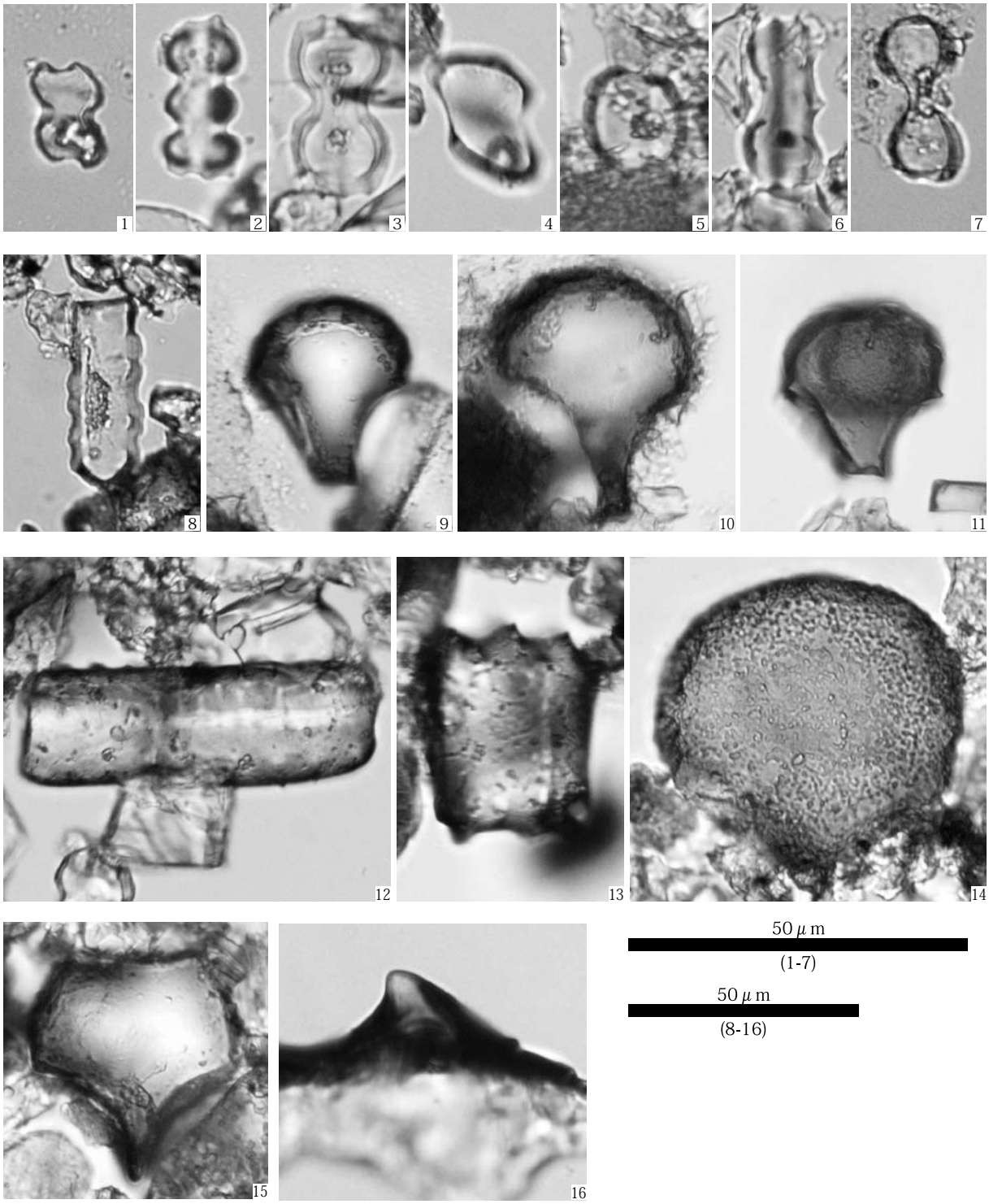
(イ)古植生

上記した栽培植物を除く分類群では、各地点よりチゴザサ属、タケ亜科(ネザサ節を含む)、ヨシ属、ウシクサ族(コブナクサ属、ススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科、シバ属などが検出された。このうち、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族は、各地点の下位試料に相当する灰色砂混じりシルトや黒色シルトで含量が高く、上位に向かって減少するという変化を示した。また、As-B堆積層より上位では下位試料に比べ、いずれも相対的に低い値で推移する、極端な増減が認められないという特徴が指摘される。

したがって、As-B降灰以前の遺跡周辺は明るく開けた環境であったと推定され、湿潤な環境を好むヨシ属やススキ属の一部(例えばオギなど）が生育する水湿地が分布したと考えられる。また、付近の比較的乾燥した環境には、ネザサ節などのタケ亜科やススキ属が生育したと考えられる。なお、水田の検出やイネ属の産状から稲作の可能性が示唆されることから、ヨシ属などには水田雑草として生育したものも含まれると考えられる。また、As-B降灰以降も同様のイネ科植物が周辺に生育したと考えられるが、ヨシ属やススキ属の減少が顕著であることから、水湿地的環境の減少、水田雑草として生育したイネ科植物の減少などの堆積環境や土地利用(水田管理)の変化も推定される。

引用文献

新井房夫,1979,関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層.考古学ジャーナル,157,41-52.
群馬県,1990,付図2群馬県内主要地域の地形分類図.群馬県史通史編1原始古代,902p
近藤錬三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
杉山真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻誠一郎(編著)「考古学と自然科学3考古学と植物学」,同成社,189-213.



１.イネ属短細胞珪酸体(2地点;6)
２.ヒエ属短細胞珪酸体(1地点;1)
３.キビ属短細胞珪酸体(1地点;1)
４.ネザサ節短細胞珪酸体(1地点;4)
５.ヨシ属短細胞珪酸体(1地点;7)
６.コブナグサ属短細胞珪酸体(2地点;4)
７.ススキ属短細胞珪酸体(1地点;6)
８.オオムギ族短細胞珪酸体(1地点;1)
９.イネ属機動細胞珪酸体(2地点;6)
10.イネ属機動細胞珪酸体(3地点;5)
11.イネ属機動細胞珪酸体(4地点;5)
12.キビ族機動細胞珪酸体(1地点;1)
13.ネザサ節機動細胞珪酸体(1地点;4)
14.ヨシ属機動細胞珪酸体(1地点;7)
15.シバ属機動細胞珪酸体(1地点;2)
16.イネ属穎珪酸体(2地点;2)

遺物観察表

挿図番号 図版番号	遺構名 出土位置	種別 器種	①残存②口径③底径④器高 /①残存②長さ③幅④厚さ⑤重さ	①胎土②色調③焼成 / ①石材	製作技法等の特徴	備考
12図１	１号住居	土師器 杯	①1/4 ②(10.9)③④2.6	①砂粒を含む ②橙③酸化	外底器表荒れ。	
12図２	１号住居	土師器 杯	①1/4 ②(12.2)③(9.8)④-	①砂粒を含む ②橙③酸化	内外面器表荒れ。	
12図３	１号住居	土師器 杯	①口～底 ②(13.6)③-④-	①砂粒を含む ②明褐③酸化	外底非回転ケズリ。	
12図４ ＰＬ22	１号住居	土師器 杯	①1/4 ②(13.8)③(12.0)④2.8	①細砂粒を含む ②橙③酸化	外底器表荒れ。	
12図５ ＰＬ22	１号住居	土師器 杯	①1/4 ②(15.7)③-④-	①砂粒を含む ②橙③酸化	内外面器表荒れ。	
12図６	１号住居	土師器 杯	①底部片 ②-③（8.0）④-	①砂粒を含む ②橙③酸化	外底非回転ケズリ、器表荒れ。	
12図７ ＰＬ22	１号住居	土師器 杯	①3/4 ②12.6③-④3.0	①細砂粒を含む ②にぶい赤褐③酸化	外底非回転ケズリ、内外面指頭痕あり。	
12図８ ＰＬ22	１号住居 床直	土師器 杯	①口縁部3/4底部欠損 ②(13.2)③-④-	①砂粒を含む ②にぶい褐③酸化	外底非回転ケズリ。	
12図９ ＰＬ22	１号住居	土師器 杯	①1/4 ②(12.6）③-④-	①細砂粒を含む ②橙③酸化	外底非回転ケズリ。	
12図10 ＰＬ22	１号住居 床直	須恵器 杯	①1/4 ②(11.2)③(7.4)④4.0	①白色粒子を含む ②灰③還元	外底右回転糸切り。	
12図11 ＰＬ22	１号住居 床直	須恵器 杯	①1/4 ②(12.8)③(6.0)④3.6	①白色粒子を含む ②灰③還元	外底回転ケズリか。	
12図12	１号住居	土師器 甕	①口縁部片 ②-③-④-	①砂粒を含む ②にぶい橙③酸化	口唇部外面にクシ状工具による刻みあり。	
12図13	１号住居	土師器 甕	①口縁部片 ②(20.6)③-④-	①細砂粒を含む ②橙③酸化	体部外面ケズリ。	
12図14 ＰＬ22	１号住居	土師器 甕	①口～胴上位片 ②23.6）③-④-	①細砂粒を含む ②にぶい橙③酸化	体部外面ケズリ。	
12図16 ＰＬ22	１号住居 床直	石製品 こも網石	①完形②15.75③7.95④3.5 ⑤647.9g	①砂岩	側面に敲打痕。	
13図15 ＰＬ22	１号住居 上層	石製品 砥石	①完形②10.8③4.8 ④3.3⑤263.2ｇ	①砥沢石	4面使用、端部は原面。	一部欠損
13図17 ＰＬ22	１号住居 Ｐ４	石製品 こも網石	①完形②15.3③5.1 ④2.7⑤358.3ｇ	①雲母石英片岩	端部に敲打痕。	
13図18 ＰＬ22	１号住居 上層	石製品 こも網石	①完形②11.8③3.2 ④2.0⑤114.0ｇ	①雲母石英片岩		
13図19 ＰＬ22	１号住居 Ｐ３	石製品 こも網石	①完形②13.4③5.6 ④3.7⑤369.1g	①変質安山岩	端部に敲打痕。	
13図20 ＰＬ22	１号住居 床直	石製品 こも網石	①完形②13.3③4.9 ④2.6⑤299.5ｇ	①雲母石英片岩		
13図21 ＰＬ22	１号住居 １床下土	石製品 こも網石	①完形②15.7③6.4 ④3.9⑤643.6g	①雲母石英片岩		
13図22 ＰＬ22	１号住居	鉄製品 刀子か	①-②8.9③2.1④- ⑤22.8ｇ	茎の可能性あり、刃部断面に鋭さを欠く。		
16図１	２号住居	土師器 杯	①1/4 ②(12.3)③-④-	①細砂粒を含む ②にぶい褐③酸化	内外面器表荒れ。	
16図２	２号住居	土師器 杯	①口～底 ②(12.8)③-④-	①細砂粒を含む ②にぶい橙③酸化	外底ケズリ。	
16図３ ＰＬ22	２号住居	土師器 杯	①体部片 ②-③-④-	①細砂粒を含む ②橙③酸化	内面ミガキあり。	
16図４ ＰＬ22	２号住居 +6	土師器 杯	①ほぼ完形 ②12.0③-④3.4	①細砂粒を含む ②にぶい橙③酸化	外底非回転ケズリ。	
16図５ ＰＬ22	２号住居	土師器 杯	①ほぼ完形 ②12.0③-④-	①細砂粒を含む ②にぶい褐③酸化	外底非回転ケズリ。	
16図６ ＰＬ22	２号住居 +10	土師器 杯	①3/4 ②11.5③-④-	①細砂粒を含む ②橙③酸化	外底非回転ケズリ。	
16図７ ＰＬ22	２号住居 床直	須恵器 杯	①口縁部1/4欠損 ②12.5③6.4④3.5	①白色粒子を含む ②灰③還元	外底右回転糸切り後回転ケズリ。	
16図８ ＰＬ22	２号住居 +22	須恵器 杯	①底部1/2欠損 ②12.5③6.2④4.2	①白色粒子を含む ②黄灰③還元	外底右回転糸切り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	遺構名 出土位置	種別 器種	①残存②口径③底径④器高 /①残存②長さ③幅④厚さ⑤重さ	①胎土②色調③焼成 / ①石材	製作技法等の特徴	備考
16図９ ＰＬ22	２号住居 床直	須恵器 杯	①1/3 ②(11.6)③(6.0)④(3.4)	①細砂粒を含む ②灰白③還元	外底右回転糸切り、器表荒れ。	
16図10 ＰＬ22	２号住居 +20	須恵器 杯	①1/2 ②(13.8)③(7.2)④4.1	①砂粒を含む ②橙③酸化	外底右回転糸切り後非回転ケズリ。	
16図11 ＰＬ22	２号住居 床直	須恵器 杯	①1/3 ②(12.2)③(8.2)④3.4	①白色粒子を含む ②灰③還元	外底右回転糸切り。	
16図12 ＰＬ22	２号住居 +5	須恵器 杯	①1/2 ②10.8③7.2④3.7	①細砂粒を含む ②灰③還元	外底右回転糸切り2回か。	
16図13 ＰＬ22	２号住居 床直	須恵器 杯	①ほぼ完形 ②12.4③5.6④3.5	①細砂粒を含む ②灰白③還元	外底右回転糸切り後非回転ケズリ。	
16図14 ＰＬ23	2号住居	須恵器 杯	①底部片 ②-③6.4④-	①白色粒子を含む ②灰③還元	外底右回転糸切り。	
16図15 ＰＬ23	2号住居 床直	須恵器 杯	①底部3/4 ②-③6.9④-	①白色粒子を含む ②灰白③還元	外底右回転糸切り。	
17図16 ＰＬ23	２号住居 +6	須恵器 杯	①底部1/2欠損 ②-③(7.9)④-	①細砂粒を含む ②灰白③還元	外底右回転糸切り。	体部打欠きか
17図17 ＰＬ23	２号住居 床直	須恵器 杯	①口縁部1/3欠損 ②12.2③6.0④4.0	①砂粒を含む ②灰白③還元	外底右回転糸切り。	
17図18 ＰＬ23	２号住居 床直	須恵器 杯	①底部片 ②(12.8)③(6.8)④(5.0)	①白色粒子を含む ②灰③還元	外底右回転糸切り。	
17図19	２号住居	須恵器? ミニチュア？	①底部片 ②-③(3.4)④-	①細砂粒を含む ②浅黄橙③酸化	底部凸。	
17図20	２号住居 +8	須恵器 椀	①口縁部片 ②（15.2）③-④-	①白色粒子を含む ②灰③還元	内外面回転ナデ。	
17図21 ＰＬ23	２号住居 +7	須恵器 椀	①3/4 ②(15.4)③8.0④6.9	①白色粒子を含む ②灰③還元	内外面器表荒れ。	
17図22 ＰＬ23	２号住居 床直	須恵器 椀	①底部1/2 ②-③(8.7)④-	①細砂粒を含む ②黄灰③還元	外底回転ナデ。	
17図23	２号住居	須恵器 椀	①胴下位～低部片 ②-③(6.0)④-	①細砂粒を含む ②灰白③還元	高台外側が接地しない。	
17図24	２号住居	須恵器 蓋	①端部片 ②(17.2)③-④-	①細砂粒を含む ②灰③還元		
17図25 ＰＬ23	２号住居	土師器 甕	①口縁部片 ②(17.8)③-④-	①細砂粒を多く含む ②明赤褐③酸化	体部外面ケズリ。	
17図26 ＰＬ23	２号住居	土師器 甕	①口縁部片 ②(19.8)③-④-	①細砂粒を含む ②明赤褐③酸化	体部外面ケズリ。	
17図27 ＰＬ23	２号住居	土師器 甕	①口縁部片 ②(18.0）③-④-	①細砂粒を多く含む ②橙③酸化	体部外面ケズリ。	
17図28 ＰＬ23	２号住居 カマド	石製品 こも網石	①完形②10.55③5.4 ④4.2⑤397.3g	①雲母石英片岩	端部に敲打痕。	
17図29 ＰＬ23	２号住居 +14	石製品 こも網石	①完形②15.5③6.2 ④1.7⑤200.0g	①粗粒安山岩	端部に敲打痕、扁平。	
18図30 ＰＬ23	２号住居 床直	土師器 椀または鉢	①口縁部片 ②(19.7)③-④-	①砂粒を含む ②明赤褐③酸化	体部外面ケズリ。	
18図31 ＰＬ23	２号住居	須恵器 広口甕	①口縁部片 ②(29.8)③-④-	①白色粒子を含む ②灰③還元	内外面回転ナデ。	
18図32 ＰＬ23	２号住居 床直	須恵器 甕	①胴部片 ②-③-④-	①砂粒を含む ②にぶい黄橙③還元	外面平行タタキ目、内面同心円当て具痕。	
19図１ ＰＬ23	３号住居 -18	土師器 杯	①ほぼ完形 ②12.5③6.3④3.0	①細砂粒を含む ②明褐③酸化	外底非回転ケズリ。	
19図２ ＰＬ23	３号住居	土師器 杯	①1/2 ②(14.2)③(10.7)④3.85	①細砂粒を含む ②橙③酸化	外底非回転ケズリ、口縁部内湾気味。	
19図３ ＰＬ23	３号住居	土師器 杯	①1/2 ②(12.9)③-④3.4	①砂粒を含む ②にぶい橙③酸化	外底非回転ケズリ。	
19図４ ＰＬ23	３号住居	土師器 杯	①口縁部片1/3 ②(12.3)③-④-	①砂粒を含む ②橙③酸化	外底非回転ケズリ。	
19図５ ＰＬ23	３号住居 床直	土師器 大型杯	①1/2 ②19.8③-④7.7	①砂粒を含む ②にぶい橙③酸化	外面横方向ケズリ、内面丁寧なナデ。	
19図６ ＰＬ23	３号住居	土師器 大型杯	①1/4 ②(20.0)③-④-	①砂粒を含む ②橙③酸化	口縁部内湾気味。	二次火熱か

挿図番号 図版番号	遺構名 出土位置	種別 器種	①残存②口径③底径④器高 /①残存②長さ③幅④厚さ⑤重さ	①胎土②色調③焼成 /①石材	製作技法等の特徴	備考
20図７	３号住居 +6	須恵器 杯	①1/4 ②(10.7)③(6.0)④3.6	①白色粒子を含む ②灰③還元	外底右回転糸切り。	
20図８	３号住居 床直	須恵器 杯	①口縁部片 ②(11.7)③-④-	①白色粒子を含む ②灰③還元	体部丸みあり。	
20図９ ＰＬ23	３号住居 床直	須恵器 蓋	①口唇部1/2欠損 ②(13.9)③-④3.2	①細砂粒を含む ②灰白③還元	天井部外面回転ケズリ後摘み貼付け。	
20図10 ＰＬ23	３号住居 床直	土師器 甕	①口縁部片 ②(15.7)③-④-	①砂粒を含む ②明赤褐③酸化	頸部外面にハケ目状痕跡あり、内外面器表荒れ。	
20図11 ＰＬ23	３号住居	土師器 甕	①底部片 ②-③(3.0)④-	①細砂粒を含む ②にぶい黄褐③酸化	外面縦方向ケズリ、内面ナデ、外底凸。	
20図12 ＰＬ23	３号住居 +6	土師器 甕	①底部片 ②-③(8.0)④-	①細砂粒を含む ②橙③酸化	外面ケズリ、内面ナデ、外底凸。	
20図13 ＰＬ24	３号住居 床直	須恵器 甕	①底部 ②-③-④-	①砂粒を含む ②灰白③還元	円盤状の底部、外底非回転ケズリ、内底指頭ナデ	
20図14 ＰＬ24	３号住居	石製品 こも網石	①破片②-③(2.4)④- ⑤25.2ｇ	①雲母石英片岩	周縁擦っている。	
20図15 ＰＬ24	３号住居 -11	石製品 こも網石	①完形②13.5③7.3④5.2 ⑤700.0g	①溶結凝灰岩	端部に敲打痕。	
27図14-1 ＰＬ24	14号土坑	施釉陶器 灯明皿	①底部片 ②-③(4.6)④-	①精緻②浅黄、釉：褐 ③酸化	錆釉。体部外面以下釉を拭い取る。	瀬戸美濃 18Ｃ後～19Ｃ前
27図14-2 ＰＬ24	14号土坑	施釉陶器 徳利	①体部片 ②-③-④-	①密②釉、灰オリ-ブ ③酸化	飴釉。肩部横線、うのふ釉流し(尾呂徳利)。	瀬戸美濃窯 江戸
27図39-1 ＰＬ24	39号土坑	施釉陶器 碗	①底部 ②-③5.0④-	①白色粗粒含 ②釉：オリ-ブ褐③-	内面～高台脇飴釉。	瀬戸美濃系 江戸
28図1-1 ＰＬ24	１号井戸	土師器 甕	①口縁部1/3 ②(25.0)③-④-	①砂粒を含む ②にぶい黄橙③酸化	口唇部突出する、口縁部内外面ミガキ状。	
28図2-1 ＰＬ24	２号井戸	須恵器 杯	①1/3 ②(12.0)③(6.5)④5.0	①砂粒を含む ②橙③酸化	外底右回転糸切り。	
29図１ ＰＬ24	36号ピット	埴輪 円筒埴輪	①破片 ②-③-④-	①砂粒を含む ②橙③酸化	凸帯あり、朝顔型か。	６Ｃか
32図9-1	９号溝	土師器 高杯	①脚部片 ②-③(10.0)④-	①砂粒を含む ②にぶい橙③酸化	円形透かしあり。	
32図28-1	28号溝	土師器 杯	①口縁部片 ②(11.7)③-④-	①砂粒を含む ②橙③酸化	口縁部薄く尖る。	
32図28-2 ＰＬ24	28号溝	須恵器 杯	①1/4 ②(12.9)③(7.0)④3.2	①白色粒子を含む ②灰③還元	外底右回転糸切り。	
42図16-1 ＰＬ24	16号溝	施釉陶器 稜皿	①底部1/2 ②-③(6.0)④-	①精緻 ②浅黄③-	内面灰釉。	瀬戸美濃 江戸
42図16-2 ＰＬ24	16号溝	施釉陶器 碗	①底部片 ②-③(4.5)④-	①精緻 ②釉：にぶい黄③-	内外面釉。	肥前呉器手 17Ｃ後～18Ｃ前
42図16-3 ＰＬ24	16号溝	在地土器 鍋	①底部片 ②-③-④-	①砂礫多、キラキラ ②にぶい褐③酸化	破損後二次使用か。Ｘ字状にえぐり込む。	中世？
42図16-4 ＰＬ24	16号溝	在地土器 焙烙	①口～底 ②-③-④-	①密 ②にぶい黄橙③酸化	外面底近くヨコナデ。内面ヨコナデ。	江戸
42図16-5 ＰＬ24	16号溝	焼締陶器 スリ鉢	①体部片 ②-③-④-	①粗粒多 ②にぶい赤褐③-	内面摺り目。	丹波江戸
42図18-1 ＰＬ24	18号溝	磁器 碗	①0.25 ②(6.8)③(2.9)④4.7	①黒色微粒含 ②灰白③-	口縁部外面雨降り文。	肥前波佐見系 18Ｃ前
42図19-1	19号溝	在地土器 カワラケか	①底部片 ②-③(6.0)④-	①細砂粒を含む ②にぶい黄橙③酸化	外底回転糸切り、内面一部ヘラなで。	左回転か 中世か
42図19-2 ＰＬ24	19号溝	施釉陶器 碗	①口縁部片 ②(10.0)③-④-	①精緻 ②浅黄橙③酸化	内外面釉。	肥前呉器手 17Ｃ後～18Ｃ前
42図19-3 ＰＬ24	19号溝	在地土器 焙烙	①口縁部片 ②-③-④-	①砂粒多い ②にぶい橙③酸化	内外面ヨコナデ。破損後二次使用か。端部摩耗。	近世？
42図19-4 ＰＬ24	19号溝	焼締陶器 壷か甕	①体部片 ②-③-④-	①白色細粒多 ②釉：灰黄褐③還元	外面釉あり。灰釉。	知多窯？
42図26-1 ＰＬ24	26号溝	施釉陶器 輪禿皿	①底部片 ②-③(6.0)④-	①白色粗粒含 ②灰白③-	高台の断面三角形。灰釉。	瀬戸・美濃 17Ｃ
42図34-1 ＰＬ24	34号溝	施釉陶器 灯明皿	①破片 ②(10.7)③(5.6)④-	①精緻 ②にぶい褐③-	錆釉。体部外面以下錆拭い取る。	瀬戸美濃？ 18Ｃ後半

遺物観察表

挿図番号 図版番号	遺構名 出土位置	種別 器種	①残存②口径③底径④器高 /①残存②長さ③幅④厚さ⑤重さ	①胎土②色調③焼成 / ①石材	製作技法等の特徴	備考
42図34-2 ＰＬ24	34号溝	磁器 碗	①底部 ②-③(4.0)④-	①精緻 ②灰白③-	雪輪梅樹文。高台内不明銘。	波佐見系 江戸
42図34-3 ＰＬ24	34号溝	在地土器 片口鉢	①破片 ②-③-④-	①白色粒子を含む ②灰③還元	陶質。口縁端部内面摩滅。	15Ｃ前
42図38-1 ＰＬ24	38号溝	施釉陶器 碗	①底部片 ②-③(5.3)④-	①精緻 ②浅黄③-	内外面釉。	肥前呉器手 17Ｃ後～18Ｃ前
42図38-2 ＰＬ24	38号溝	磁器 猪口	①底部片 ②-③(4.3)④-	①精緻 ②明オリ-ブ灰③-	染付。	肥前
42図38-3 ＰＬ24	38号溝	施釉陶器 瓶類	①体部片 ②-③-④-	①密 ②釉:にぶい黄橙③-	外面摩滅または二次火熱受け。肩部横線文。飴釉。	瀬戸美濃系 江戸
42図38-4 ＰＬ24	38号溝	施釉陶器 瓶類	①体部片 ②-③-④-	①白色粗粒含 ②釉:黄褐③-	外面飴釉。肩部横線文。	瀬戸美濃 江戸
42図38-5 ＰＬ24	38号溝	施釉陶器 香炉	①底部片 ②-③(7.4)④-	①密②灰黄、 釉:にぶい黄褐③-	外面にケズリ文様あり。飴釉。	瀬戸美濃18Ｃ 中～後
42図38-6 ＰＬ24	38号溝	施釉陶器 灯明受皿	①口縁部片 ②(10.5)③-④-	①精緻 ②釉:灰白③-	内面釉、外面釉なし。	京信系？
42図38-7 ＰＬ24	38号溝	在地土器 鍋	①体部片 ②-③-④-	①瓦器質、キラキラ ②黒③還元	口唇部内外面に凸、把手状のふくらみあり。外面ヨコナデ。	近現代か
42図38-8 ＰＬ24	38号溝	焼締陶器 スリ鉢	①口縁部片 ②-③-④-	①白色粗粒含 ②赤褐③-		堺・明石 江戸
43図38-9 ＰＬ24	38号溝	焼締陶器 甕	①体部片 ②-③-④-	①砂粒多い ②赤褐③-		常滑？
43図38-10 ＰＬ24	38号溝	石製品 火打石	①破片②(1.6)③(1.8) ④(0.9)⑤2.4	①玉髄	擦痕あり。	
43図38-11 ＰＬ24	38号溝	石製品 火打石	①破片②4.0③2.7④1.3 ⑤13.7ｇ	①石英	擦痕あり。	
43図38-12 ＰＬ24	38号溝	石製品 たたき石か	①完形②9.4③8.7④5.6 ⑤613.5g	①粗粒輝石安山岩	敲打痕あり。	
49図１ ＰＬ25	１遺物集中	土師器 杯	①1/2 ②(11.0)③3.0④4.0	①砂粒を含む ②淡黄③酸化	外底平坦、内面ハケ目後ナデ。	
49図２	１遺物集中	土師器 高杯	①脚部片 ②-③-④-	①砂粒を含む ②にぶい橙③酸化	脚部に円形透かし、内外面器表荒れ。	
49図３ ＰＬ25	１遺物集中	土師器 Ｓ字口縁 小型甕	①1/2 ②(10.1)③-④-	①砂粒多い ②灰黄③酸化	外面肩部上位左下がりハケ目、下位右下がりハケ目、口縁部シャープな仕上げ。	
49図４ ＰＬ25	１遺物集中	土師器 Ｓ字口縁甕	①口縁～胴上位片 ②(15.6)③-④-	①砂粒多い ②にぶい橙③酸化	体部外面左下がりハケ目後横ハケ目。	
49図５ ＰＬ25	１遺物集中	土師器 Ｓ字口縁甕	①口縁～胴上位片 ②(16.0)③-④-	①砂粒多い ②にぶい黄橙③酸化	体部外面縦ハケ目後横ハケ目。	
49図６ ＰＬ25	１遺物集中	土師器 Ｓ字口縁甕	①口縁～胴上位片 ②(19.8)③-④-	①砂粒多い ②灰黄褐③酸化	体部外面左下がりハケ目後横ハケ目、頸部内面指頭ナデ痕。	
49図７ ＰＬ25	１遺物集中	土師器 Ｓ字口縁甕	①胴下位～脚部 ②-③-④-	①砂粒多い ②灰褐③酸化	内底の器表荒れ、工具痕あり、脚部打欠きか、脚内面砂。	脚部二次火熱
49図８ ＰＬ25	１遺物集中	土師器 甕	①胴部片 ②(9.6)③-④-	①砂粒を含む ②浅黄③酸化	体部丸み強い、内面にハケ目痕残す。	
49図10 ＰＬ25	１遺物集中	土師器 Ｓ字口縁甕	①脚部1/2 ②-③(9.3)④-	①砂粒多い ②赤褐③酸化	上面に体部との接合痕を残す。	二次火熱
50図９ ＰＬ25	１遺物集中	土師器 Ｓ字口縁甕	①口縁～胴下位片 ②(13.0)③-④-	①砂粒多い ②にぶい橙③酸化	体部外面肩部左下がりハケ目、体部中位右下がりハケ目、内面底部近くに接合痕。	
50図11 ＰＬ25	１遺物集中	土師器 壷	①胴～低部片 ②-③7.7④-	①砂粒を含む ②にぶい黄橙③酸化	体部下位が膨らむ、内面に指頭ナデ痕残す、外面丁寧なナデ及びミガキあり、外底中央部はくぼむ。	
50図12 ＰＬ25	１遺物集中	土師器 壷	①口縁部片 ②(14.9)③-④-	①砂粒を含む ②橙③酸化	頸部の内外面にハケ目残る。	二次火熱か
50図13 ＰＬ25	１遺物集中	土師器 壷	①口縁部一部欠損 ②13.2③-④-	①砂粒を含む ②にぶい黄橙③酸化	口縁部折り返し、頸部内外面にハケ目残る。	
50図14	１遺物集中	土師器 器台	①杯～脚部片 ②-③-④-	①細砂粒を含む ②橙③酸化	脚部に円形透かし、杯部内面丁寧なナデ、脚部外面縦ミガキ。	

挿図番号 図版番号	遺構名 出土位置	種別 器種	①残存②口径③底径④器高 /①残存②長さ③幅④厚さ⑤重さ	①胎土②色調③焼成 /①石材	製作技法等の特徴	備考
50図15 ＰＬ25	１遺物集中	石製品 こも網石	①完形②9.3③3.1④1.4 ⑤65.8ｇ	①雲母石英片岩	端部敲打痕あり	
50図16 ＰＬ25	１遺物集中	石製品 こも網石	①完形②15.8③6.1④5.0 ⑤800ｇ	①粗粒安山岩	端部に敲打痕あり	
51図１ ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①口縁部破片	①粗砂 ②橙③ふつう	波状口縁で、口縁が内折する器形。浮線を横位、斜位に施す。	諸磯ｂ式
51図２ ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①口縁部破片	①細礫、粗砂 ②赤褐③ふつう	波状口縁で、口縁が内折する器形。浮線を横位、弧状に施す。波頂部下に貼付紋を貼付。	諸磯ｂ式
51図３ ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①口縁部破片	①粗砂 ②明赤褐③ふつう	波状口縁で口縁が大きく外反し、内折する器形。浮線による横帯構成で、浮線間に刺突を施す。内折部にも施紋。	諸磯ｂ式
51図４ ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	同上	№３と同一個体。浮線による横帯構成。横帯間にも弧状モチーフを施す。	諸磯ｂ式
51図５ ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂②にぶい黄橙 ③ふつう	浮線による横帯構成。	諸磯ｂ式
51図６ ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂 ②橙③ふつう	浮線による横帯構成。地紋に単節ＲＬ縄紋を施紋。	諸磯ｂ式
51図７ ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂 ②赤褐③良好	浮線による横帯構成。地紋に単節ＲＬ縄紋を施紋。	諸磯ｂ式
51図８ ＰＬ25	４号住居	縄紋土器 深鉢	①口縁部破片	①粗砂 ②にぶい橙③ふつう	波状口縁の突起部。平行沈線によりＭ字状モチーフを描く。側面にも弧状の集合沈線を施す。	諸磯ｂ式
51図９ ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①口縁部破片	①粗砂②にぶい黄褐 ③ふつう	口縁が内折する器形。集合沈線による横帯構成。	諸磯ｂ式
51図10 ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂 ②橙③良好	集合沈線による横帯構成。横帯間に弧状の集合沈線を施す。	諸磯ｂ式
51図11 ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①細礫、粗砂 ②赤褐③ふつう	集合沈線による横帯構成。	諸磯ｂ式
51図12 ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂 ②橙③ふつう	集合沈線による横帯構成。地紋に単節ＲＬ縄紋を施紋。	諸磯ｂ式
51図13 ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂 ②橙③ふつう	集合沈線による横帯構成。地紋に単節ＬＲ縄紋を施紋。	諸磯ｂ式
51図14 ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂、白色粒 ②にぶい黄橙 ③ふつう	集合沈線による横帯構成。横帯間に平行沈線による鋸歯状紋を施す。	諸磯ｂ式
51図15 ＰＬ25	北２区	縄紋土器 深鉢	①口縁部破片	①粗砂 ②にぶい赤褐 ③ふつう	口唇外面を肥厚させ、肥厚部に大小２種類の半截竹管内皮による刺突をめぐらす。刺突列下は横位集合沈線を施す。	諸磯ｂ式か ｃ式
51図16 ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①口縁部破片	①粗砂 ②橙③ふつう	口縁内面が肥厚。横位集合沈線を施し、貼付紋を貼付する。内面肥厚部にも斜位の集合沈線を施し、貼付紋を貼付。	諸磯ｃ式
51図17 ＰＬ25	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂 ②にぶい橙③ふつう	緩く外反する器形。対向する矢羽根状集合沈線を挟んだ集合沈線により縦位区画。区画内は弧状の集合沈線を施す。	諸磯ｃ式
51図18 ＰＬ26	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂②にぶい黄褐 ③ふつう	緩く外反する器形。縦位区画、鋸歯状の集合沈線を施し、貼付紋を貼付する。	諸磯ｃ式
51図19 ＰＬ26	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂 ②にぶい褐③ふつう	平行沈線を斜格子目状に施す。	諸磯ｃ式
51図20 ＰＬ26	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①底部破片	①細礫、粗砂 ②橙③ふつう	底部が張り出す器形。鋸歯状の集合沈線を施し、貼付紋を貼付する。	諸磯ｃ式
51図21 ＰＬ26	北２区Ｖ層	縄紋土器 深鉢	①胴部破片	①粗砂 ②橙③ふつう	結節浮線を縦位、斜位に施す。	下島式
51図22 ＰＬ26	４号住居	縄紋土器 浅鉢	①口縁部破片	①粗砂②にぶい黄褐 ③ふつう	口縁がくの字状に立ち上がる器形。屈曲部下に円孔をめぐらす。	諸磯ｂ式か ｃ式
51図23 ＰＬ26	南３区	縄紋土器 深鉢	①口縁部破片	①粗砂 ②浅黄橙③ふつう	沈線により弧状モチーフを描く。	加曽利Ｅ４式
51図24 ＰＬ26	北３区Ｖ層	石鏃 不明	①1/2 ②2.1③1.4④-⑤1.1	①黒曜石	中央より下半を欠損。幅に比べ断面が厚く、尖頭器様。	
51図25 ＰＬ26	１号住居 上層	打製石斧 短冊形	①1/3 ②3.3③4.7④-⑤27.6	①細粒輝石安山岩	刃部中央から右側縁で刃部再生、磨耗痕は左側縁に残る。破損段階不明。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	遺構名 出土位置	種別 器種	①残存②口径③底径④器高 /①残存②長さ③幅④厚さ⑤重さ	①胎土②色調③焼成 / ①石材	製作技法等の特徴	備考
51図26 ＰＬ26	北２区Ｖ層	打製石斧 短冊形	①ほぼ完形 ②13.2③5.9④-⑤205.3	①細粒輝石安山岩	裏面側主剥離面は磨耗、素材剥離と加工に時間差あり。上端が窄まるのは頭部破損が原因？遺跡内製作。	
51図27 ＰＬ26	19号溝覆土	打製石斧 短冊形	①1/2 ②8.3③4.8④-⑤107.5	①黒色頁岩	捲縛痕は見られず、剥離面も新鮮であり、遺跡内製作の石器？製作時に器体下半を欠損。	
51図28 ＰＬ26	南３区 確認面	打製石斧 撥形	①ほぼ完形 ②8.3③5.7④-⑤97.8	①黒色頁岩	背面側剥離は薄く、直刃斧様の形状。刃部に弱い磨耗痕。	
52図29 ＰＬ26	28号溝	打製石斧 短冊形	①1/3 ②9.4③6.7④-⑤219.6	①黒色頁岩	側縁加工の特徴から石斧と認定。やや大形で製作途中の破損か？捲縛痕なし。遺跡内製作。	
52図30 ＰＬ26	北２区Ｖ層	凹石 楕円礫	①完形 ②9.8③7.6④-⑤469.4	①粗粒輝石安山岩	表裏両面とも中央付近に集合打痕、背面側の平坦面は磨耗。被熱して上端を破損。	
52図31 ＰＬ26	北３区Ｖ層	凹石 楕円礫	①完形 ②10.2③6.4④-⑤475.4	①粗粒輝石安山岩	表面中央・右側縁に打痕、磨耗不明。	
52図32 ＰＬ26	24号溝	土師器 壺	①口縁部 ②(16.4)③-④-	①精緻 ②橙③酸化	二重口縁の壷、内外面ミガキ、図上復原。	４Ｃ前半
52図33	33号溝	土師器 壷	①口縁部片 ②(19.7)③-④-	①砂粒を多く含む ②橙③酸化	二重口縁の壷、内外面器表荒れ。	４Ｃ前半
52図34	南３区 遺構外	土師器 高杯	①脚部片 ②-③-④-	①砂粒を含む ②赤褐③酸化	脚部外面縦ミガキ、赤彩。	３Ｃ末～４Ｃ前半
52図35 ＰＬ26	北２区 遺構外	土師器 甑	①底部片 ②-③-④-	①砂粒を含む ②にぶい黄橙③酸化	焼成後底部穿孔、壷形か。	
52図36	南３区 遺構外	須恵器 杯	①1/4 ②(11.4)③(7.0)④3.6	①白色粒子を含む ②黄灰③還元	外底右回転糸切り、胎土はレンガ色。	８世紀後半
52図37 ＰＬ26	南３区 遺構外	須恵器 杯	①口縁部1/2欠損 ②(13.0)③7.0④3.5	①白色粒子を含む ②暗灰黄③還元	外底右回転糸切り。	８世紀後半
52図38 ＰＬ26	南３区 遺構外	須恵器 杯	①1/2 ②(12.2)③7.0④3.5	①白色粒子を含む ②黄灰③還元	外底右回転糸切り。	８世紀後半
52図39 ＰＬ26	南３区 遺構外	須恵器 杯	①口縁部1/ ４欠損 ②12.0③6.5④4.1	①砂粒を含む ②灰黄③還元	外底右回転糸切り、口縁部打欠きか。	８世紀後半
52図40 ＰＬ26	南３区 遺構外	須恵器 椀	①底部 ②-③6.1④-	①砂粒を含む ②灰白③還元	高台内側端は接地しない。	８世紀後半
52図41 ＰＬ26	南３区 遺構外	須恵器 甕	①体部片 ②-③-④-	①白色粒子を含む ②灰③還元	外面平行タタキ目､内面無紋当て具痕。	
52図42 ＰＬ26	７号溝	須恵器 甕	①体部片 ②-③-④-	①白色粒子を含む ②灰③還元	体部下位の小片。	
53図43 ＰＬ26	北３区 遺構外	瓦平瓦	①破片 ②-③-④-	①砂粒多い ②灰白③還元	凹面凸面ともナデ。	９Ｃ
53図44 ＰＬ26	北３区 遺構外	土製品 フイゴ羽口	①先端部 ②-③-④-⑤30.7g	①鉄滓多い ②③		磁石反応あり
53図45 ＰＬ26	南３区 遺構外	青磁碗	①胴～底 ②-③(3.4)④-	①黒色微粒含 ②オリーブ灰③還元	胎土灰色、釉厚く高台端部を除き施釉。外面連弁文。	龍泉窯系碗ＢＯ類13Ｃ末～14Ｃ前
53図46 ＰＬ26	南３区 遺構外	在地土器 スリ鉢	①破片 ②-③-④-	①砂粒多い ②にぶい黄橙③酸化	摺り目あり。	中世
53図47	２号住居	在地土器 焙烙	①口縁部片 ②-③-④-	①砂粒を含む ②にぶい黄橙③酸化		
53図48 ＰＬ26	南３区 遺構外	石製品 火打石	①破片 ②-③-④-⑤12.5g	①石英	擦った痕あり。	
53図49 ＰＬ26	北４区 遺構外表土	石製品 不明	①-②18.9③4.7④2.3 ⑤275.3g	①雲母石英片岩	一端擦っている。	

写　真　図　版

1．遺跡遠景(東上空から)

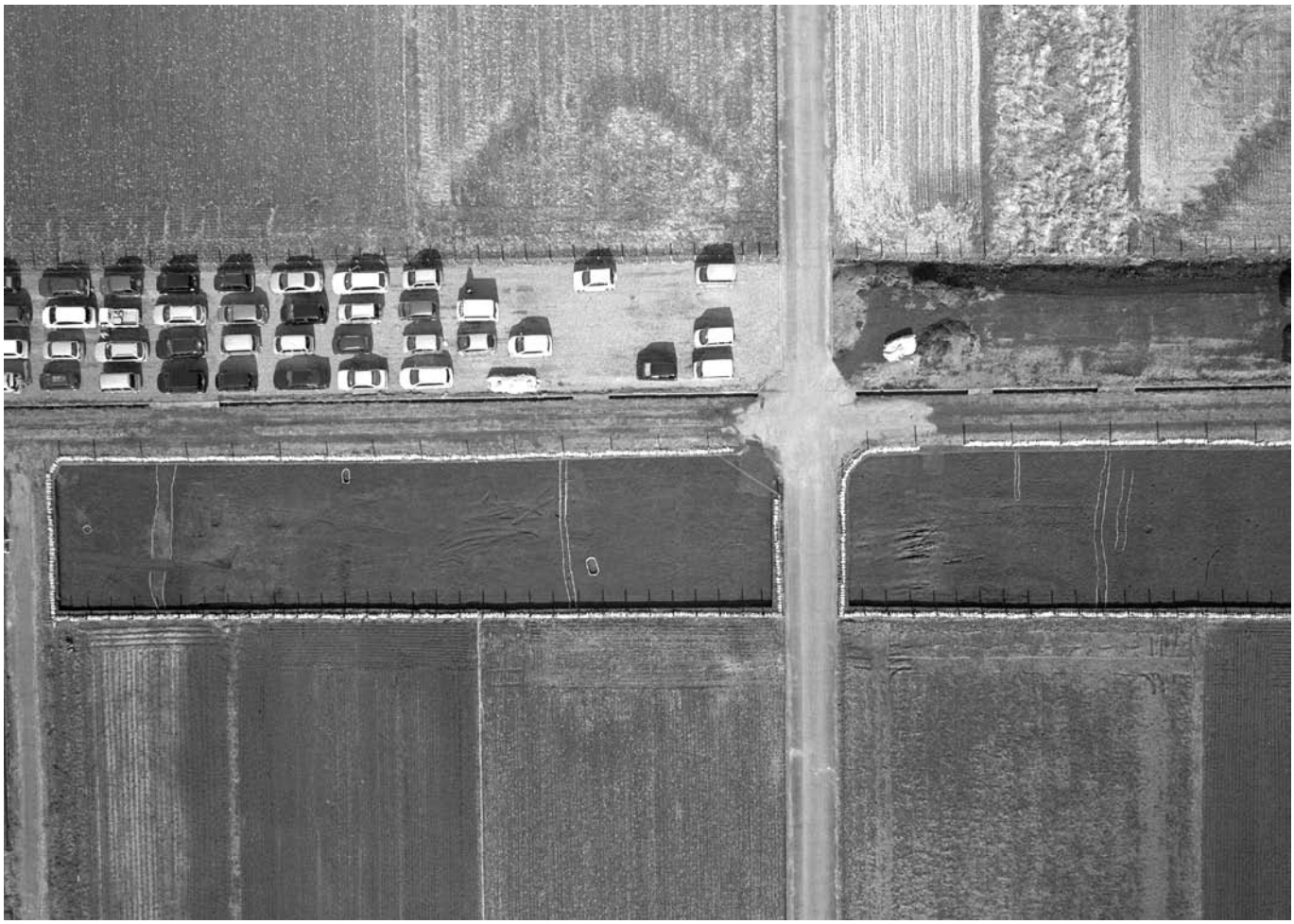
2．遺跡遠景(西上空から)

1．北２区全景（上が北）

2．北３区全景（上が北）

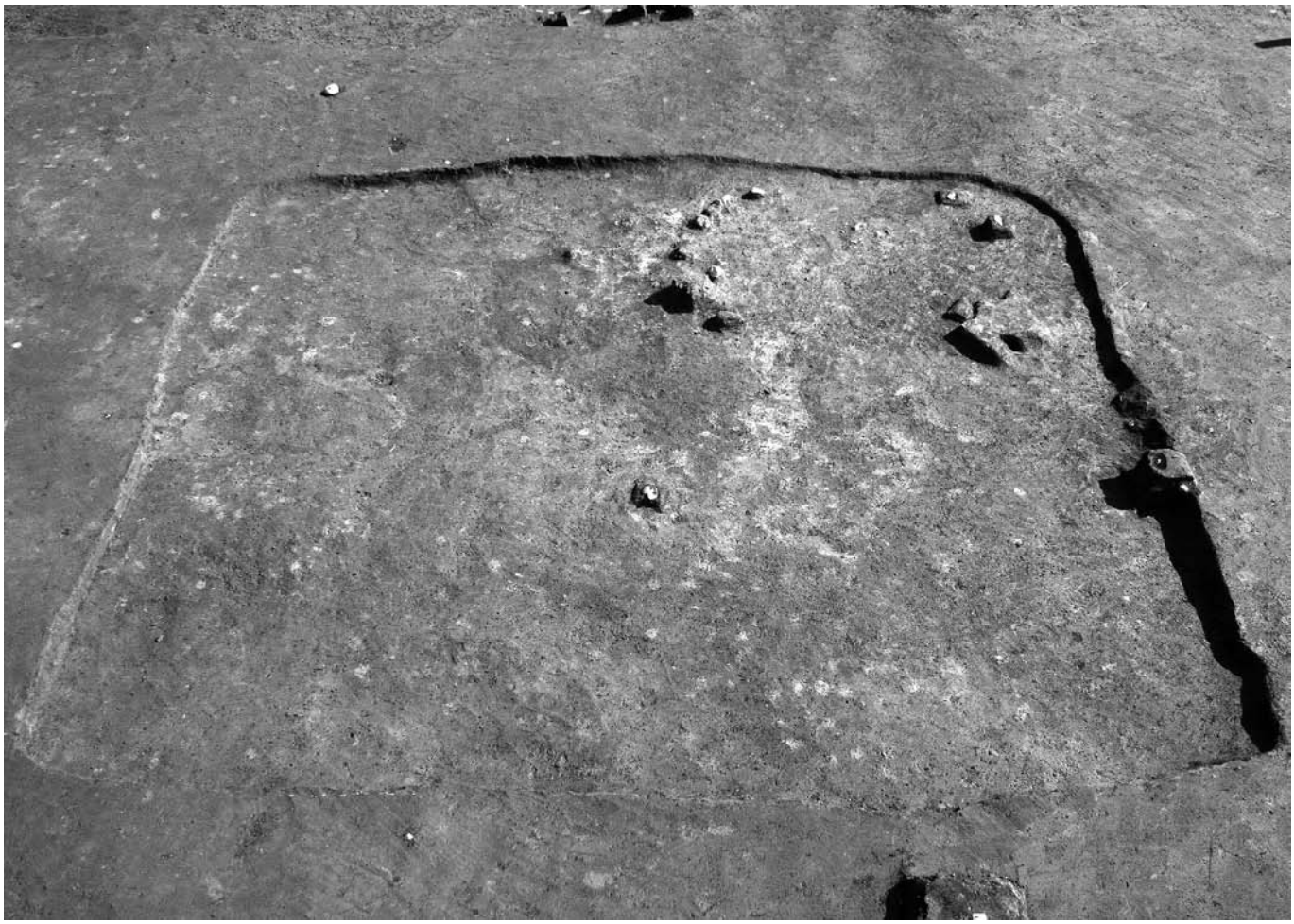
1．北４区全景（上が北）

2．南４区全景（上が北）

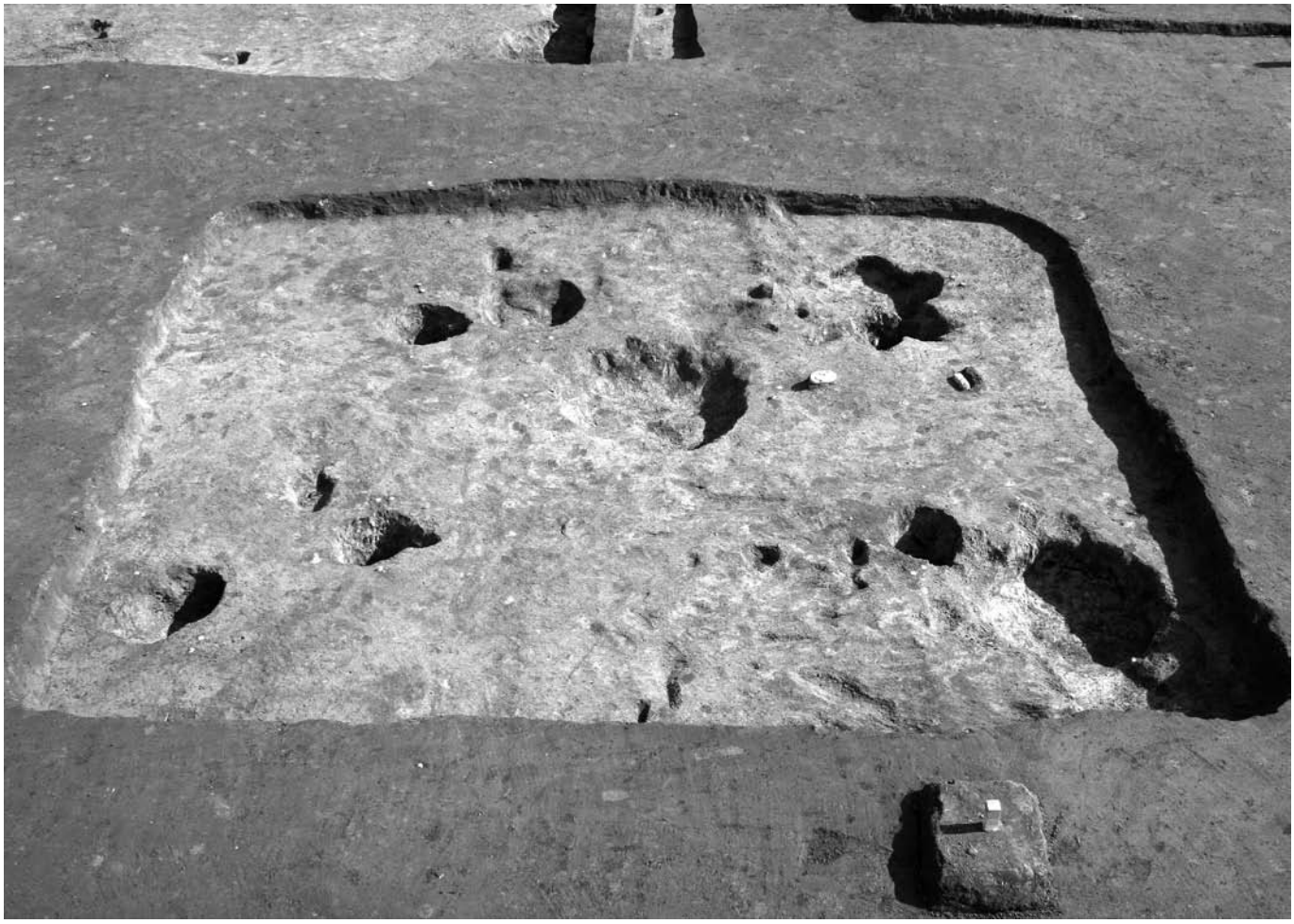


1．南２・３区全景（上が北）

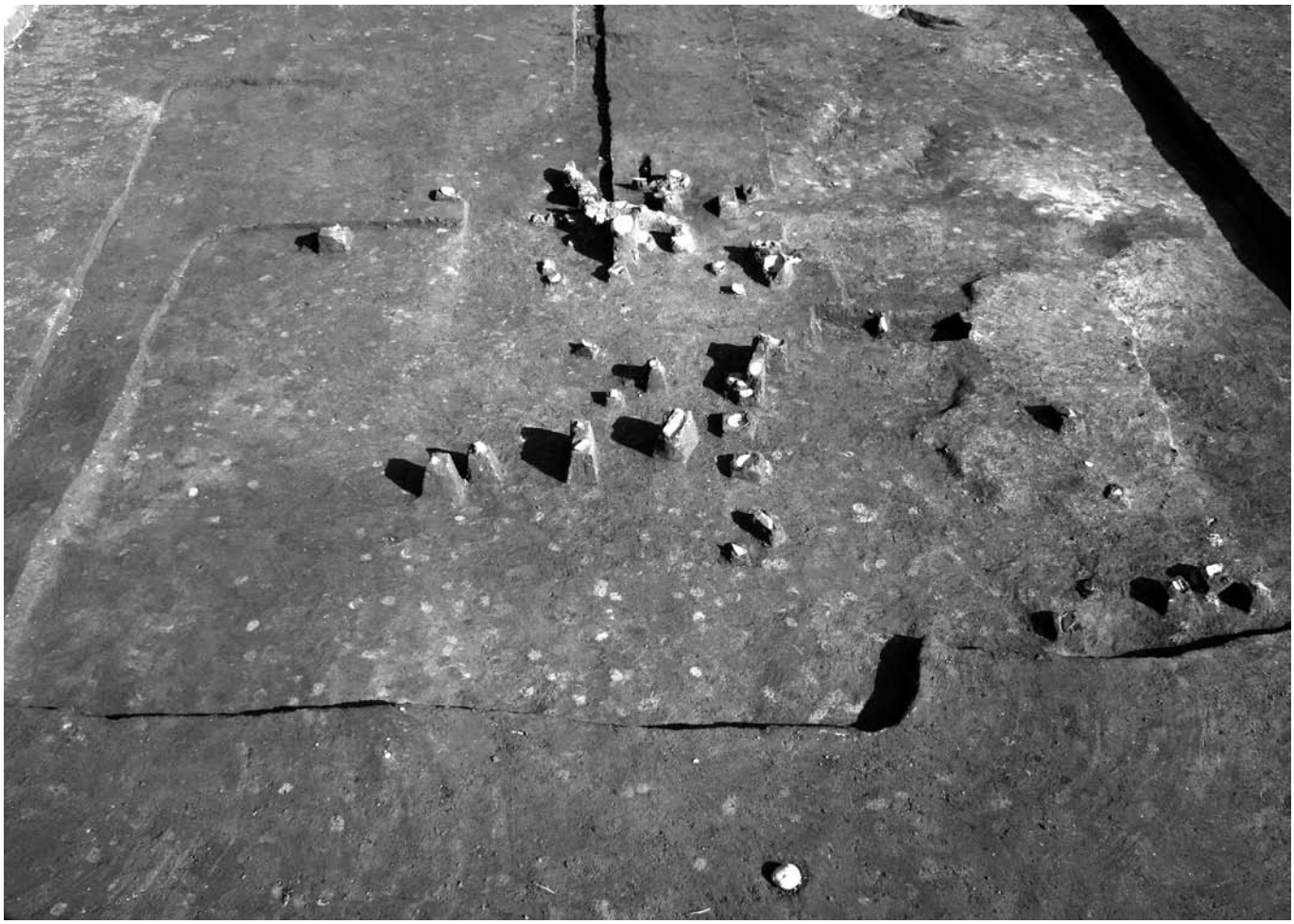
2．南１区全景（西から）



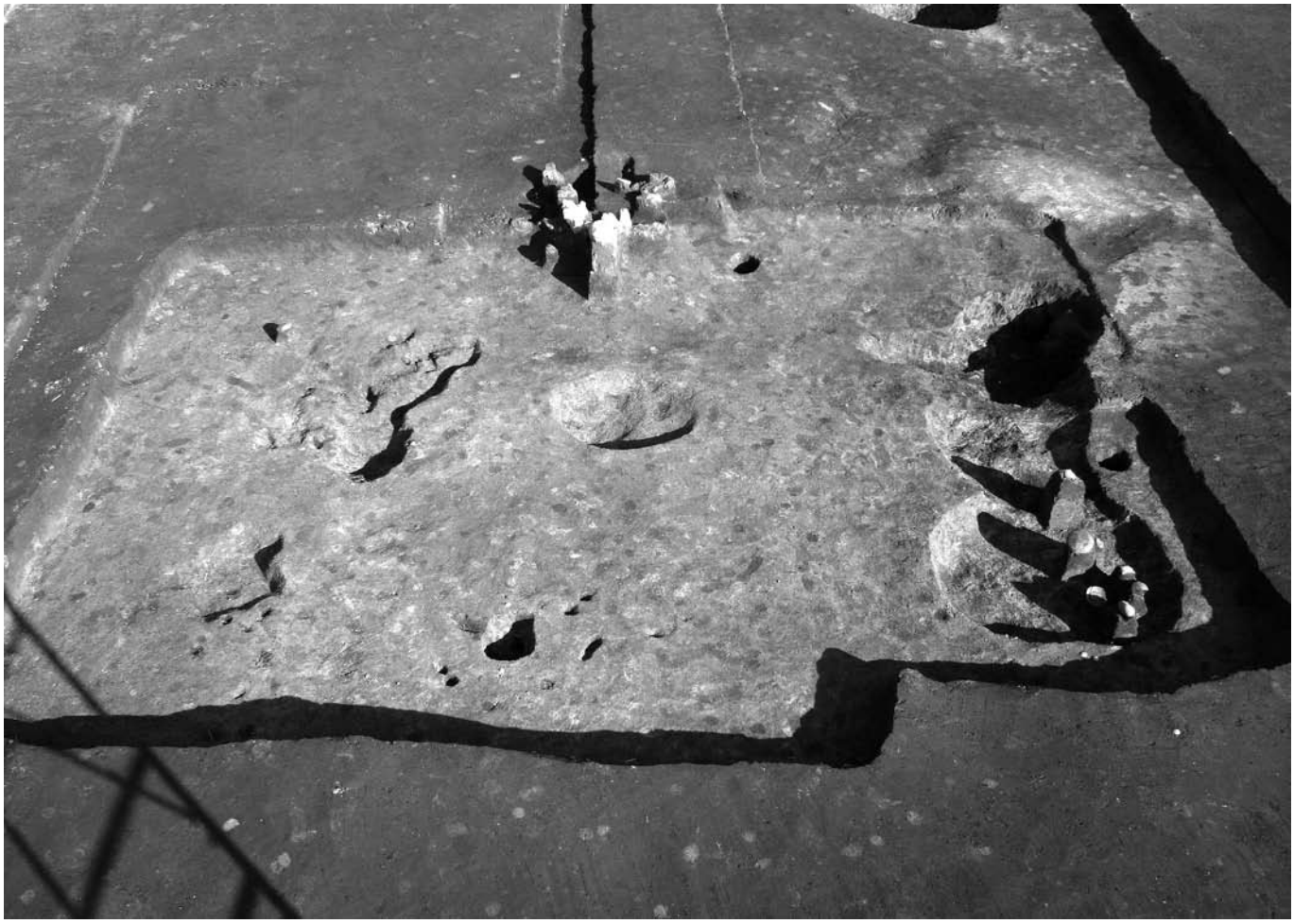
1．1号住居跡全景（西から）



2．1号住居跡掘り方全景（西から）



１．２・３号住居跡全景（西から）



２．２・３号住居跡掘り方全景（西から）

１．1号掘立柱建物跡全景（南から）

２．２号掘立柱建物跡全景（南から）

1．18号土坑全景（南から）

2．21号土坑全景（南から）

3．23号土坑全景（南から）

4．36号土坑全景（東から）

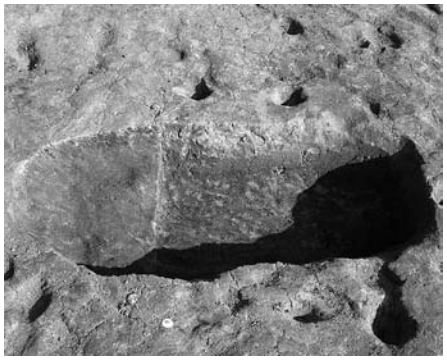
5．45号土坑全景（南から）

6．49号土坑全景（南から）

7．50号土坑全景（北から）

8．51号土坑全景（北から）

9．1号土坑全景（北から）


11．２号土坑全景（西から）

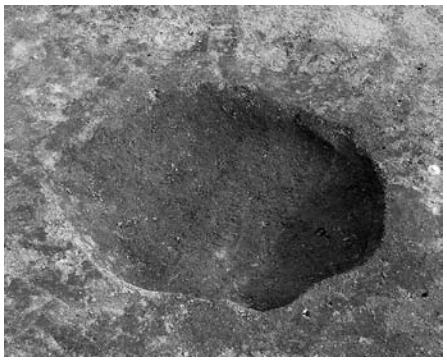
13．３号土坑全景（北から）

10．１号土坑土層断面（南から）

12．２号土坑土層断面（南から）

14．３号土坑土層断面（南から）

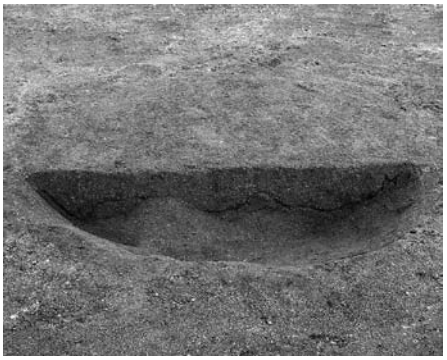
15．６号土坑全景（南から）


1．４号土坑全景（西から）

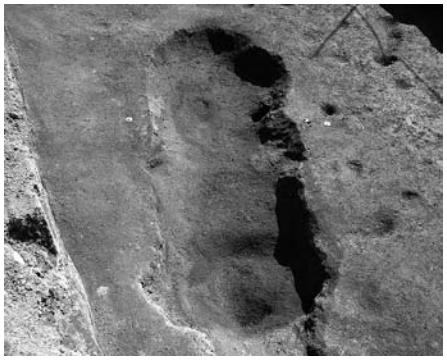
3．５号土坑全景（北から）

5．８号土坑全景（東から）

2．４号土坑土層断面（西から）


4．５号土坑土層断面（南から）

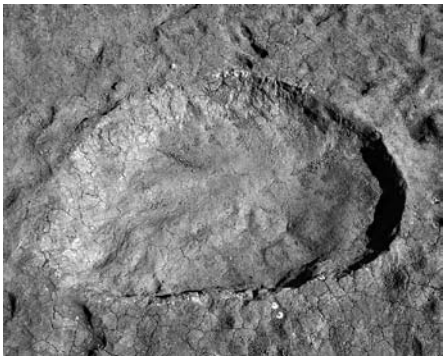
6．９号土坑全景（北から）


7．11号土坑全景（東から）

8．12号土坑全景（北から）

9．13号土坑全景（北から）

10．16号土坑全景（南から）


11．19号土坑全景（西から）

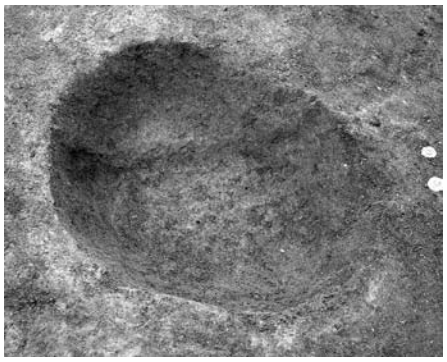
12．20号土坑全景（西から）

13．22号土坑全景（南から）

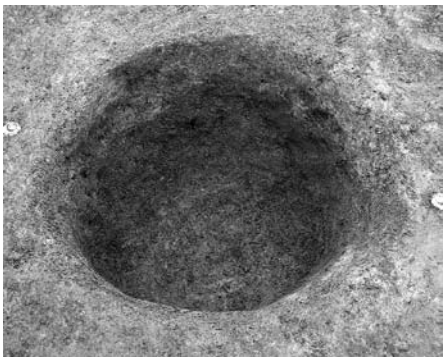
14．24号土坑全景（西から）

15．25号土坑全景（北から）

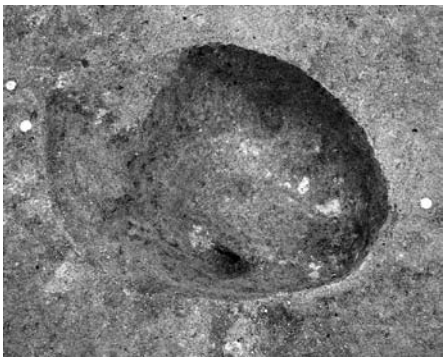
PL10



1．27号土坑全景（西から）



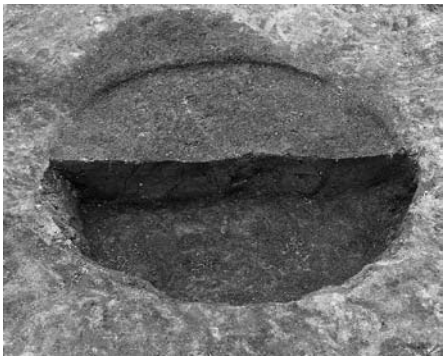
2．28号土坑全景（南から）



3．29号土坑全景（南から）

4．34号土坑全景（北から）

5．35号土坑全景（南から）



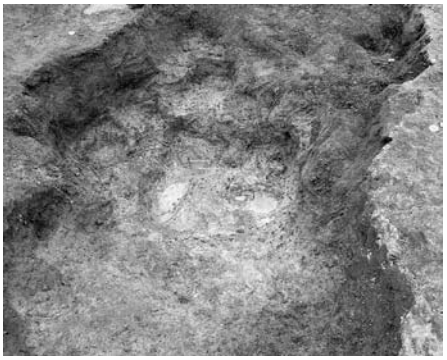
6．37号土坑全景（南から）

7．38号土坑全景（南から）

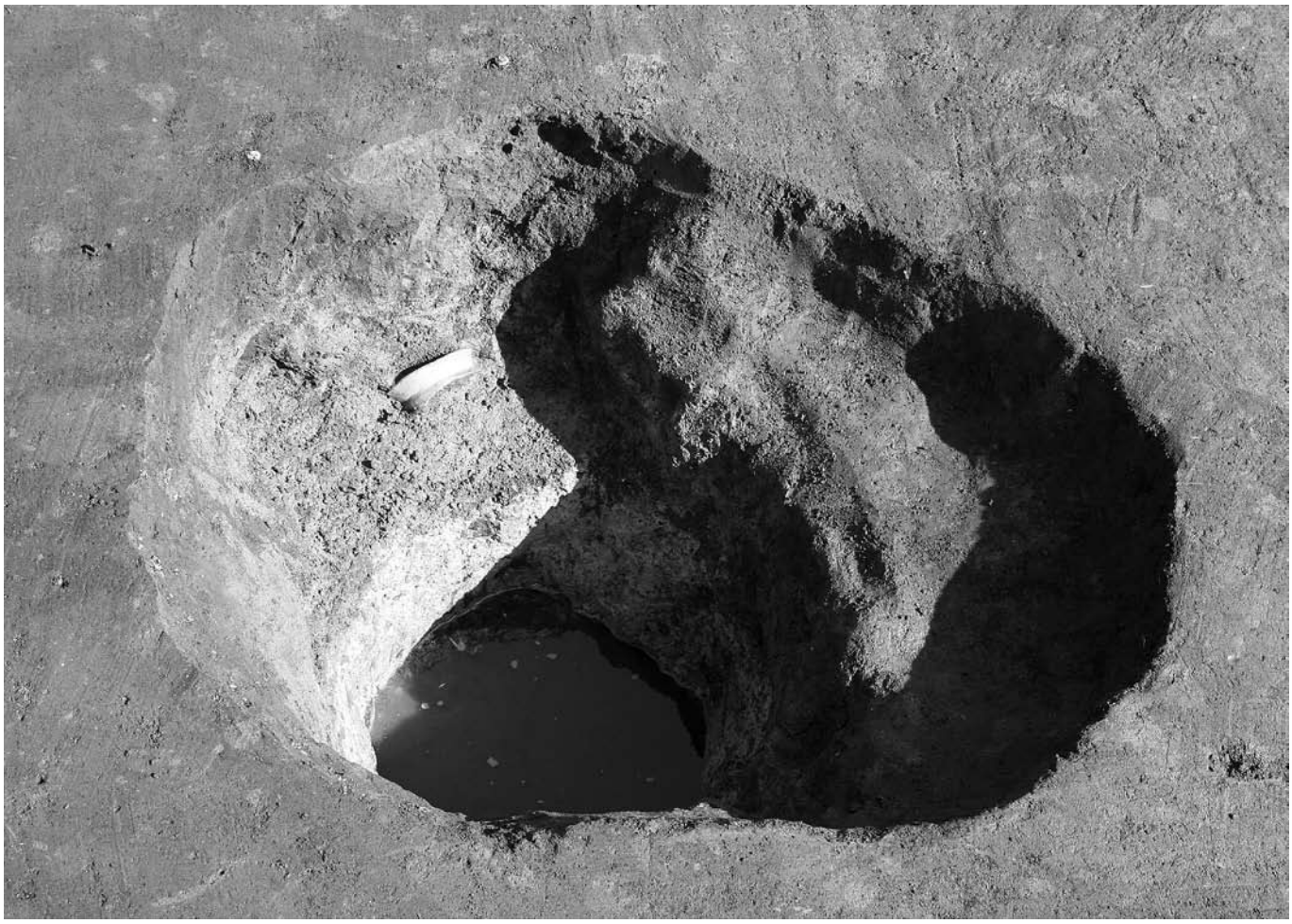
8．39号土坑全景（東から）

9．40・41・42号土坑全景（西から）

10．43号土坑全景（北から）



11．44号土坑全景（東から）

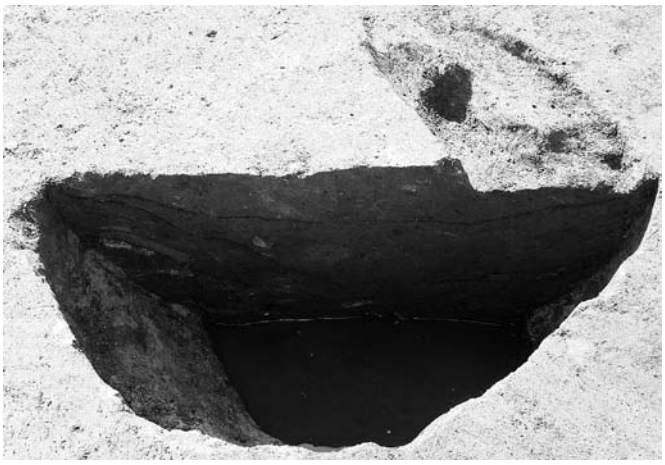


1．１号井戸跡全景（西から）

2．1号井戸跡土層断面（南東から）

3．２号井戸跡全景（北から）

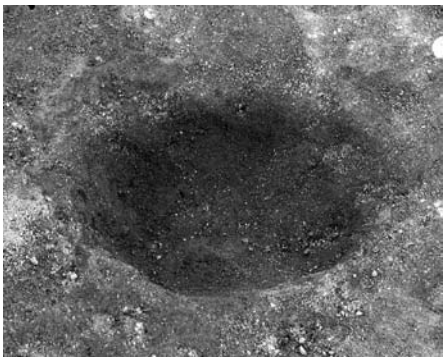
5．３号井戸跡全景（南から）



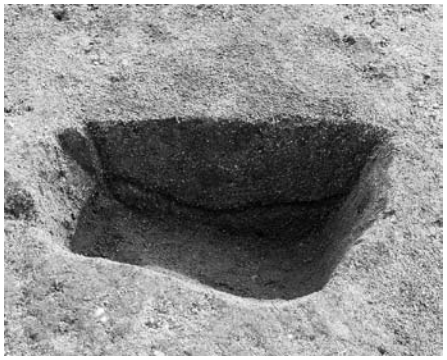
4．２号井戸跡土層断面（西から）

1．１号ピット全景（西から）

3．２号ピット全景（西から）

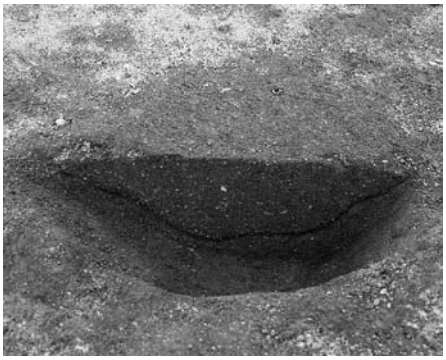


5．３号ピット全景（北から）

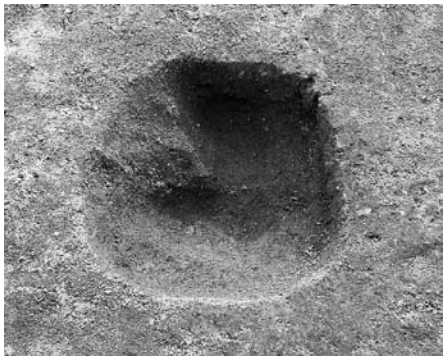


2．１号ピット土層断面（西から）

4．２号ピット土層断面（西から）



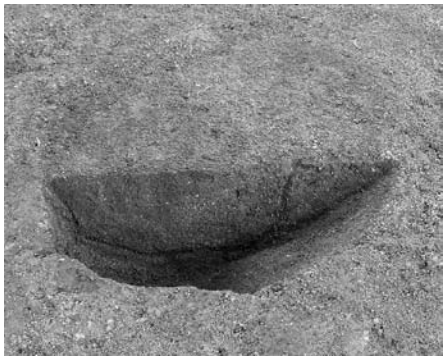
6．３号ピット土層断面（南から）



7．４号ピット全景（北から）

9．５号ピット全景（北から）

10．５号ピット土層断面（南から）



8．４号ピット土層断面（南から）

11．北４区ピット群全景（南東から）

1．９号溝全景（北から）

2．９号溝土層断面（北から）

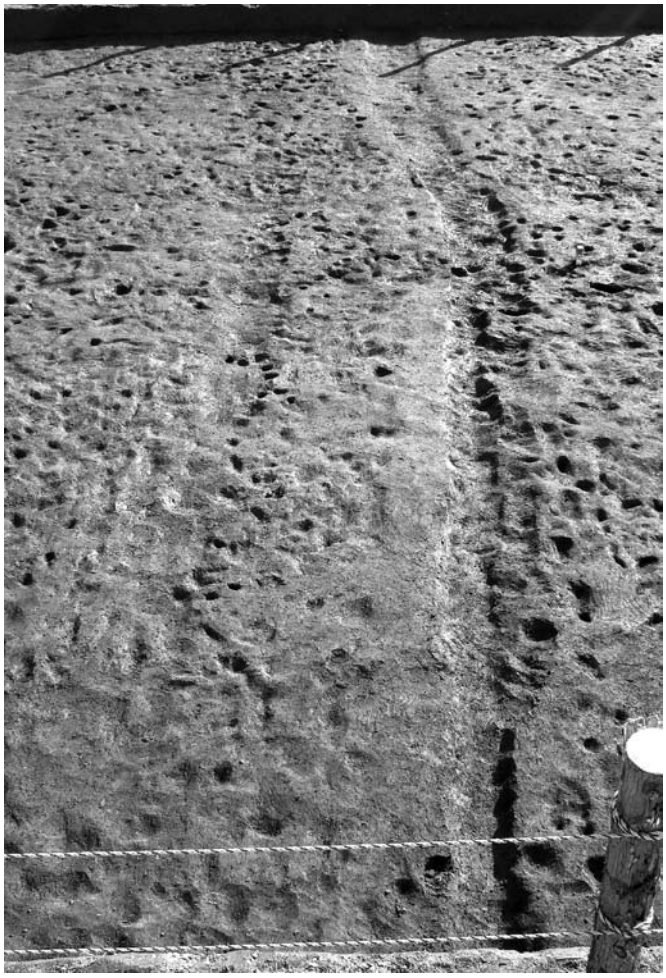
3．15号溝全景（南から）

4．28号溝全景（南から）

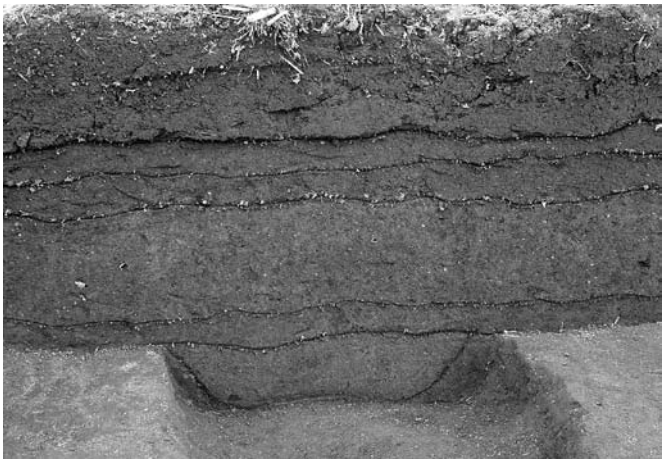
1．29号溝全景（南から）

4．５・11号溝全景（北から）

2．１・２号溝全景（北から）



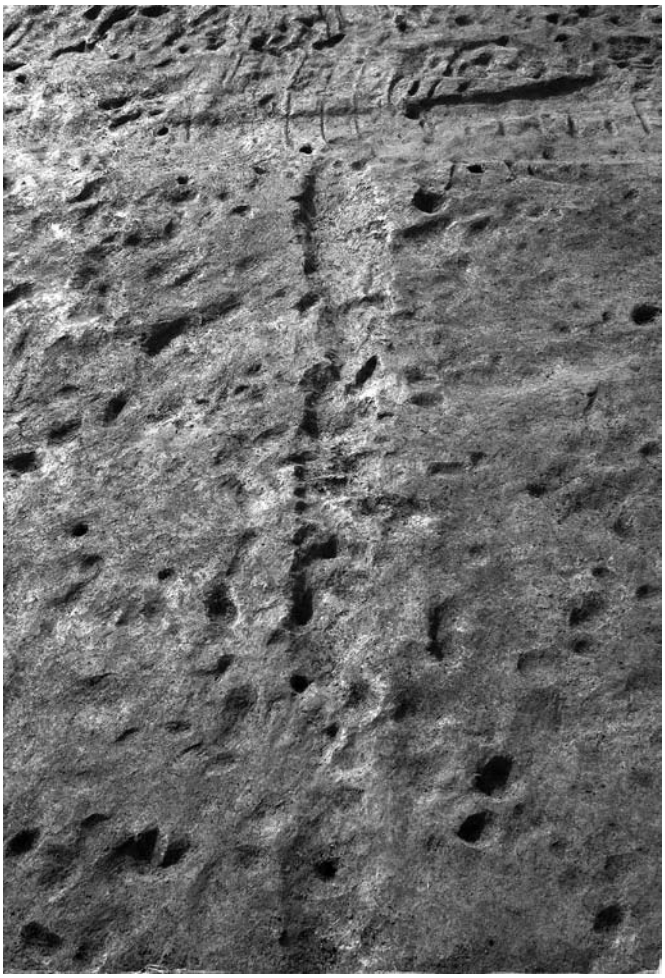
5．３・４号溝全景（北から）



3．２号溝土層断面（北から）

6．13号溝全景（北から）

1．６・７号溝全景（北東から）

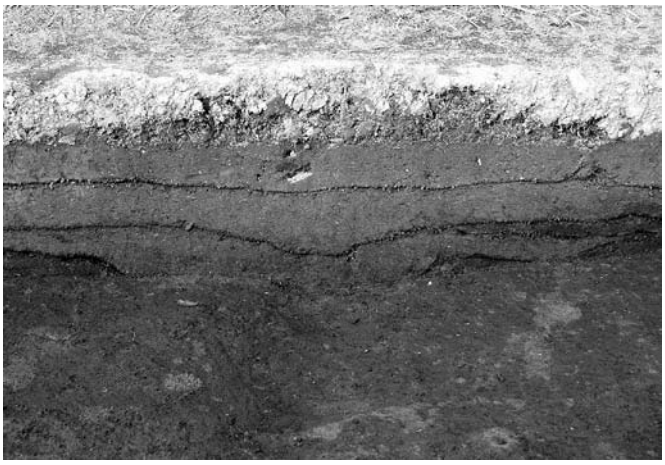


5．12号溝全景（北から）

2．７号溝土層断面（西から）

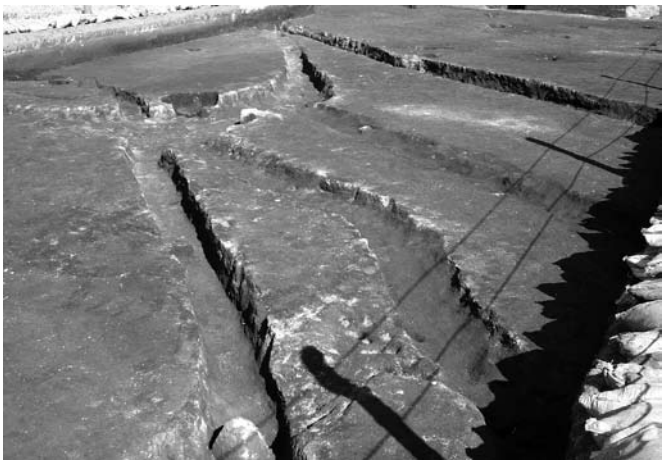
3．10号溝全景（北から）

6．14号溝全景（東から）



4．10号溝土層断面（南から）

1．16号溝全景（南から）

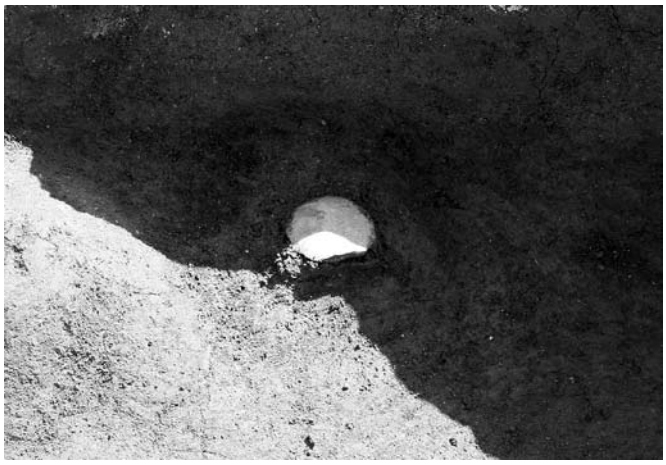


3．16 ～ 18号溝全景（南から）

2．16号溝遺物出土状況（西から）

4．18号溝遺物出土状況（西から）

5．19・46号溝全景（西から）



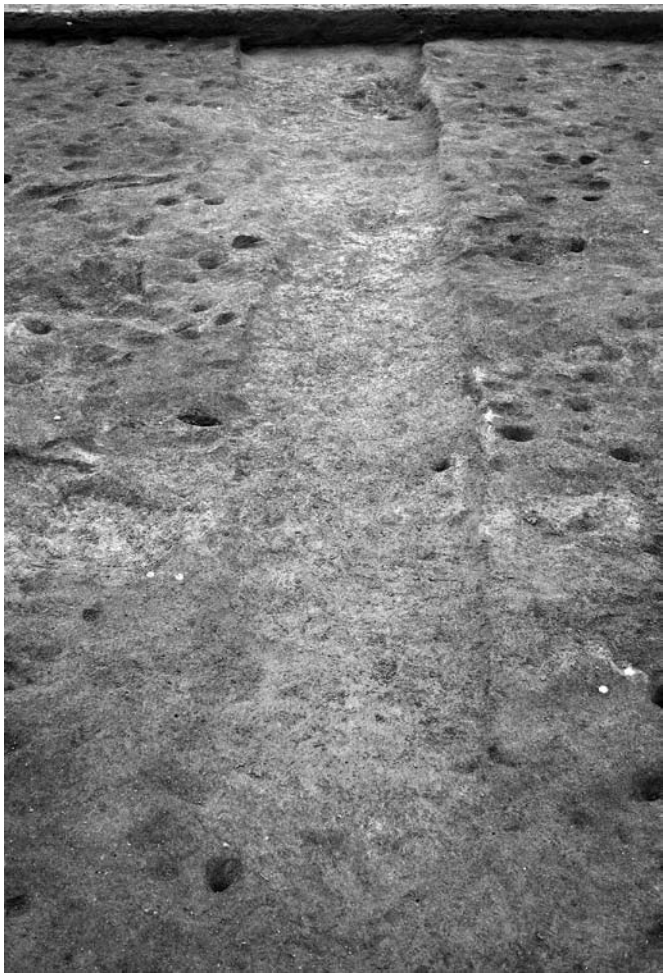
6．19号溝遺物出土状況（北から）

7．24・25号溝全景（南から）

1．20号溝全景（南から）

3．27号溝全景（西から）

2．26号溝全景（南から）



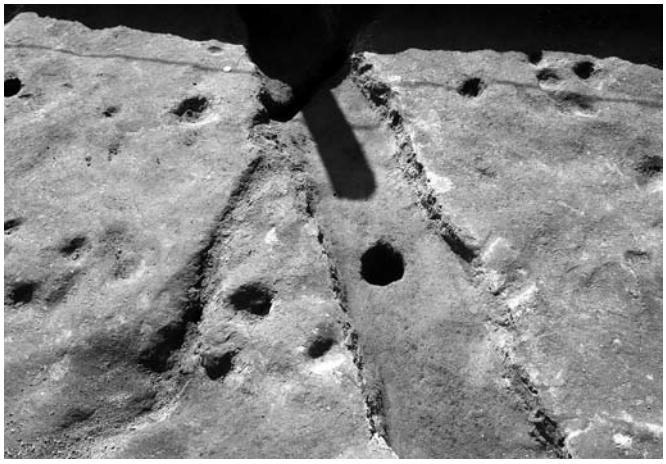
4．31号溝全景（南から）

5．32号溝全景（南西から）

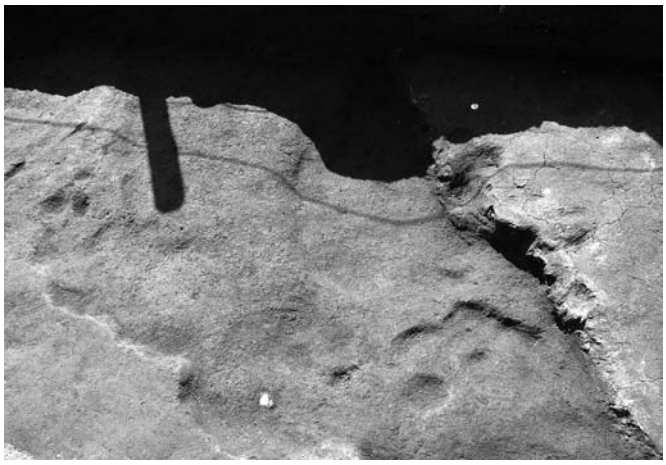
1．30号溝全景（西から）

2．34号溝全景（南から）

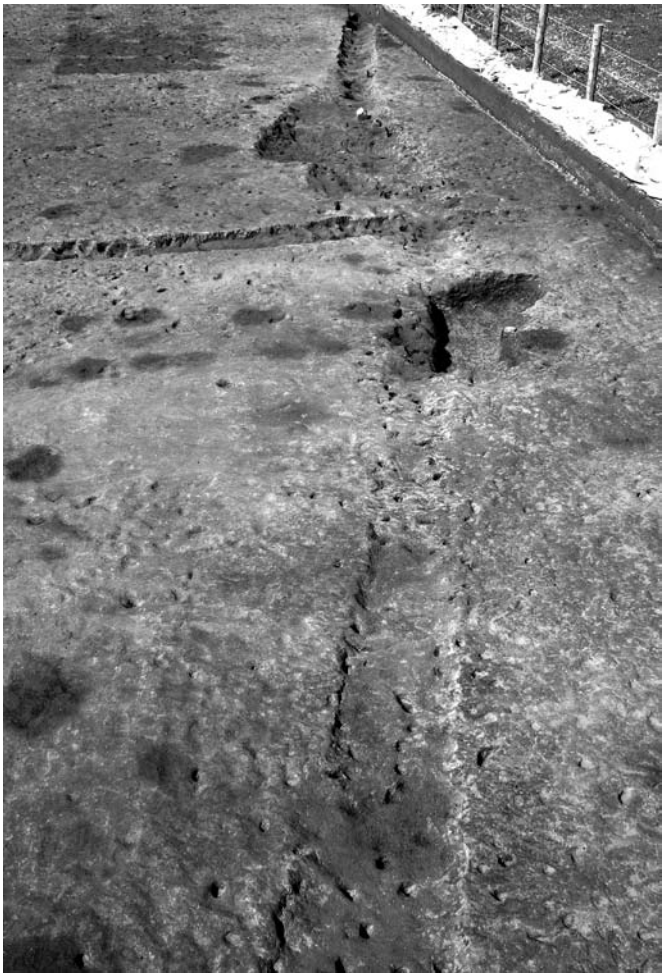
3．35号溝全景（東から）



4．36号溝全景（東から）



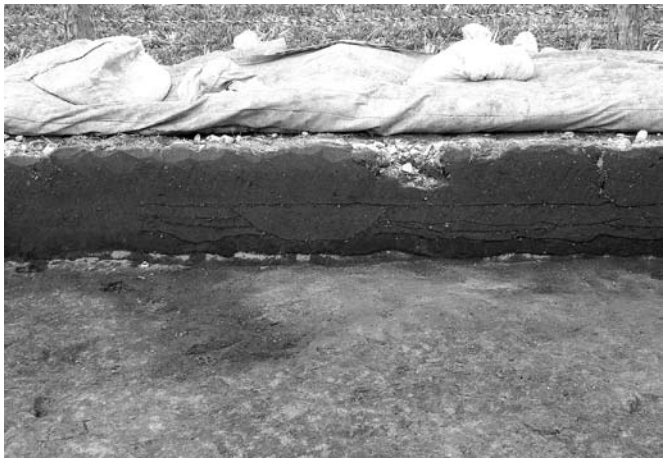
5．37号溝全景（東から）



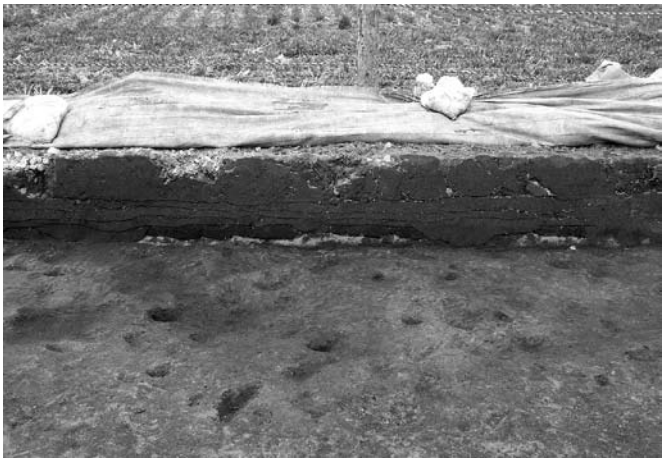
6．38号溝全景(東から)

1．38号溝全景(西から)

2．39号溝全景（南から）



3．43号溝土層断面（南から）



4．44・45号溝土層断面（南から）

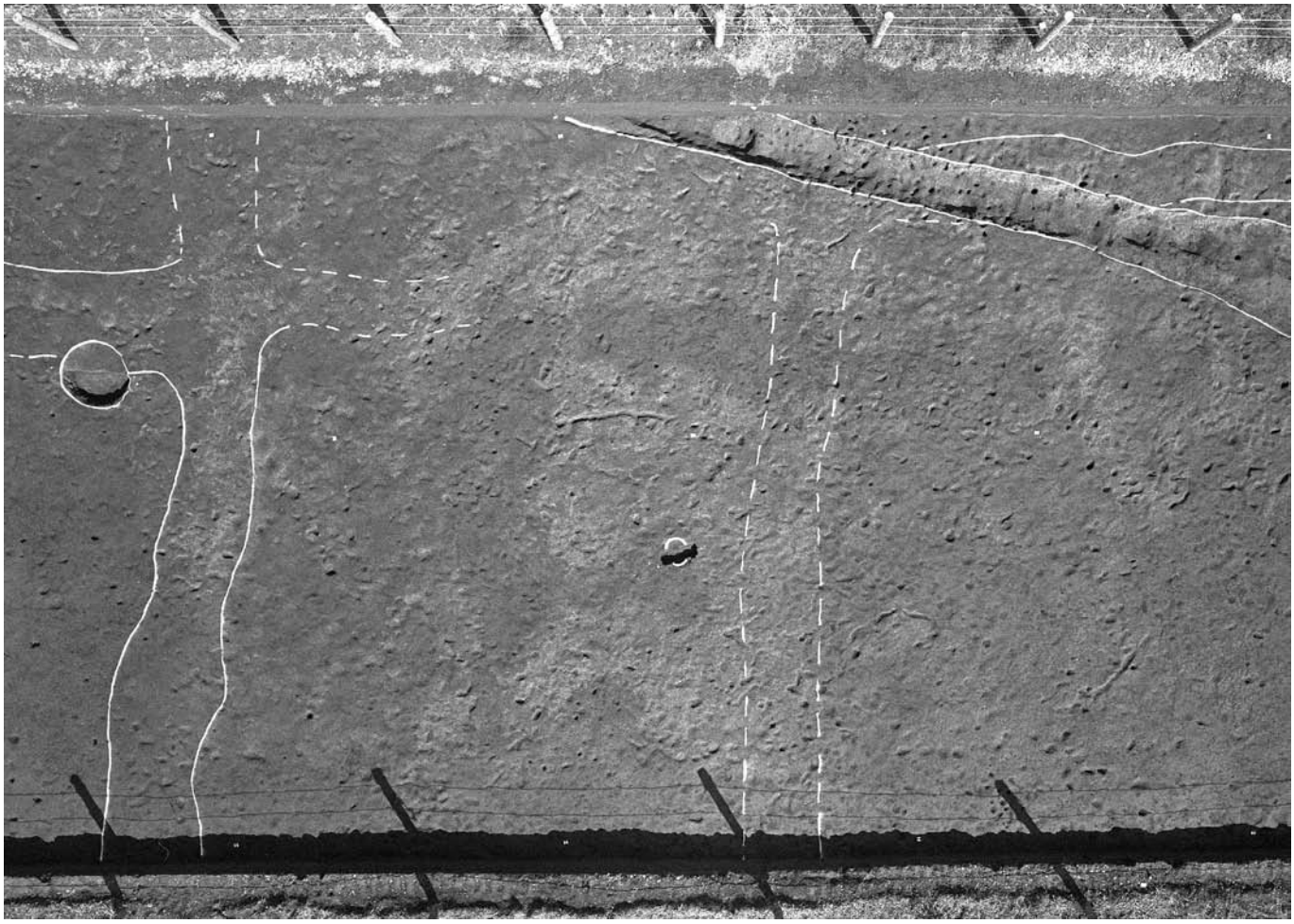
5．47号溝全景（南から）

6．48号溝全景（北から）

7．49号溝全景（北から）

8．50号溝全景（東から）

1．Ｂ下水田跡西大畦全景（上が北）



2．Ｂ下水田跡畦周辺（上が北）

1．Ｂ下水田跡西大畦近景（北から）

2．Ｂ下水田跡東大畦土層断面（南から）

3．Ｂ下水田跡土層断面（南から）

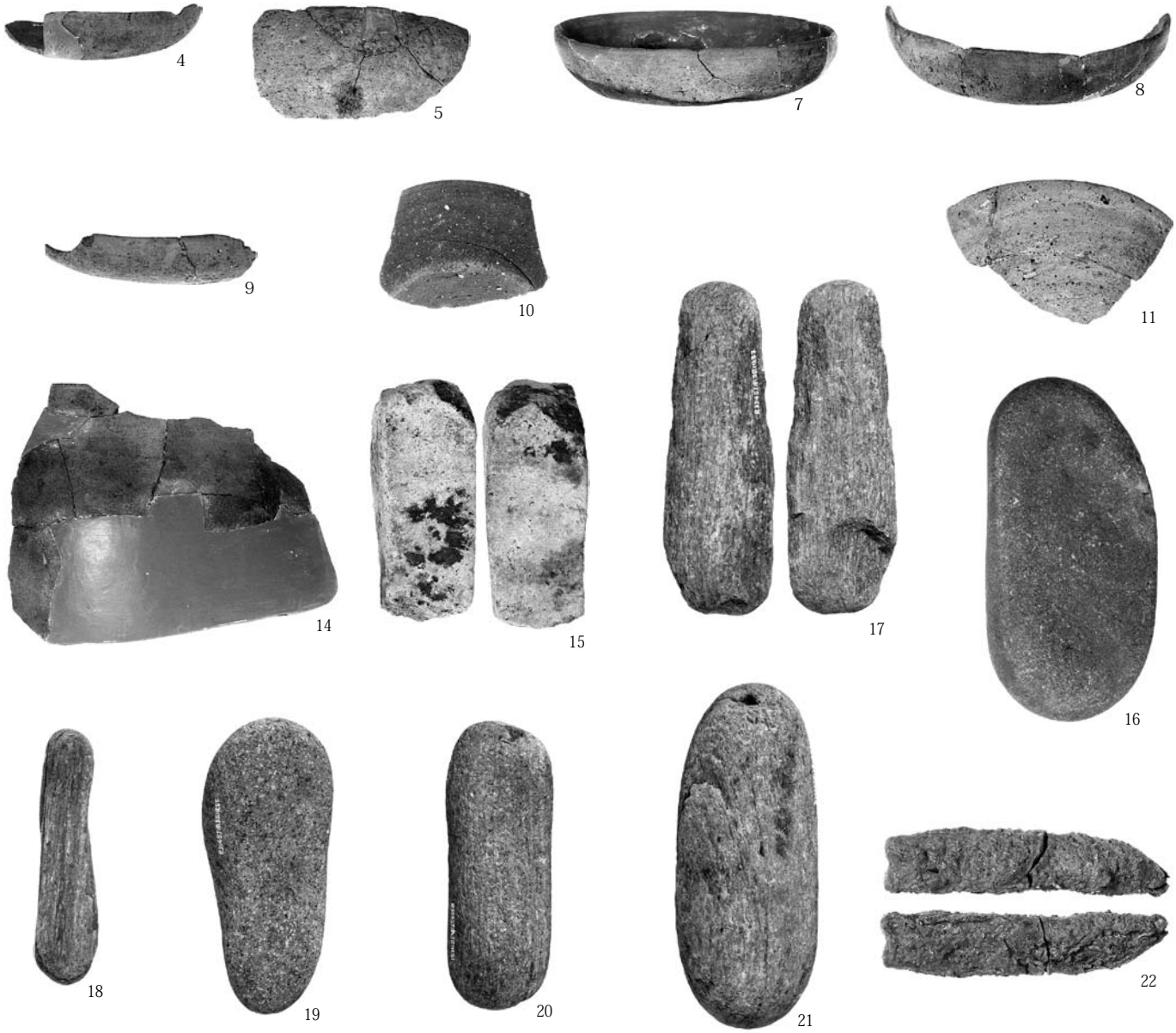
4．サク状遺構全景（東から）

5．遺物集中遺構全景（東から）

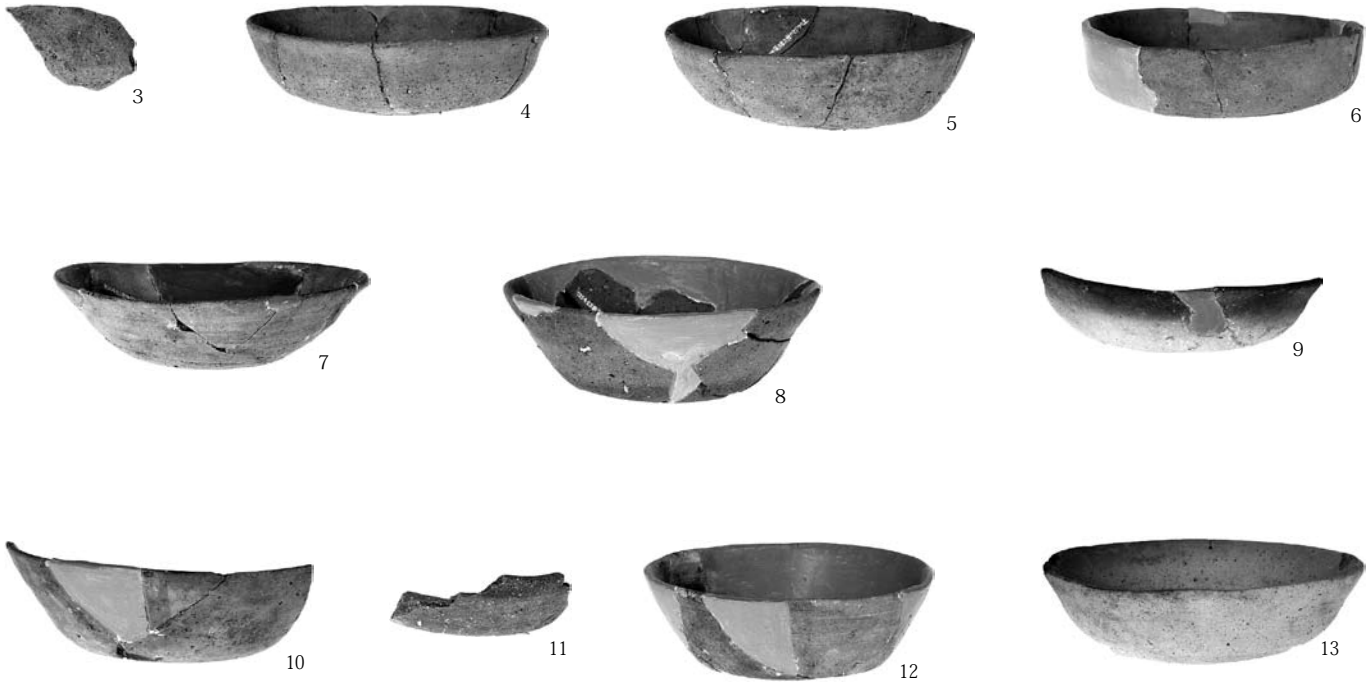
6．自然科学分析資料２地点採取断面（南から）

7．調査前風景(西から)

PL22　1・2号住居跡出土遺物



1号住居



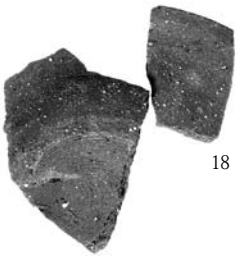
2号住居

14

15

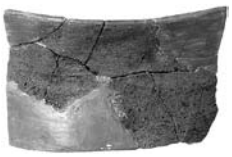
16

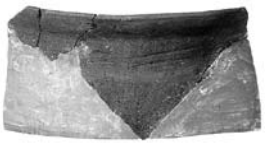
17


18

21

22

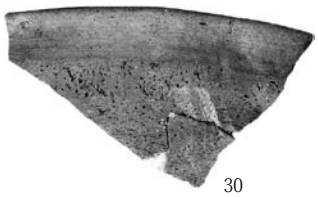

25


26

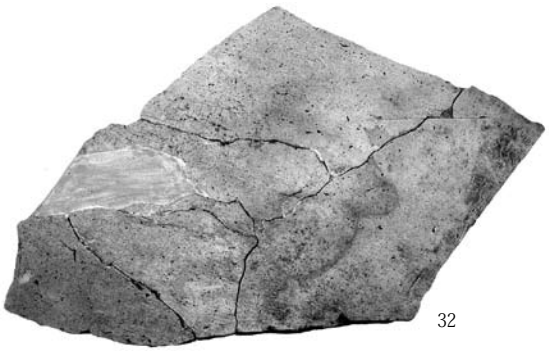
27

28

29


30

31


32

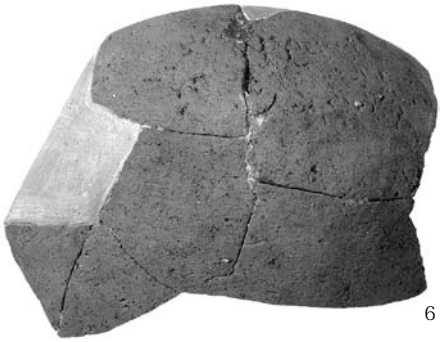
2号住居

1

2

3

4


6

5

9

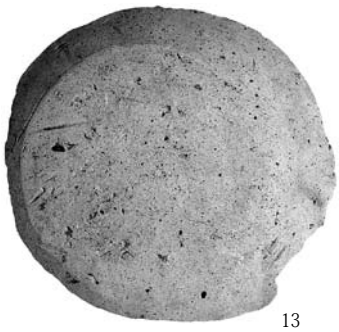
10

11

12

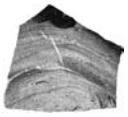
3号住居

PL24　３号住居跡・土坑・井戸・ピット溝出土遺物


13

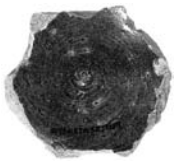
15

14


14土-1

14土-2

３号住居


39土-1

1井-1

2井-2

36ピ-1

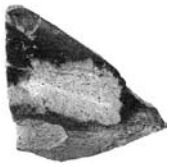
土坑・井戸・ピット

28 - 2

16 - 1

16 - 2

16 - 3


16 - 4

16 - 5

18 - 1

19 - 2

19 - 3

19 - 4

26 - 1

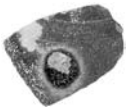
34 - 1

34 - 2

34 - 3

38 - 1

38 - 2


38 - 3

38 - 4

38 - 5

38 - 6

38 - 7

38 - 8

38 - 9

38 - 10

38 - 11

38 - 12

28・16・18・19・26・34・38号溝

1

3

5

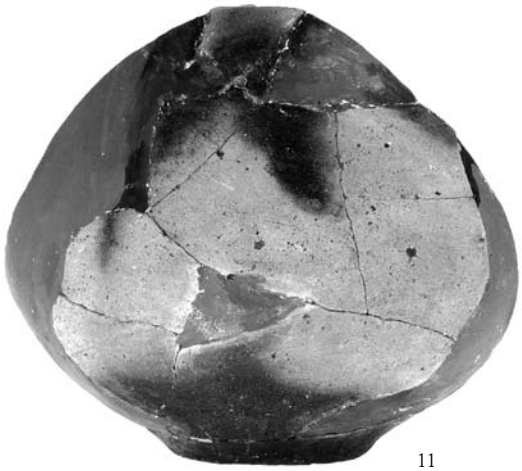
4

6

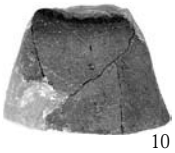
8

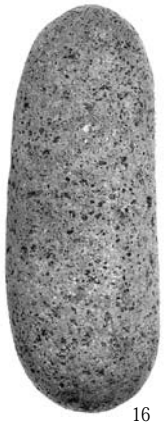
9

7


11

12


10


16

13

15

遺物集中遺構

1

2

3

4

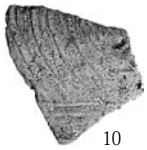
5

6

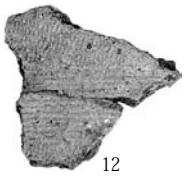
7

8

9


10

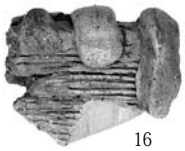
11


12

13

14

15

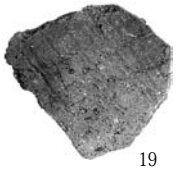

16

17

遺構外

PL26 遺構外出土遺物

18


19

20

21

22

23

24

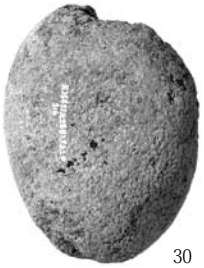
25

26

27

28

29


30

31

32

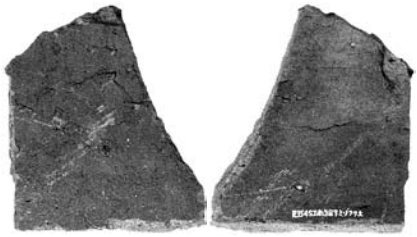
35

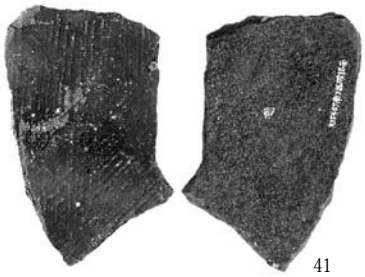
37

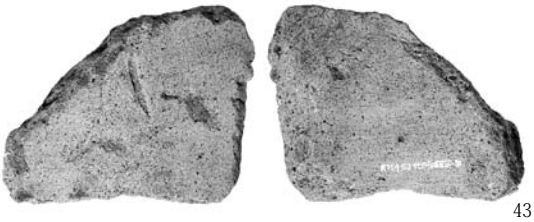
38

40

39


42


41


43

49

44

45

46

48

報　告　書　抄　録

ふりがな	しもさいだじゅうどやくしいせき
書名	下斎田重土薬師遺跡
副書名	国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	４８６
編著者名	飯森康広　関晴彦　橋本淳　岩崎泰一
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090129
作成法人ＩＤ	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	しもさいだじゅうどやくしいせき
遺跡名	下斎田重土薬師遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきししもさいだまちあざじゅうどやくし
遺跡所在地	群馬県高崎市下斎田町字重土薬師
市町村コード	10202
遺跡番号	2694
北緯(日本測地系)	361821
東経(日本測地系)	1390528
北緯(世界測地系)	361833
北緯(世界測地系)	1390517
調査期間	20090101－20090331/20090817－20100331
調査面積	5310
調査原因	道路建設工事
種別	集落／田畑／散布地
主な時代	縄文／古墳／平安／中世・近世
遺跡概要	散布地－縄文－土器＋石器／その他－古墳－溝３＋土器集中１－土器／集落－奈良・平安－竪穴住居３＋溝２－土器＋石器＋鉄器／田畑－平安－水田１／集落－中世・近世－掘立柱建物２＋土坑36＋溝46＋ピット24－陶磁器＋石器
特記事項	平安時代後期水田跡では大畦が検出され、周辺に想定される条里水田の手がかりとなる。
要約	本遺跡は高崎市東南部に位置する縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。奈良・平安時代の竪穴住居跡３軒と平安時代後期水田跡を検出した。このほか、中世・近世に比定される掘立柱建物跡などが検出された。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第486集

下斎田重土薬師遺跡

国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 22 年（2010）1 月 22 日　印刷
平成 22 年（2010）1 月 29 日　発行
編集・発行 / 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒 377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地２
電話（0279）52-2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/
印刷 / 上武印刷株式会社